

宮城県仙台市

# 郡山遺跡 31

平成22年度発掘調査概報  
郡山遺跡・大野田官衙遺跡・法領塚古墳



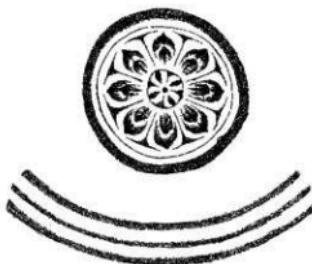
2011.3

仙台市教育委員会

宮城県仙台市

# 郡山遺跡 31

平成22年度発掘調査概報  
—— 郡山遺跡・大野田官衙遺跡・法領塚古墳 ——



2011.3

仙台市教育委員会



六反田遺跡7F-1区SK9木棺墓全景（北西から）



法領塚古墳全景（南西から）

## 序 文

郡山遺跡の発掘調査事業は、昭和55年の国庫補助事業による確認調査を開始して以来31年目となりました。平成18年7月に「仙台郡山官衙遺跡群 郡山官衙遺跡 郡山廃寺跡」として国史跡に指定され、今後の歴史公園を中心とした街づくりに大きな一歩を踏み出しているところです。31年のながきにわたり、発掘調査の継続が出来ましたのも遺跡の究明にご助言をいただいた先達の諸氏や、地元の地権者の皆様からのご協力があったからと感じております。

本年度は水道管理設に伴う郡山遺跡の調査と郡山遺跡との関連が考えられる大野田官衙遺跡の調査、さらに、聖ウルスラ学院英智における校舎建設に関連し、法領塚古墳の追加調査を実施し、それらの成果を本書にまとめました。郡山遺跡の調査では、第152次調査で検出したものと同一の可能性があるⅠ期官衙の材木列を確認し、大野田官衙遺跡では官衙の東辺の区画溝を確認しました。法領塚古墳では新たに狭道と前庭部を確認し、全長が直径約55mの円墳であったということが分かりました。それぞれ解明に進展があったものと考えております。

これまでの調査成果が遺跡保護と整備に活かされ、さらに活用される資料となるよう努めてまいります。今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に際しまして、ご指導、ご協力くださいました皆様、また3月11日の大震災以降、刊行までご努力下さいました方々に深く感謝申し上げる次第です。

平成23年3月

仙台市教育委員会  
教育長 青沼 一民

## 例 言

1. 本書は国庫補助事業による市内遺跡調査のうち、大野田官衙遺跡の範囲確認調査、法領塚古墳の発掘調査報告と、市道上の工事に関連した郡山遺跡の発掘調査報告書である。

2. 本概報は調査速報を目的としている。執筆は以下のように分担した。

第1章 佐藤正弥

第2章 長島栄一、熊谷敏哉

第3章 I～IV…森田賢司、佐藤正弥 V…及川謙作

第4章 I～III…森田賢司 IV…大久保弥生 V…森田賢司、大久保弥生

第5章 森田賢司

遺物写真撮影は猪狩俊哉が、遺物観察表、遺構記載表の作成は森田賢司、熊谷敏哉が、図版作成は森田賢司、佐藤正弥、熊谷敏哉が、編集は森田賢司が行った。

3. 本書の内容は既に公開されている「平成22年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」、「第37回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」に優先する。

4. 本書を作成するにあたり、下記の方に種々の御教示を頂いた。記して感謝の意を表します（敬称略）

松井一明

5. 本調査に係わる出土遺物、尖端図、写真などの遺物は仙台市教育委員会が保管している。

## 凡 例

1. 平面図に示した座標系について、第2章の図は任意に設定した（X=0、Y=0）を通る磁北線（1984年頃の偏角で、真北から $6^{\circ}44'7''$ 西傾）を基準にしたものであり、第3章の図は平面直角座標系X（旧測地系）、第4章の図は世界測地系である。

2. 文中および図中の方位は真北を基準としている。但し、第2章の図のみ磁北を示す。

3. 遺構の略称は次のとおりである。遺構番号は郡山遺跡、大野田官衙遺跡が遺跡全体の通しで、法領塚古墳は発見順である。但し、ピットは除く。

SA：柱列 SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SK：土坑 SX：性格不明遺構 P：ピット

4. 遺物の略号は次のとおりである。登録番号は郡山遺跡、大野田官衙遺跡が遺跡全体の通しで、法領塚古墳は発見順である。

A：縄文土器 B：弥生土器 C：土師器（非クロコ調整） D：土師器（ロクロ調整）

E：須恵器 F：丸瓦 G：平瓦 I：陶器

Ka：剥片石器 Kc：礫石器 Na：鉄製品

5. 土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原1989）を使用した。

6. 表中の（ ）が付いた数字は図上復元した推定値である。

7. 本書中の地形図は、国土地理院発行の1:25000「仙台東南部」、「仙台東北部」と1:10000「長町」、「西多賀」の一部を使用している。

8. 本文中の「灰白色火山灰」は県内で広域に分布する「灰白色火山灰」（山田・庄子1980）と同義である。この火山灰は現在「十和田a火山灰（To-a）」（大池1972）と推定されており、降下年代は西暦915年とされている（町田・新井1992、小口2003など）。

9. 出上した鉄製品、剥片の重量計測にはタニタ社製のスーパーミニ1220を用いた。

# 目 次

## 第1章 はじめに

I. 郡山遺跡・仙台平野の遺跡群の調査体制.....	1
II. 調査計画と実績.....	1
1. 調査計画.....	1
2. 調査実績.....	2

## 第2章 郡山遺跡 第203次発掘調査

I. 調査にいたる経過と調査方法.....	3
II. 基本層序.....	5
III. 遺構と遺物.....	5
IV. まとめ.....	6

## 第3章 大野田官衙遺跡

I. 調査概要	
1. 調査計画.....	7
2. 調査方法.....	8
3. 基本層序.....	8
II. 2a区の調査	
1. 調査概要.....	10
2. 基本層序.....	10
3. 遺構と遺物.....	11
4. まとめ.....	19
III. 2b区の調査	
1. 調査概要.....	32
2. 基本層序.....	32
3. 遺構と遺物.....	32
4. まとめ.....	33
IV. 2c区の調査	
1. 調査概要.....	39
2. 基本層序.....	41
3. 遺構と遺物.....	41
4. まとめ.....	43
V. 六反田遺跡7F-1区の調査	
1. 調査概要.....	45
2. 基本層序.....	46
3. 遺構と遺物.....	46
4. まとめ.....	52

## 第4章 法領塚古墳 第2次発掘調査

### I. 調査概要

1. 調査経過	55
2. 遺跡概要	55
3. 調査方法	58
II. 基本層序	59
III. 発見遺構	59
IV. 出土遺物	66
V. まとめ	71

## 第5章 総括

I. 那山遺跡	93
II. 大野田官衙遺跡	93
III. 法領塚古墳	96

# 第1章 はじめに

## I. 郡山遺跡・仙台平野の遺跡群の調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 文化財課長 吉岡恭平

整備活用係 係長 長島栄一、主査 木村浩二、主任 熊谷智顕、主事 森田賢司、

文化財教諭 工藤慶次郎、文化財教諭 佐藤正弥、文化財教諭 熊谷敏哉

調査調整係 主幹兼係長 佐藤甲一、主査 荒井格、主査 平間亮輔、主事 廣瀬真理子、

主事 大久保弥生、主事 猪狩俊哉、主事 及川謙作、文化財教諭 吉野信、

文化財教諭 鈴木健弘

調査担当職員 ○郡山遺跡 荒井格、廣瀬真理子、鈴木健弘

○大野田官衙遺跡 森田賢司、佐藤正弥、熊谷敏哉、平間亮輔、及川謙作

○法領塚古墳 木村浩二、森田賢司、荒井格、猪狩俊哉

発掘調査、整理作業を適正に実施するため、「郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導員会」を設置し、指導・助言を受けた。

委員長 今泉隆雄（東北大学文学部名誉教授 古代史）、副委員長 進藤秋輝（前東北歴史博物館館長 考古学）

委員 囲田茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授 考古学）、桑原滋郎（多賀城市文化財保護委員会会長 考古学）、須藤 隆（東北大学文学部名誉教授 考古学）、宮本長二郎（別府大学非常勤教授 建築学）、

渡部育子（秋田大学教育文化学部教授 古代史）

六反田遺跡 7F-1区、法領塚古墳の発掘調査では次の方からも指導・助言を受けており、感謝申し上げる。

東北大学埋蔵文化財調査室 藤沢 敦、東北学院大学文学部教授 辻 秀人

さらに、鉄製品のX線写真撮影にあたり、東北歴史博物館より御協力を得たことを感謝申し上げる。

また発掘調査にあたり、富沢駅周辺区域整理事業地内の地権者と聖ウルスラ学院より協力を得たことを付記する。

## II. 調査計画と実績

### 1. 調査計画

平成22年度に計画された本書掲載の調査は、国庫補助事業である「市内遺跡発掘調査」の一部として計画され、郡山遺跡、大野田官衙遺跡、陸奥国分寺跡を対象としていた。このうち郡山遺跡については、個人住宅の建築に対応した調査である。郡山遺跡では第5次5ヶ年計画終了後に、平成17年度から補足調査を実施してきたが、平成20年度から郡山遺跡の南西1.5kmにある人野田官衙遺跡で、郡山遺跡Ⅱ期官衙と関連すると考えられる官衙跡が発見された。その範囲と性格究明が急務となったため、昨年度に引き続き郡山遺跡の補足調査を休止して調査計画を立案した。さらに平成18年度以降実施していた陸奥国分寺跡の整備計画策定のための調査計画を立案した。今年度の内容については平成22年3月5日に開催された郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会において審議がなされ、了承を得ている。

発掘調査総経費は37,753,000円、国庫補助金額18,876,000円の予算で計画し、当初は人野田官衙遺跡発掘調査に10,539,670円、陸奥国分寺跡発掘調査に2,899,240円、郡山遺跡の個人住宅対応に4,158,760円、「仙台平野の遺跡群」として郡山遺跡以外の市域全体の個人住宅対応に7,430,000円、仙台城跡に12,726,000円とした。これによって、本書の掲載に関わる発掘調査の実施計画を以下のように立案した。

調査次数	調査地区	調査予定期積	調査予定期間	調査原因
郡山遺跡	官衙中心部など5箇所	200m <sup>2</sup>	4月～2月	個人住宅建築
大野田官衙遺跡	官西区曲渕東辺	1,000m <sup>2</sup>	4月～8月	範囲確認調査
陸奥国分寺跡	陸奥国分寺跡東辺、寺城北部	100m <sup>2</sup>	9月～10月	範囲確認調査

表1 平成22年度発掘調査計画

## 2. 調査実績

郡山遺跡については、開発に伴う事前調査として3箇所、個人住宅の建築等で1箇所の調査を実施した。なお、店舗建築に伴う第200次調査は仙台市文化財調査報告書第391集で報告している。また、水道管理設工事に伴う第203次調査は官衙中心部での調査であるため、これまでの調査の関連から報告は本書で扱った。

大野田官衙遺跡については、当初4箇所の調査を予定していたが、土地区画整理事業の進捗状況から1箇所をはずし、a, b, dの3調査区を設定した。なお、d区については、以下の報告ではc区と呼称する。また、土地区画整理事業に伴う六反田遺跡7F-1区の調査で、事業地外に調査区を拡張する必要が生じた。大野田官衙遺跡との関連を考慮する上で重要な地点でもあることから、大野田官衙遺跡の追加調査として調査区(7F-1区)の拡張を行った。

上記の予定した発掘調査とは別に、年度途中で法領塚古墳石室前面での緊急の遺構確認調査が必要となった。そのため陸奥国分寺跡の調査計画を変更し、法領塚古墳の調査を実施した。

遺跡名・調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
郡山遺跡 第200次	II期官衙西側	300m <sup>2</sup>	10月12日～12月10日	店舗建築	開発に伴う事前調査
郡山遺跡 第201次	II期官衙外南西部	22.4m <sup>2</sup>	6月21日～6月23日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡 第202次	遺跡範囲南西端	10.6m <sup>2</sup>	8月9日～8月10日	児童館建築	開発に伴う事前調査
郡山遺跡 第203次	南方官衙東地区	60m <sup>2</sup>	8月17日～8月26日	水道管埋設	開発に伴う事前調査
大野田官衙遺跡	官衙区画溝東辺	257m <sup>2</sup>	5月21日～10月1日	範囲確認調査	郡山遺跡ほか調査
六反田遺跡	六反田遺跡	27m <sup>2</sup>	8月31日～10月1日	追加調査	郡山遺跡ほか調査
法領塚古墳 第2次	石室前底部	160m <sup>2</sup>	10月18日～11月20日	校舎建築	郡山遺跡ほか調査

表2 平成22年度発掘調査実績



第1図 調査遺跡位置図

## 第2章 郡山遺跡第203次発掘調査

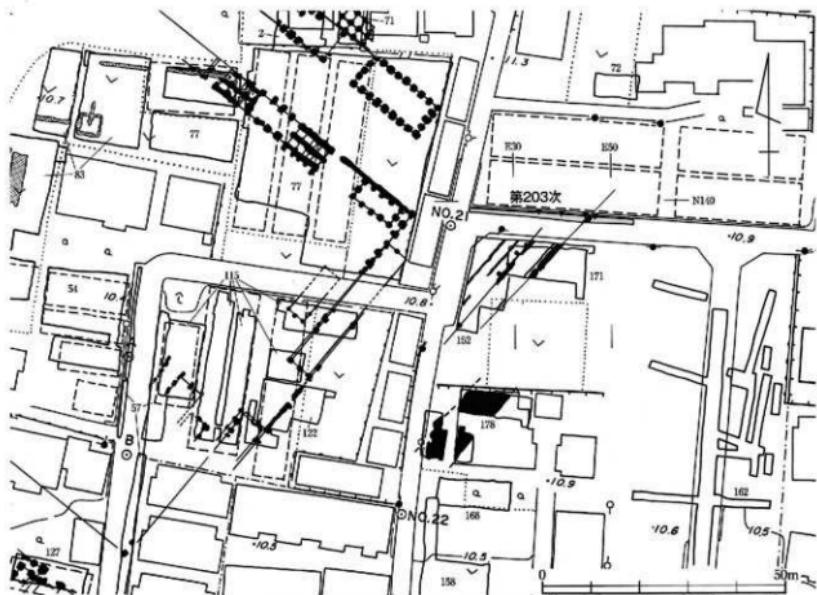
### I. 調査にいたる経過と調査方法

第203次調査は水道管理設工事に伴う調査である。平成22年8月16日付で、仙台市太白区郡山3丁目4-4、4-5における「埋蔵文化財の発掘の届出について」が提出され、それに基づき調査を実施した。

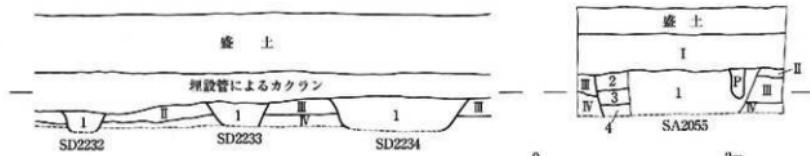
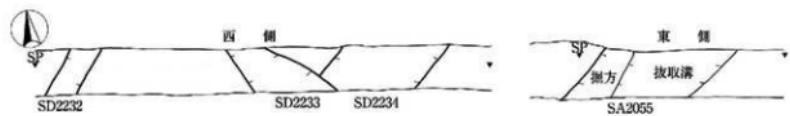
調査地点は方四町Ⅱ期官衙の中央よりやや東側である。調査は平成22年8月17日に埋設工事に伴って行い、調査区は南北69m×東西1mに設定した。すでに市道上となっており、埋設管もあることから、重機で掘削時に遺構が検出された場合のみ、平面及び壁断面で確認することとした。水道管理設のため、掘削深度は調査区の東側が浅く、西側が深くなっている。精査した結果、調査区中央付近で遺構を検出した。8月26日に調査を終了した。



第2図 郡山遺跡全体図

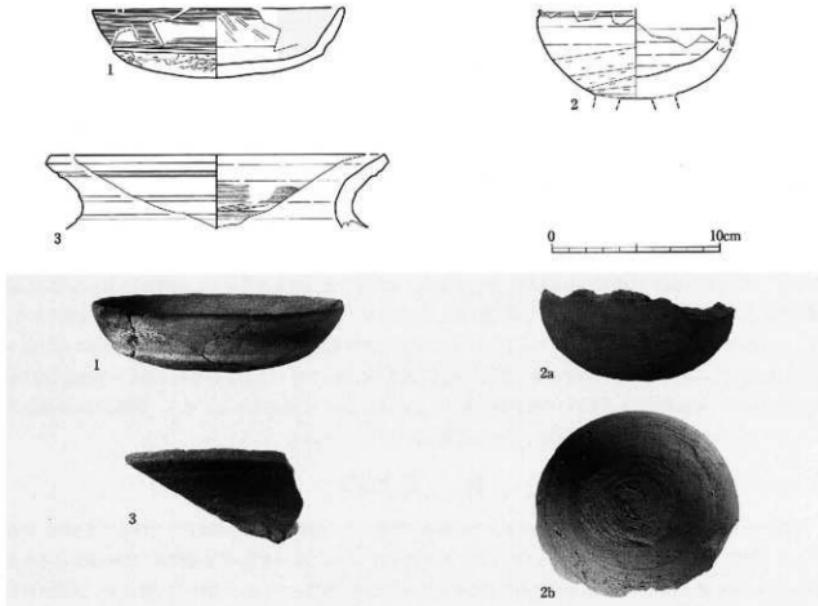


第3図 第203次調査区位置図 (S=1/1000)



第4図 調査区平・断面図 (S=1/50)

規格	規格	規格	規格	規格	規格
本品	I				
	II	10%TBZ-2%黒色		黒土シルト	田耕作土
	III	10%TBZ-3%黒色		黒土シルト	透水性の瘦地
	IV	10%TBZ-4%黒色		黒土シルト	黒色シルトの粒を少混合含む
SA2055	I	10%TBZ-2%黒色		黒土シルト	黒土質
	II	10%TBZ-4%黒色		黒土シルト	黒色地シルトの粒を少混合含む
	III	10%TBZ-2%黒色		黒土シルト	黒色地シルトの粒を少混合含む
	IV	10%TBZ-4%黒色		黒土シルト	黒色地シルトの粒を少混合含む
SD12222	I	1%TBZ-2%黒色		粘土質シルト	粘土質堆積地 黒色地シルトの粒-ブロック、炭化物鉱をそれぞれ少量含む
	II	10%TBZ-4%黒色		粘土土シルト	粘土地シルト 黑色地シルトの粒-ブロックを少混合含む
	III	10%TBZ-2%黒色		粘土土シルト	粘土地シルト 黑色地シルトの粒を少混合含む
	IV	10%TBZ-4%黒色		粘土土シルト	粘土地シルト 黑色地シルトの粒を少混合含む
SD12233	I	7.5%TBZ-2%黒色		粘土質シルト	
	II	10%TBZ-2%リップ黒色		粘土	10%TBZ-2%リップ黒色の粘土 土シルトを少混合含む
	III	10%TBZ-2%リップ黒色		粘土	10%TBZ-2%リップ黒色の粘土 土シルトを少混合含む
SD12244	I	5%TBZ-2%リップ黒色		粘土	10%TBZ-2%リップ黒色の粘土 土シルトを少混合含む
	II	10%TBZ-2%リップ黒色		粘土	10%TBZ-2%リップ黒色の粘土 土シルトを少混合含む



No.	登錄No.	遺跡・層位	種類・特徴	法面 (cm)	裏面・特徴
1	C-1019	I層	非ロクロ土器底・环	高4.15cm 口徑14.9cm	外面：口縁部ヨコナギ 体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナギ、ヘラミガキ、ナダ 体部ナダ 裏面：褐色
2	E-637	I層	便器器・長持壺	体部径(保存部) 11.9cm	背後 フリッテ 陶片ヘリズ：II層E-637の裏、II層E-637 内面：ヨコナギ H19.0cmにおける部位 量：1個、正丸、ヨコナギ化
3	E-636	第4	便器器・壺	(口徑19.9cm)	外面：ロクロナダ 内面：ロクロナダヘラナダ 脇上：砂粒、鉢物

第5図 出土遺物 (S=1/3)

## II. 基本層序

調査地点には盛土が30~60cm堆積している。盛土以下の基本層は4層確認した。I層は旧耕作土であり、II層は暗褐色の粘土質シルト層である。II層は部分的に確認され、この上面が遺構検出面である。III層は暗褐色の粘土質シルト層で、褐色シルトの粒を少量含んでおり、IV層は褐色の粘土質シルト層である。

## III. 遺構と遺物

今回の調査では材木列1条、溝跡3条が検出された。

### SA2055材木列

調査区中央付近で検出された。壁断面の観察及び周囲の調査成果から、材木列の布掘り状の抜取溝と掘方と判断される。抜取溝の検出長は約56cmで、上端幅約76cmである。掘方の検出長は南北方向で約60cmである。上幅は抜取溝に壊されているため不明である。堆積土及び埋土は4層確認され、第1層は粘土質シルト層であり、抜取溝の堆積土である。第2層は褐色の粘土質シルト層、第3層は暗褐色の粘土質シルト層で、第4層は褐色の粘土質シルト層である。第2~4層は掘方埋土である。

### SD2232溝跡

調査区中央や西側で検出された。南北方向に延びる溝跡である。検出長約50cm、上端幅は約30cmである。堆積土は黒色の粘土質シルト層が1層確認された。

#### SD2233溝跡

調査区中央付近で検出された。南北方向に延びる溝跡である。検出長約50cm、上端幅は約50cmである。堆積土はオリーブ黒色の粘土層が1層確認された。重複関係としては、SD2234溝跡より新しい。

#### SD2234溝跡

調査区中央で検出された。南北方向に延びる溝跡である。検出長は約58cm、上端幅は約88cmである。堆積土はオリーブ黒色の粘土層が1層確認された。重複関係としては、SD2233溝跡より旧い。

出土遺物については、盛土から須恵器のE-536壺（第5図3）が1点、I層から非ロクロ土師器のC-1019壺（第5図1）、須恵器のE-537長頸壺（第5図2）がそれぞれ1点出土した。盛土から出土した須恵器のE-536壺は口縁部片である。外反する口縁を持つが、口唇部が肥厚したり、下方に張り出したりしておらず、特徴的な形態である。また、焼成はあまり良好でない。非ロクロ土師器のC-1019壺は内面黒色処理されており、口縁部と体部の境に段を有し、内済気味に立ち上がる器形である。また、底部の器厚が7.5mmと厚いことが特徴的である。須恵器のE-537長頸壺は底面に直径約5cmの円形の剥離痕跡があり、台が付いていたと考えられる。また、色調がにぶい褐色を呈しており、焼成が良好でない。その他、遺構から遺物は出土していない。

## IV. まとめ

今回調査地点は、方四町II期官衙の中央よりやや東側に位置する。調査の結果、調査区中央付近で材木列、調査区中央～西側にかけての間で溝跡3条を検出した。今回調査地点の南7mの第152次発掘調査ではSA2055材木列が検出され、抜取溝底面において材木列の掘方とそれに伴う柱痕跡を検出している。方向はN-38°Eで、調査区内の南部で抜取溝の一部を検出していることから、調査区を横断し外へ延びていると考えられる。

今回の調査で検出した材木列は遺構の掘り込みを行っていないため詳細は不明だが、第152次発掘調査で検出したSA2055材木列の延長線上にあり、同一の遺構と考えられる。

SA2055材木列の時期については、第152次発掘調査において、北西5mを平行して延びるSA2060材木列が検出されている。SA2055材木列とSA2060材木列は近接しており、材木場が同時期に存在していたとは考えにくいことから、I期官衙内別の別時期と考えられる。また、I期官衙に使われていたと考えられている道路跡、あるいは柴垣と見られるSD2070、2075溝跡も検出されており、両溝間の距離と同値でSA2060材木列がSD2075溝跡と平行している。よって、SA2060材木列が官衙内の道路と平行した跡であると考えられる。官衙東辺部の状況については、第178次発掘調査によって、これら材木列の外側にSD2150溝跡があり、それぞれ関連していたことが考えられる。詳細にわたる整理はついていないが、この地区的調査を積み重ねることによって、検討される状況を目指していく。



写真1 SA2055材木列検出状況（南から）

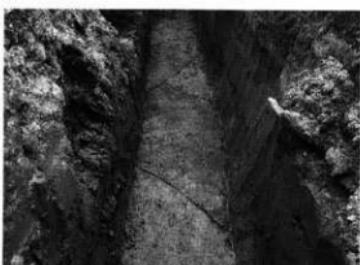


写真2 SD2233・SD2234溝跡検出状況（東から）

## 第3章 大野田官衙遺跡

### I. 調査概要

#### 1. 調査計画

大野田官衙遺跡は平成21年度に遺跡登録され、官衙の年代、機能を明らかにするために範囲確認調査を進めている。平成21年度の調査では、宿沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査と併せ、区画溝の西辺が検出されたことにより、官衙の範囲が南北245~259m、東西188~198mであることが明らかとなった。今年度は、官衙の区画溝について東辺の様相を把握するため、その想定ライン上に2a、2b、2c区の3調査区を設定した（第7図、註）。

また、土地区画整理事業に伴う六反田遺跡7F-1区の調査において、木棺墓が検出され、その東端部が事業地外に延びている状態であった。大野田官衙遺跡周辺地域における、官衙と前後する時期も含めた土地利用のあり方を考慮する上で、木棺墓の全容解明が重要であることから、国庫補助事業による範囲確認調査の追加調査として、木棺墓の東端部を拡張して調査を行った。

なお、2a、2b、2c区における区画溝の東辺の様相や、7F-1区における木棺墓の様相が明らかとなったことから、9月1日に報道発表を行い、9月4日に遺跡見学会を開催した。木棺墓については、その後さらに調査が進むにつれ、新たな様相が判明してきたことから、再度11月10日に報道発表を行い、11月13日に遺跡見学会を開催している。



第6図 大野田官衙遺跡と重複する遺跡群 (S=1/10000)

## 2. 調査方法

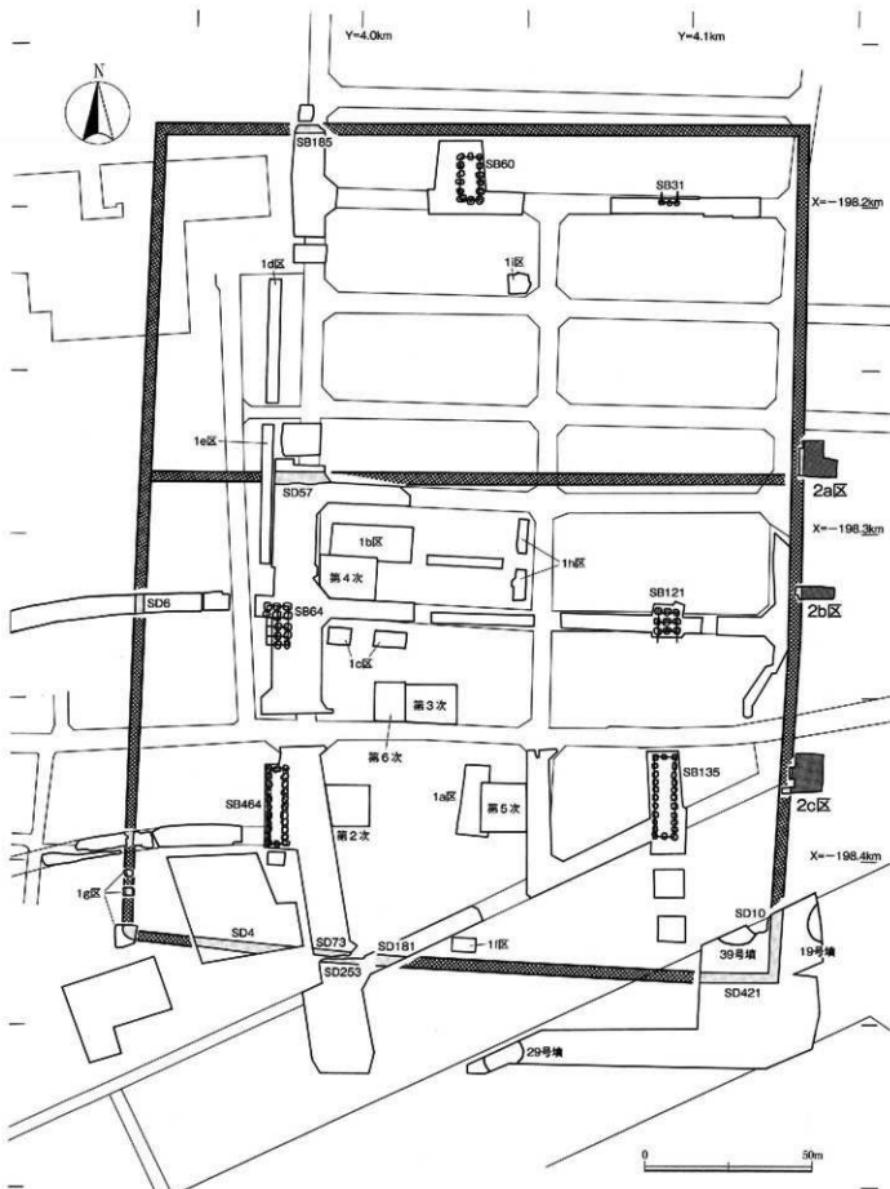
調査計画に準じて、2a区を5月21日より、2b区を7月1日より、2c区を7月26日より調査を開始した。この調査は官衙関連遺構の範囲確認調査であるため、官衙に関連すると考えられた遺構や、性格を把握する必要が生じた遺構についてのみ、一部掘り下げて調査を行っている。また、小溝状遺構群などの遺構は検出のみに留めている。各調査区とも、遺構の検出状況に合わせ一部拡張を行っている。

また、土地区画整理事業に伴う六反田遺跡7F-1区の調査は5月17日より開始し、拡張部の調査は国庫補助事業の追加調査として8月31日より開始した。この調査では木棺墓の構造の全容解明のため、遺構を完掘している。

## 3. 基本層序

各調査区において基本層の堆積状況は異なっていたが、各地点で対応すると考えられる上層Ⅰ～V層が確認された。Ⅰ層はⅡ耕作土であり、各調査区で堆積している。調査区により細分されるが、最上層は現代までの耕作土と考えられる。Ⅱ層は黒褐色の粘土層であり、2a、2b区で部分的に確認されている。Ⅲ層はにぶい黄褐色の粘土層であり、全調査区で確認されたが、部分的な分布状況を示す。しかし、下層のV層上面で検出された滑跡の堆積土上部において、比較的厚く堆積しており、灰白色火山灰がブロック状に含まれることも明瞭に確認できた。Ⅳ層は暗褐色の粘土層であり、2b、2c区で部分的に確認された。V層は褐色の粘土層であり、全調査区で確認された。遺構はⅡ、Ⅲ、V層上面で検出されている。

註：調査区の表記について、昨年度の国庫補助事業による調査区を1a、1b、1c …とし、今年度の調査区を2a、2b、2cとする。また、第7図中に記載されている第2～6次調査の成果については、第2次調査が第393集、第3～6次調査が第395集に掲載されている。



第7図 大野田宮跡調査区配図 (S=1/1500)

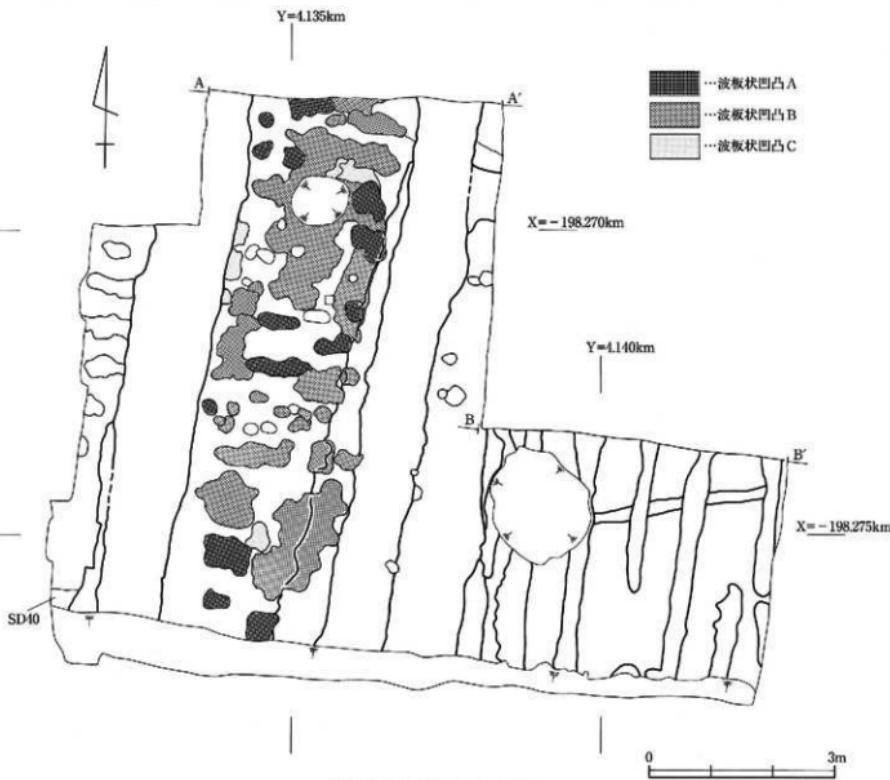
## II. 2a区の調査

### 1. 調査概要

2a区は、官衙の区画溝東辺の想定ライン上の中央やや北寄りに位置しており、官衙内部を東西に横断するSD57溝跡と東辺と接続すると想定される地点にある。南北10m×東西10mの範囲の中にL字形の調査区を設定し、重機により盛土、耕作土を除去し精査を行った。その結果、調査区西半で南北方向に縱走する道路跡が検出され、西側の道路側溝の西半が調査区外へ延びている状態であった。そのため、下層の遺構の検出状況も踏まえながら、調査区西部の拡張を順次行った。遺構は道路側溝や波板状凹凸など道路跡を構成するものについて、一部掘り下げて調査を行ったほか、調査区西端のSD38溝跡については、下部で別の溝跡が検出されたため、断面検討のためのベルトを残して完掘している。調査は写真撮影、図面作成による記録を行いながら進め、SD38溝跡の下部から検出された溝跡については、一部掘り下げて規模、形状を把握した上で調査を終了した。

### 2. 基本層序

調査地点には盛土が1~1.1mあり、それより下にI~III、V層が確認された。I層は旧水田耕作土であり、土色、



第8図 2a区平面図 (S=1/80)

土質により Ia～Ic層に細分される。II層は黒褐色の粘土層であるが、堆積状況が非常に薄く、調査区東半で部分的に確認されたのみである。III層はにぶい黄褐色の粘土層である。調査区東半で部分的に確認されたほか、調査区西端でも確認され、SD40溝跡の上部に比較的厚く堆積している。III層中に灰白色火山灰は確認されなかった。III層上面では、SD38、SD39溝跡が検出されている。V層は褐色の粘土層であるが、遺構の底面など下部では砂質シルトの割合が多くなる。SD40溝跡や小溝状遺構群などが検出されている。

### 3. 遺構と遺物

III層上面において、溝跡2条、ピット6基が検出された。また、III層が削平されている地点において、V層上面で溝跡、土坑などが検出されている。III層上面で検出された2条の溝跡はV層上面の溝跡と方向、規模が類似することから、これらの遺構と一連のものとして道路跡を構成すると考えられたため、III層上面検出遺構の道路跡として報告する。また、道路跡関連遺構とは別に、V層上面において、溝跡2条、土坑1基、性格不明遺構1基、小溝状遺構群1群、ピットが検出されている。

#### (1) III層上面検出遺構

##### 道路跡関連遺構

検出された道路跡の関連遺構は、溝跡4条と波板状凹凸である。ここでは個別の遺構について述べ、遺構の共伴関係の検討については後述する。

##### SD36溝跡

調査区中央部で検出された、南北方向に縱走する溝跡である。方向はN-10°-Eであり、規模は上幅1～1.1m、下幅10～40cm、深さは45～50cmである。断面形は基本的に、東側がやや深くなるU字形であるが、調査区南部では東側の落込みが顕著となり、明瞭な段を有している。堆積土は4層で、第1層は灰黄褐色の粘土質シルト層である。灰白色火山灰をブロック状に含んでいる。第2～4層はシルト質粘土層であり、第3、4層は基本層のV層をプロック状に多く含んでいる。出土遺物については、第2層中より非クロト土師器のC-9环が出土した(第14図1)。内湾気味に緩やかに立ち上がる器形で、丸底気味の底部であり、内面黒色処理されている。その他、遺構上面で内面黒色処理された上師器環の小片が2点、第1層中より土師器、繩文上器の小片が数点、第2層中より土師器小片が1点、第3層中より内面黒色処理された土師器環の小片が2点出土した。遺構の重複関係としては、SD37溝跡より新しい。

##### SD38溝跡

調査区西端で検出された、南北方向に縱走する溝跡である。方向はN-11°-Eであり、規模は上幅1～1.4m、下幅15～55cmを測る。深さについては、調査区南部では比較的浅く約40cmであるが、調査区中央付近では急激に落ち込んでおり、80～90cmである。断面形状についても、調査区南部ではやや不整な逆台形であるが、落込みをもつ調査区中央以北では段を有し、不整形となる。この落込みは溝の中心から東へ偏っており、深さ30～50cmで一度段を形成してから、ほぼ垂直に落ち込んでいる。堆積土は大別6層に区分される。第1層はシルト質粘土層であり、土色の違いから1a、1b層に細分される。第2層は灰黄褐色のシルト質粘土層であり、灰白色火山灰と考えられるシルトを粒状に含んでいる。第4層は4a、4b層に細分される。4a層はにぶい黄褐色の粘土層であるが、黒褐色の粘土などをブロック状に多く含んでおり、第1～3層が比較的均質な堆積土であるのに対し、明瞭な差異が認められる。第5層は暗褐色の粘土層で、部分的に堆積した土である。第5層の下部にはSD40溝跡の堆積土が位置し、土質が類似していることから、SD40溝跡の堆積土が攪拌されたものと考えられる。第6層は6a、6b層に細分され、6a層は黄褐色の細砂層である。灰黄褐色の粘土をブロック状に含んでいる。6b層は細砂と粘土の混合層であるが、他の混入物は6a層に比べて少なく、比較的均質な土層である。出土遺物については、遺構上面より土師器小片1点、後期前葉のA-1繩文土器(同図2)を含む繩文土器片2点が出土した。その他、第1層より土器小片1点、第2層

より土器小片数点、剥片1点、第3層より土器小片数点、4a層より土師器小片3点、須恵器の高台付壺の底部片1点が出土した（註1）。遺構の重複関係としては、SD39溝跡より新しい。

#### SD37溝跡

調査区中央で検出された、南北方向に縱走する溝跡である。方向はN15°Eであり、調査区北端で東に屈曲する。上幅はSD36溝跡により削平された残存部では60~90cmであるが、削平を比較的受けていない、東に屈曲した部分では1.2mである。下幅35~40cm、深さ約50cm、断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層で、第1、2層は黒褐色のシルト質粘土層である。第3層は色調の異なる粘土の混合層であり、しまりも上層と比べて弱く、明瞭に区分される。出土遺物については、第1層よりNa-1鉄製品（写真図版1-9）、第3層よりロクロ土師器のD-4壺（第14図3）が出土した。Na-1鉄製品は残存長8.3cm、幅2cmの細長い形状を呈しており、刀子、或いは鎌などの刃部と考えられる。その他、遺構上而より土師器小片2点、第1層より土師器小片3点、第3層より土器小片2点が出土している。遺構の重複関係はSD36溝跡より古い。

#### SD39溝跡

調査区西端で検出された、南北方向に縱走する溝跡である。大半がSD38溝跡と重複しており、調査区中央以北では完全に削平されている。上幅等の規模、断面形状は不明であり、深さは約30cmである。堆積土は2層確認されている。出土遺物については、第1層よりロクロ土師器壺の口縁部片1点、土器小片2点、第2層より土師器小片が2点出土している。遺構の重複関係はSD38溝跡より古い。

#### 波板状凹凸

調査区中央のSD36、SD37溝跡と調査区西端のSD38、SD39溝跡の間で検出された、平面形が不整形の上坑、ピット群である。いずれも砂と粘土の混合層で、しまりのある土層である。土質、土色によりA~Cの3群に大別された（第8図）。波板状凹凸Aは黒褐色の粘土質シルトと暗褐色の細砂の混合層である。ピットによって、粘土質シルトと細砂の割合が異なっている。波板状凹凸Bは灰黄褐色のシルト質砂層である。波板状凹凸Cは、土色が暗褐色で波板状凹凸Aと類似しているが、堆積土中に粘土の割合が大きいこと、周囲の遺構との重複関係からAとは区分した。この3種の重複関係は波板状凹凸Aが最も新しく、波板状凹凸Cが最も古い。また、各大別群内でも重複関係が認められる。波板状凹凸A、Bについて、数基ずつ掘り下げて調査しており、以下に個別に報告する。

#### SK43土坑（波板状凹凸A）

調査区南端で検出された、不整形な土坑である。上幅が東西50cm、南北60cm、下幅が東西南北とも30cm、深さ約15cmであり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層で、第1層は砂粒を含む粘土質シルト層、第2層は粘土層である。遺構底面において、上面に被熱痕跡の認められる様が出土した。遺構の重複関係はSD37溝跡より新しい。

#### P1（波板状凹凸A）

調査区北部で検出され、東西50cm、南北70cmの不整形を呈する。深さ約15cmで、断面形は扁平なU字形であるが、底面には凹凸が認められる。堆積土は1層である。

#### P2（波板状凹凸A）

調査区北部でピット1の南隣で検出され、東西南北とも約60cmの不整形を呈する。深さ約10cmで、断面形は不整形であり、底面には凹凸が認められる。堆積土は1層であり、土器小片が数点出土している。遺構の重複関係はSD37溝跡より新しい。

#### P3（波板状凹凸B）

調査区中央部で検出され、東西80cm、南北60cmの不整形を呈する。深さ約10cmで、断面形は浅い皿状である。堆積土は1層であり、土師器壺の小片が1点出土したほか、底面中央部で礫が1点出土した。遺構の重複関係は

SD37溝跡より新しい。

#### P4 (波板状凹凸B)

調査区南部で検出され、長軸約2.2m、短軸約1.1mの不整形を呈する。深さは10~20cm、断面形は皿状であるが、底面に緩やかな凹凸が認められ、北端が一段と深くなる。堆積土は1層であり、底面では南部で蝶が数個出土したほか、北部で須恵器のE-5甕が出土した(第14図4)。口縁部破片であり、口唇部は外側が下方に突出しているほか、内面にも突起が認められる。その他、ロクロ上部器坏の口縁部片1点と土器小片が数点出土した。遺構の重複関係はSD37溝跡より新しい。

その他、波板状凹凸Aのピットからロクロ土器、須恵器片が数点出土した。また、波板状凹凸の上面で円石が2点出土している(同図5、6)。両者とも、表裏両面の中央部に断面V字状の深い凹みを複数有している。

#### 他の他の遺構

P8 調査区西端中央部で検出され、長軸45cm、短軸25cmの不整形を呈する。深さは約8cm、断面形は扁平な蒲鉾形で、堆積土は1層である。

P9 調査区西端中央部、ピット8の南隣で検出され、長軸90cm、短軸30cmの東西に細長い不整形を呈する。深さは4~10cm、底面はやや凹凸があり、東部が一段深くなる。断面形は不整形で、堆積土は1層である。遺構の重複関係としては、SD38溝跡より旧い。

ピット9のさらに南側において、東西に細長い不整形のピットが4基検出されている。これらの堆積土は全てシルト質粘土層1層である。

また、Ⅲ層中よりロクロ上部器など土器片が数点出土している。

#### (2) V層上面検出遺構

##### SD40溝跡

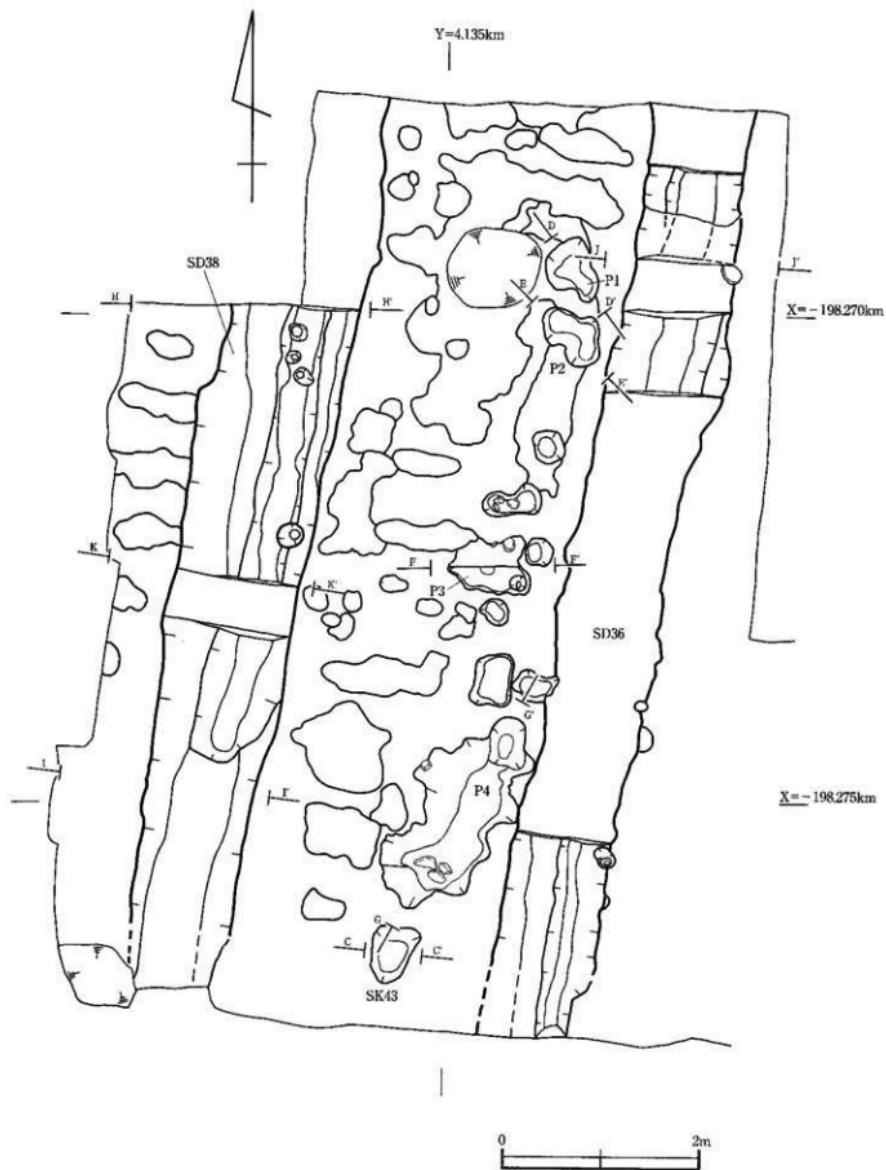
調査区西端で検出された、南北方向に縱走する溝跡である。方向はN2°-Wであるが、調査区南端で西へ屈曲している。規模は上幅1.1~1.35m、下幅30~40cm、深さ60~70cmであり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は4層で、第1層が黒褐色、第2~4層が暗褐色のシルト質粘土層である。第2、4層は褐色の砂質シルトをブロック状に多く含んでいる。この褐色の砂質シルトは基本層のV層由来のものと考えられ、第4層の方に、より多く含まれている。出土遺物は、第1層よりロクロ土器坏の口縁部片1点と土器小片1点、第2層より頁岩製の微細な洞片1点、第4層より非ロクロ土器のC-13甕が出土している。これは体部の小片であるが、縱方向のハケメが認められる。遺構の重複関係としては、SK62上坑より旧い。

##### SK62土坑

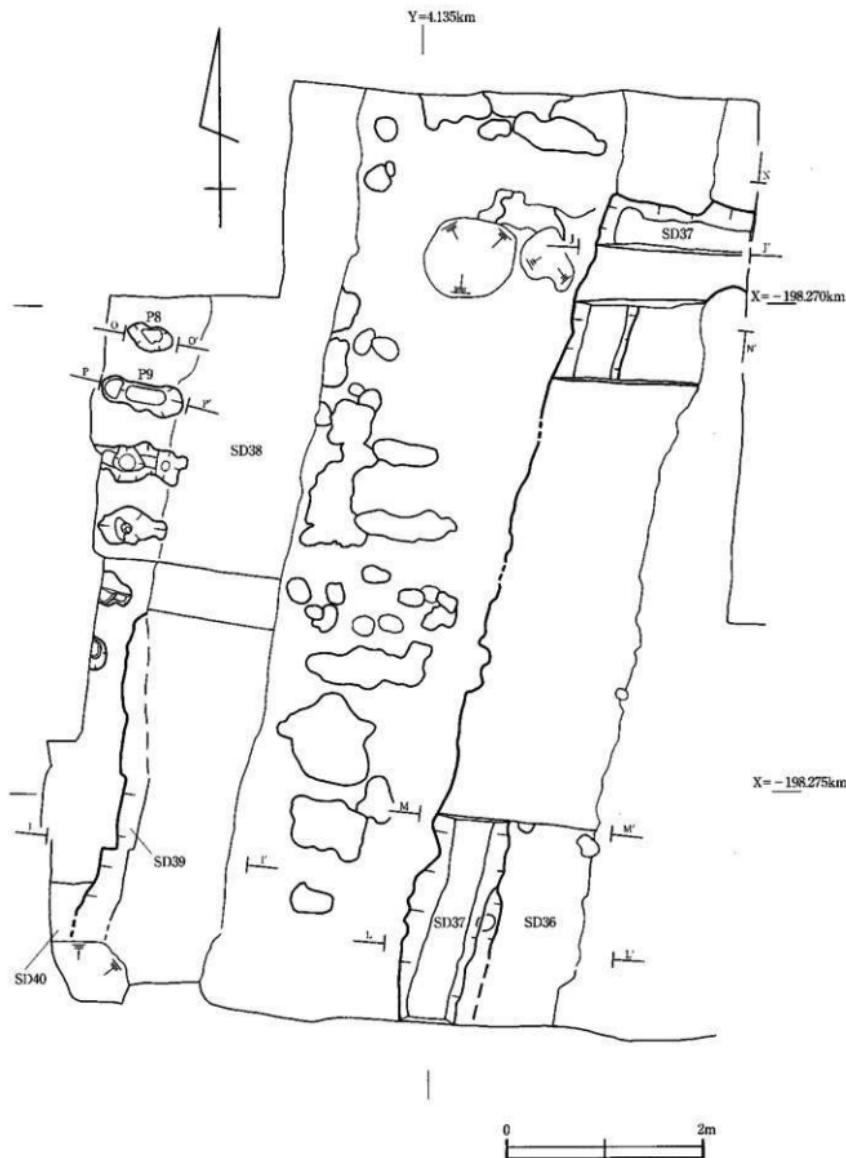
調査区西端で検出され、残存長で東西約35cm、南北約50cmの方形を呈する土坑である。東部はSD38溝跡が深く落ち込んだことにより、完全に削平されている。深さは10cm以上であり、堆積土は2層確認されている。第1層は黒褐色の粘土層であり、直徑15cmほどの範囲で柱状に落ち込んで堆積している。第2層は暗褐色のシルト質粘土層である。遺構の重複関係としては、SD40溝跡より新しい。

##### SX44性格不明遺構

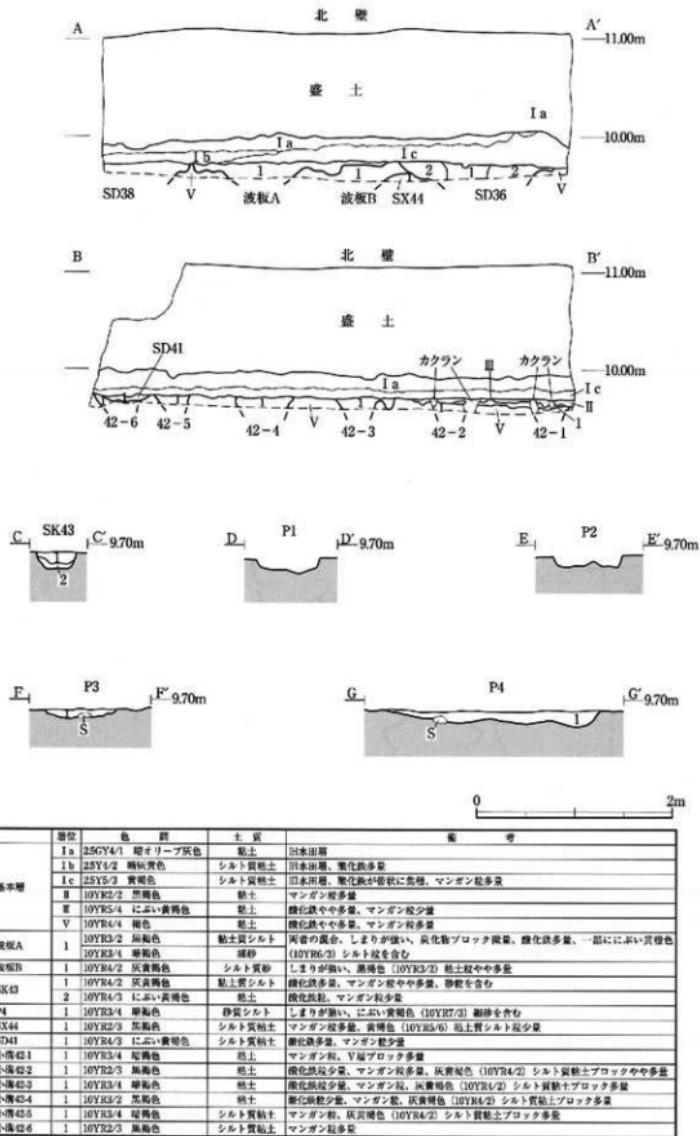
調査区北端で検出された遺構である。SD36、SD37溝跡や波板状凹凸によって遺構の大半が失われており、規模、形状は不明であるが、北西から南東方向へ斜走する溝状を呈していた可能性が考えられる。堆積土は暗褐色のシルト質粘土層1層である。



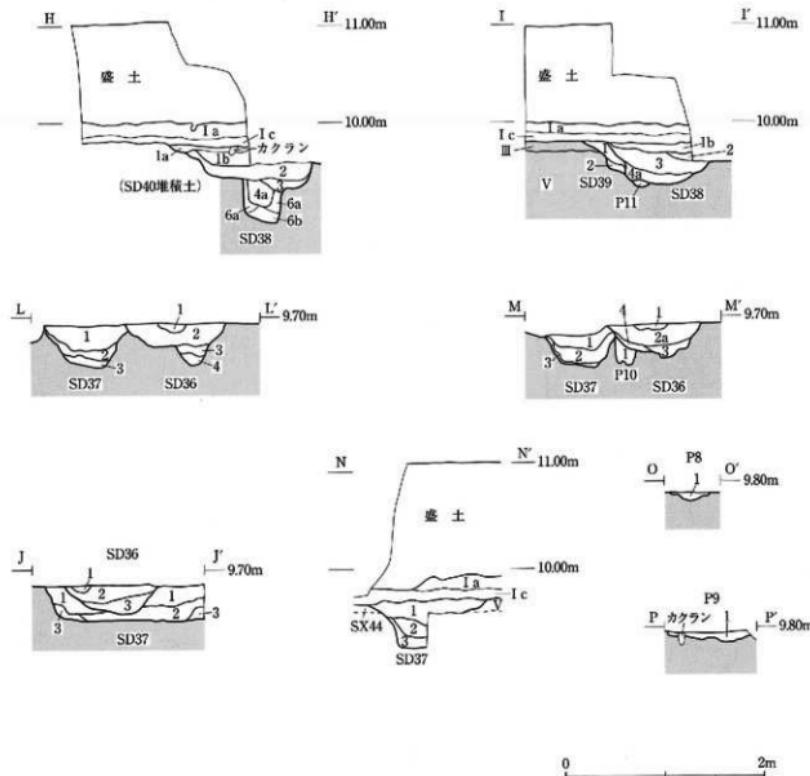
第9図 2a区道路跡（新）(S=1/50)



第10図 2a区道路跡 (日) (S=1/50)

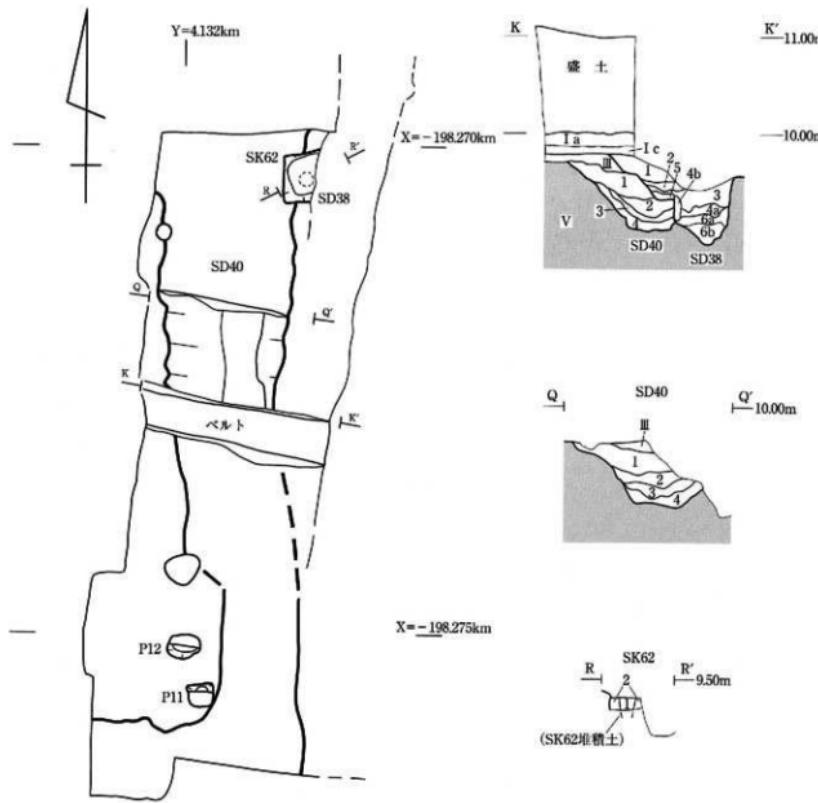


第11図 2a区断面図1 (S=1/50)



層位	色 調	土 質	偏 異	
			名	特徴
SD36	1 IOYR2-2 黄灰褐色	粘土質シルト	灰白色 (IOYR2-2) シルトブロックや多量、細繊維 (IOYR2-2) 粘土ブロック、マンガン粒多量	
	1 IOYR2-2 黄灰褐色	粘土質砂土	酸化鉄少量、マンガン粒多量、炭化物ブロック、V面ブロック、灰白色 (IOYR2-2) シルト粒少量	
	3 IOYR3-3 にい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄や多量、マンゴン粒、V面ブロック多量	
	4 IOYR3-3 にい黄褐色	シルト質粘土	マンゴン粒微量、V面ブロックや多量、にい黄褐色 (IOYR3-3) シルト粒少量	
SD37	1 IOYR3-2 黑褐色	シルト質粘土	酸化鉄微量、マンゴン粒や多量、V面ブロックが上部に多量	
	2 IOYR3-2 黑褐色	シルト質粘土	酸化鉄や多量、炭化鉄少量 (IOYR2-2) 粘土ブロック多量、にい黄褐色 (IOYR3-4) 粘土質シルトブロック少量	
	3 IOYR3-2 黑褐色	粘土	酸化鉄や多量、にい黄褐色 (IOYR3-4) 粘土質シルトブロック少量	
SD38	1a IOYR1-2 にい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンゴン粒多量	
	1b IOYR1-2 黄灰褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンゴン粒多量	
	2 IOYR1-2 黄灰褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンゴン粒多量、にい黄褐色 (IOYR1-2) シルト粒微量、黒褐色 (IOYR3-2) 粘土ブロックを含む	
	3 IOYR1-2 黑褐色	粘土	炭化物微量、陰化鉄、マンゴン粒や多量、灰白色 (IOYR1-2) 砂質シルトブロック少量	
SD39	4a IOYR1-2 にい黄褐色	粘土	黒褐色 (IOYR2-2) 粘土ブロック、にい黄褐色 (IOYR2-4) の粘土と砂の混合ブロック多量、酸化鉄ブロックや多量、マンゴン粒少量	
	4b IOYR2-2 黑褐色	粘土	酸化鉄粒、マンゴン粒や多量、にい黄褐色 (IOYR5-4) 酸化鉄ブロックを下部に含む	
	5 IOYR2-2 黑褐色	粘土	マンゴン粒少量	
	6a IOYR5-6 黑褐色	壤砂	同色の粘土粒多量、しまりが弱い、酸化鉄粒、マンゴン粒、灰白色 (IOYR4-2) 粘土ブロック少量	
	6b IOYR5-6 黑褐色	壤砂、粘土	土質の異なるブロックの混合、酸化鉄粒、マンゴン粒や多量	
	7 IOYR2-2 黑褐色	シルト質粘土	マンゴン粒少量、褐色 (IOYR1-2) 砂質シルト粒微量	
P11	2 IOYR2-2 黑褐色	シルト質粘土	褐色 (IOYR1-2) 粘土質シルトブロック少量	
	1 IOYR4-3 にい黄褐色	シルト質粘土	細砂や多量に含む、陰化鉄粒、マンゴン粒少量	
P10	1 IOYR4-3 にい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒や多量、マンゴン粒多量、黑褐色 (IOYR2-3) シルト質粘土ブロック少量	
	1 IOYR5-4 黑褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒、酸化鉄粒、黒褐色シルト粒微量	

第12回 2a区断面図2 (S=1/50)



層位	色 虞	土 質	概 要	
			量	量
SD40	1 HYR2/3 岩褐色	シルト質粘土	マンガン鉱多量、褐色 (10YR4/6)	砂質シルト粒少量
	2 HYR3/4 岩褐色	シルト質粘土	炭化物鉱多量、マンガン鉱やや多量、褐色 (10YR4/6)	砂質シルトブロック多量
	3 HYR3/4 岩褐色	シルト質粘土	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト粒少量
	4 HYR3/4 岩褐色	シルト質粘土	炭化物鉱多量、褐色 (10YR4/6)	砂質シルトブロック集多量
SK62	1 HYR3/2 黒褐色	粘土	V層ブロック微量	
	2 HYR3/2 緋褐色	シルト質粘土		

第13図 2a区SD40溝跡平・断面図 (S=1/50)

#### SD41溝跡

調査区中央を南北方向に縱断する溝跡である。上幅20~30cmで、深さは5cm、方向はN.7°.Eである。断面形は皿状で、堆積土は1層である。出土遺物は、上面より土器小片が数点出土している。遺構の重複関係としては、小溝状造構群42より新しい。

#### 小溝状造構群42

調査区東半を南北に縱走する溝跡群で、6条検出された。上幅20~50cmで、方向はN.5~8°.Eである。遺構の重複関係としては、SD41溝跡より古い。また、小溝状造構群42より古い溝跡が1条検出されている(第8図a)。

P10 調査区南部でSD36溝跡の下部から検出された。南部のみのため、形状は不明である。検出長は長軸20cm、短軸10cm以上、検出面からの深さは30cm以上である。堆積土は1層である。

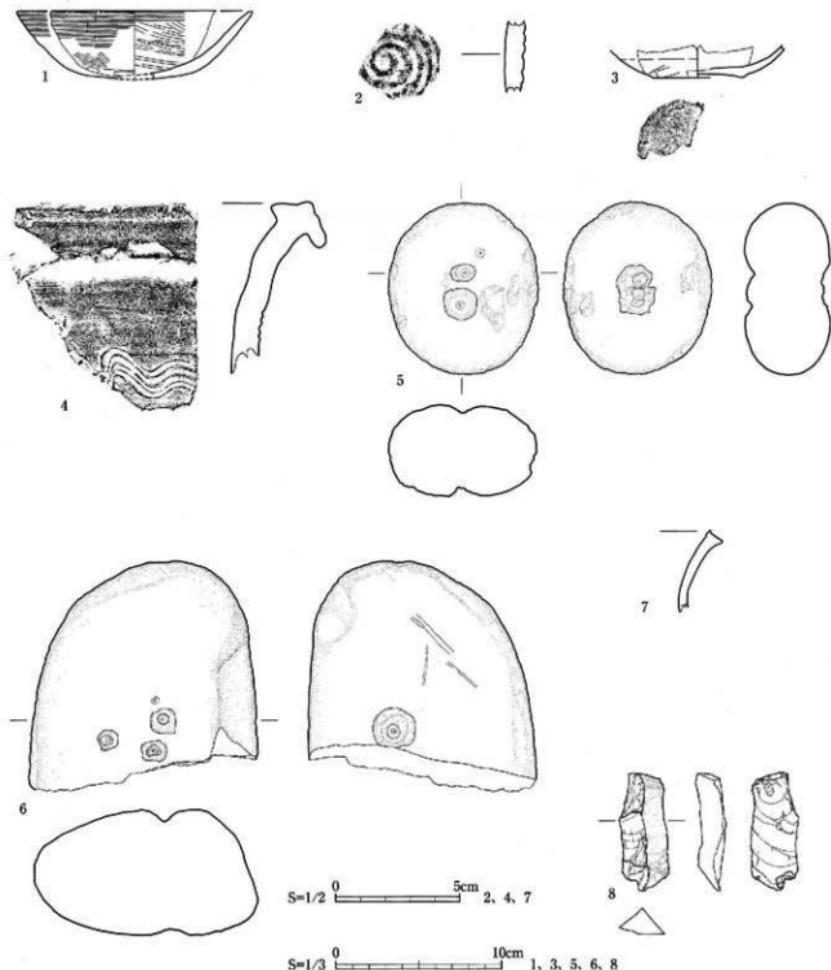
P11 調査区南西部でSD38溝跡の下部から検出された。検出長は長軸25cm、短軸25cmの隅丸方形を呈する。深さは約8cm、断面形はU字形で、堆積土は1層である。

その他の出土遺物としては、V層上面より須恵器のE-6甕(同図7)、Ka-1剥片(同図8)が出土している。E-6甕は口唇部外側が鋭く突出する形態であり、自然釉の痕跡が認められる。Ka-1剥片は頁岩製であり、背面には自然面が残っている。また、腹面の端部には二次加工が一部施されている。さらに、須恵器の高台付坏の底部片1点、甕の破片数点、ロクロ土師器坏の口縁部片2点、底部片1点、内面黒色処理された土師器片など土器小片が多数、珪質凝灰岩製の剥片1点が出土した。また、SD38溝跡底面のV層中より繩文土器片が2点出土している。他の基本層出土遺物としては、Ib層より須恵器甕の体部片1点、土器小片2点、凹面に布目痕が認められる平瓦1点、珪質凝灰岩製の石核1点が出土したほか、Ic層より須恵器甕の体部片1点、土器片1点が出土した。

## 4.まとめ

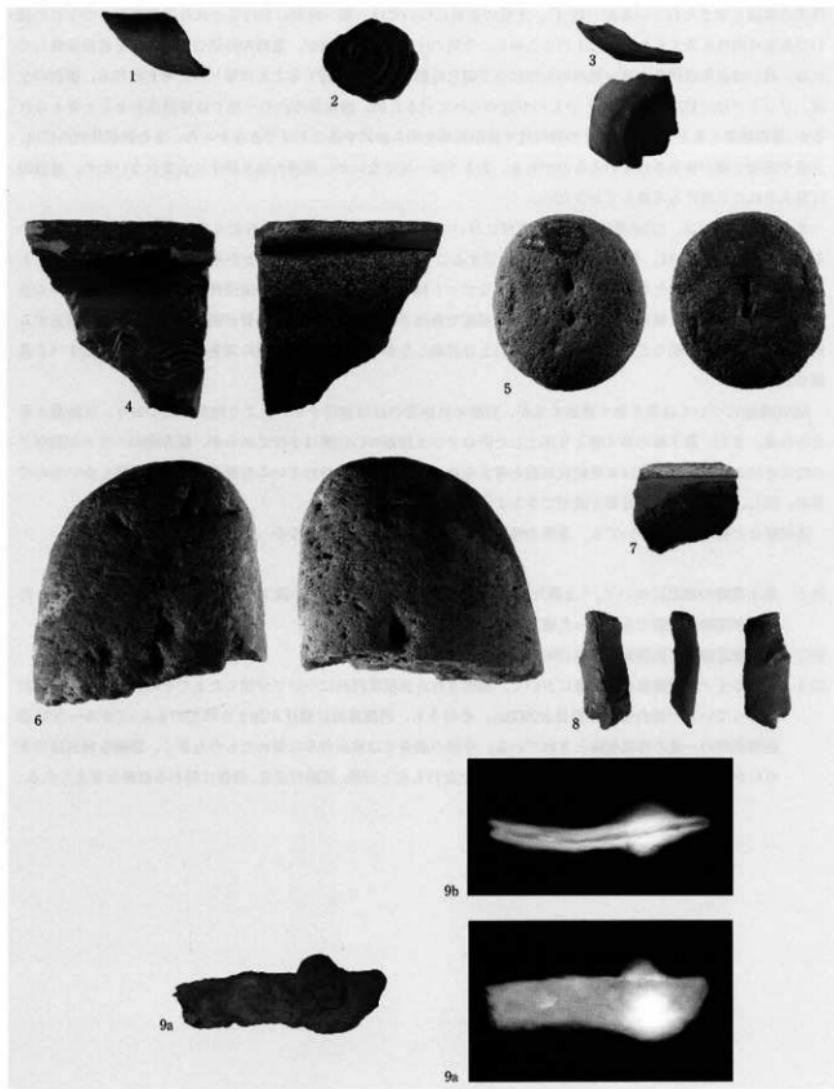
V層上面検出遺構とした道路跡について、調査区中央部で検出されたSD36溝跡と、調査区西端で検出されたSD38溝跡がほぼ平行して縱走している。この2本の溝跡は平面規模や上層の堆積土が非常に類似している。さらに、波板状凹凸は2本の溝跡の間にのみ分布しており、調査区東部には分布していない。以上のことから、SD36、SD38溝跡は同時期のものであり、道路跡の東西側溝として機能していたと考えられる。また、SD36溝跡と重複関係にあるSD37溝跡についても、SD36溝跡と規模、堆積土、方向が類似しており、同様の機能を持っていたと考えられる。調査区西端ではSD38溝跡と重複関係にあるSD39溝跡が検出されており、SD37溝跡と対応して道路側溝として機能していた可能性がある。このような溝跡の重複関係から、道路跡は少なくとも新旧2時期の段階があったと想定される。さらに、SD37溝跡が調査区北端で東へ屈曲していることから、旧期の道路跡はT字、或いはL字形を呈していた可能性が高い。また、SD38溝跡が調査区中央以北で急に深くなることについて、王ノ塙遺跡における過去の道路跡の調査でも類似した事例が認められる(註2)。その調査では、道路の合流点や、側溝が途切れ通路として機能していたと考えられる地点において、側溝が幅広く、深くなる傾向が指摘されている。今回のSD38溝跡の場合は調査区以北の様相が明らかでないため、これらと同様の事例とは即断できないが、深く掘り込んだ要因としてSD40溝跡と重複していることも一因と考えられる。深く掘り込まれる地点は、SD40溝跡と重複する部分であり、この落込み部の底面ではSD40溝跡の堆積土は完全に削平され、基本層が検出されている。落込み部が東側に偏っていることも、SD40溝跡の堆積土の分布がより少ない側を選択して掘り下げたためと考えられる。

また、この新旧2時期の道路跡と波板状凹凸の詳細な共伴関係は不明であった。波板状凹凸は土質により3群に大別したが、遺構検出面は全てV層上面であったため、掘り込み面の差異などは識別できなかった。また、掘り下げて調査を行った波板状凹凸A、Bの土坑、ピットについて、断面形状などで特徴的な差異は認められていない。两者とも底面に緩やかな凹凸をもつなど、状況は類似している。波板状凹凸の性格については、道路の造成、補修



第14図 2a区出土遺物

No.	登録No.	遺物・部位	特徴・形態	寸法(cm)	測定・記載	参考図
1	C-9	SD36・2号	テコロナド土器片・环	高さ11cm 口径14.2cm	底面:口縁はテコロナド・底部はクルタナド. 内面:ヨコナド・カミナド. 部分的に石英・白母少量	1-1
2	A-1	SD38上部	陶土器・環飾	不明	外観:品劣文. 地土:砂粒・石英少量. 白母を含む	1-2
3	D-4	SD37・3号	テコロナド土器片・环	残存高17.2cm 底径5.4cm	外観:底面テコロナドハサナダ. 部分:圓板赤切り. 地土:砂粒・石英	1-3
4	E-5	P4・1号	陶器片・壳	不明	外観:ヨコロナド・底次文. 内面:ヨコロナド・地土:砂粒・石英・白母少量	1-4
5	Kc-4	直立状焼成土器	石	高さ9.1cm 幅9.0cm 厚さ3.5cm 重さ70g	外観:ヨコロナド・底次文. 内面:ヨコロナド・地土:砂粒・石英	1-5
6	Kc-3	直立状焼成土器	石	残存長12.9cm 幅13.5cm 厚さ2.8cm 重さ1.8kg	外観:ヨコロナド・底次文. 内面:ヨコロナド・地土:砂粒・石英	1-6
7	E-6	V器	環形器・蓋	不明	外観:セラフナド. 内面:ヨコロナド. 地土:砂粒	1-7
8	Ka-1	V器	側片	高さ37.1cm 幅22cm 厚さ5.1cm 重さ20.5g	外観:二次加工	1-8
-	Na-1	SD37・1号	共凝晶	高さ24.3cm 幅23cm 厚さ5.1cm 重さ30.4g		1-9



写真図版1 2a区出土遺物 (縮尺は第14図と同一 9···S=1/2)

作業の痕跡と考えられているが（註3）、土質の差異については、同一時期におけるそれらの作業の中で生じた違いである可能性も考えられる。以上のことから、今回の土質による大別が、遺構の時期の新旧関係を直接反映している、或いは波板状凹凸の同一群内のものは全て同じ時期のものと判断することは難しいと考えられる。個別の土坑、ピットではSD37溝跡より新しいものが認められているため、波板状凹凸の一部では時期差があると考えられるが、道路側溝と考えられる溝跡との同時性や新旧関係を明らかにすることはできなかった。また波板状凹凸には、上面や底面で繙が検出されているものがある。大きさは一定でないが、周囲の基本層中に含まれないため、意図的に混入された可能性も考慮しておきたい。

またⅢ層上面では、SD38溝跡のさらに西側において、ピット8、9を含め、合計6基のピットが検出されている（第10図）。これらは、東西に細長い形状を呈することや堆積土が類似することから、一連のものとしてピット列を形成しているものと考えられる。このようなピット列の検出状況は、過去の道路跡の調査で指摘されている波板状凹凸の検出状況と類似している。今回は、東側で検出された波板状凹凸と土質が明らかに違うこと、対応する側溝などの遺構が不明なことから、波板状凹凸とは認識しなかったが、今後周囲の調査を行う場合、注意すべき遺構である。

SD40溝跡については第5章で後述するが、官衙の区画溝のはば想定ライン上より検出されており、区画溝と考えられる。また、最下層の第4層より出土した非クロロ上師器のC-13甕は小片であるが、縦方向のハケメが観察されたことにより建物の年代は8世紀代以前と考えられ、これまで想定されている官衙の年代とは矛盾しないものである。但し、詳細な遺構の時期を決定できるような遺物は出土しなかった。

道路跡など他の遺構についても、遺構の時期を比定できる遺物は出土しなかった。

註1 出土遺物の表記について、「土器片」と記載したものは、細片のため縄文土器、弥生土器、上師器といった種別が明確に判別できなかった破片である。

註2 王ノ壇遺跡第2次調査（竹田1999、仙台市教育委員会2000a）

註3 前述の王ノ壇遺跡第2次調査において、検出された波板状凹凸について分類した上でその性格について検討を行っている（仙台市教育委員会2000a）。そのうち、凹部底面に壠圧が加えられているA～Cグループは道路構築時の一連の作業痕跡とされている。今回の調査では検出のみに留めたものも多く、詳細な検討はできないが、堆積土がしまりの強い土層であり、上記のものと同様、道路の造成、補修に関わる痕跡と考えられる。



1. 調査区全景（南から）



2. 調査区西部（南から）

写真図版2 2a区調査区全景



1. 道路跡検出状況（南から）



2. 道路跡調査状況（南から）

写真図版3 2a区道路跡



1. 調査区北壁断面（西部）



2. SD36・SD37断面 (L-L'南から)



3. SD36・SD37断面 (M-M'南から)

写真図版 4 道路跡間連造構断面 1



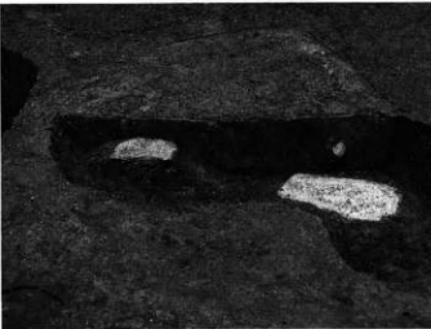
1. SD36・SD37断面 (J'-J北から)



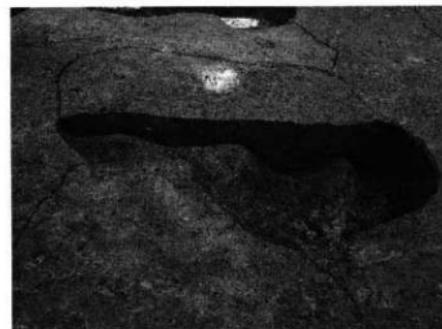
2. SD37断面 (N-N' 調査区東壁)



3. SK43断面 (南から)



4. P1断面 (南から)



5. P2断面 (南から)



6. P3断面 (南から)

写真図版 5 道路跨間連造構断面2



1. SD38・SD39検出状況（南から）



2. SD38・39検出状況（南から）



3. SD38・SD39断面（I'-I北東から）

写真図版 6 SD38・SD39溝跡調査状況（調査区南西部）



1. SD38断面 (H-H' 南から)



2. SK62断面 (南東から)



3. SK62掘下げ後 (南東から)

写真図版7 SD38溝跡・SK62土坑



1. SD40調査状況（調査区北部 南から）



2. SD40検出状況（南から）



1. SD40検出状況（南から）



2. SD40屈曲部（北東から）

写真図版9 SD40溝跡2（調査区南端の屈曲部）



1. SD40断面 (Q-Q' 南から)



2. SD40断面 (K'-K北から)

写真図版10 SD40溝路 (断面)

### III. 2b区の調査

#### 1. 調査概要

2b区は官衙の区画溝東辺の想定ライン上で、中央やや南寄りに位置しており、西方に約40m離れてSB12I柱建物跡が検出された地点である。ここに南北3m×東西11mの調査区を設定した。重機により盛土・耕作土を除去し、精査を行った。その結果、調査区西端で溝跡が検出され、その規模を把握するため、調査区を西へ1.5m拡張した。調査区東半ではⅢ、Ⅳ層が比較的厚く堆積していたため、Ⅲ層上面で検出された遺構は完掘し、写真撮影と図面作成を行った後、V層上面での精査を行っている。V層上面で検出された遺構については、その性格を明らかにするため一部掘り下げて調査を行い、成果がまとまった時点で写真撮影と図面作成を行った。

#### 2. 基本層序

調査地点には盛土が70~130cmあり、それより下にⅠ~V層が確認された。Ⅱ層はシルト質粘土層であり、調査区東南部に堆積するほか、北西部で部分的に堆積している。Ⅲ層は粘土質シルト層であり、調査区東部に堆積しており、西部では部分的な堆積となっている。また、SD50溝跡の上部では厚く堆積しており、灰白色火山灰がブロック状に含まれることが確認された。Ⅳ層は粘土質シルト層であり、調査区東部に厚く堆積している。V層はシルト質粘土層である。どの基本層も他の調査区と比べ、シルトの割合が多い上層であった。

#### 3. 遺構と遺物

Ⅱ、Ⅲ、V層で遺構が検出された。Ⅱ層上面では溝跡2条が検出され、Ⅲ層上面では溝跡4条、小溝状遺構群1群、ピット7基、V層上面では溝跡3条、小溝状遺構群2群、ピット25基が検出された。

##### (1) Ⅱ層上面検出遺構

###### SD46溝跡

調査区西端でSD47溝跡と並行して検出された、南北方向に縱走する溝跡であり、方向はN0~1°-Eである。土層の堆積状況から、新II~II時期あることが確認された。遺構の重複関係としては、SX48性格不明遺構より新しい。SD46a溝跡　旧期の溝跡である。上幅0.8~1.1m、下幅35~60cm、深さ40cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層である。

SD46b溝跡　新期の溝跡であり、旧期よりも幅が狭く、やや深い溝跡である。上幅約50cm、下幅約20cm、深さ約50cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は粘土層が2層である。

###### SX48性格不明遺構

SD46溝跡の下部で、溝跡と並行して検出された遺構であり、規模は上幅50~60cm、下幅10cmである。深さについては、調査区北壁付近では落ち込んでおり90cmであるが、1m南では60cmほどとなる。断面形はV字形を呈している。堆積土は大別して5層に区分される。第1、2層がシルト質粘土層であり、以下の第3~5層は上層よりしまりの弱い粘土層であった。また、第3、4b、5層は部分的な堆積土である。第1層より上層小片が2点出土している。

###### SD49溝跡

調査区西部で検出された、南北方向に縱走する溝跡である。検出長は約1.7mであり、調査区中央付近から北へ延びており、方向はN1°-Wである。上幅40~50cm、下幅20~25cm、深さ15cmで、断面形は扁平なU字形を呈する。堆積土はシルト質粘土層が1層である。

##### (2) Ⅲ層上面検出遺構

###### SD47溝跡

調査区西端でSD46溝跡と並行して検出された、南北方向に縱走する溝跡であり、方向はN2~3°-Wである。上

幅70~80cm、下幅25cm、深さ50cmで、断面形は不整形な逆台形を呈する。堆積土は4層で、いずれもシルト質粘土層である。堆積土の大半を占める第1、2層はSD46溝跡の堆積土と類似しているが、東寄りに堆積する第3、4層は黒褐色のシルト質粘土をブロック状に含む特徴がある。第4層より土器小片が数点出土している。遺構の重複関係としては、SD50溝跡より新しい。

#### SD51溝跡

調査区中央部を南北に縱走する溝跡であり、方向はN-2°-Eである。上幅80~90cm、下幅30~60cm、深さ15~20cmで、断面形は扁平な盾鉢形を呈するが、部分的に底面に円凸が認められる。堆積土は基本的にシルト質砂層の1層であり、底面の凹部にのみ、シルト質粘土層が堆積している。第1層中には粗砂の集積部が認められる。

#### 小溝状遺構群45

調査区南東部で3条検出された、北西から南東方向へ斜走する溝跡群である。方向はS-32~51°-Eであり、規模は上幅20~35cm、下幅10cm、深さは5~15cmである。堆積土はいずれも1層で、遺構の上面に堆積するⅡ層よりやや明るい黒褐色のシルト質粘土層である。土器小片が数点出土した。遺構の重複関係ではピット2より旧い。

#### (3) V層上面検出遺構

#### SD50溝跡

調査区西端で検出された、南北方向に縱走する溝跡である。上幅2.7~3.2m、下幅1.6~1.7m、深さ約1mで、断面形は逆台形を呈するが、上部で傾斜が緩やかになる。堆積土はシルト質粘土、粘土層が9層で、第2層中には粗砂が、第3、5層中には細砂が含まれている。第6層は暗褐色のシルト質粘土層、第7層は黒褐色の粘土層であり、第8層は褐色の砂質シルトをブロック状に非常に多く含む粘土層であった。また、第9層は底面東寄りにのみ薄く堆積する粘土層であり、粘性が非常に強い土層である。また、第9層中には黒褐色粘土も帯状に堆積している。溝の底面からはピット4、5が並んで検出された。いずれも暗褐色のシルト質粘土層が堆積している。さらに溝の東壁面からは、ピット6が検出された。これらのピットも含め、溝跡の堆積土から遺物は出土していない。

#### SD54溝跡

調査区東部で検出された、南北方向に縱走する溝跡である。検出長1.9mで、調査区中央付近から南へ延びており、方向はN-0~1°-Wである。上幅80cm、下幅35~50cm、深さ15cmで、断面形は不整形である。堆積土は暗褐色のシルト質粘土層であり、砂粒を含んでいる。遺構の重複関係は、小溝状遺構群52、53より新しい。

#### 小溝状遺構群52

調査区東半で2条検出された、東西方向に横断する溝跡群である。方向はE-1~3°-Nで、上幅約30cmである。小溝状遺構群52-1の上面より、土器小片が1点出土している。SD54溝跡より旧く、小溝状遺構群53より新しい。

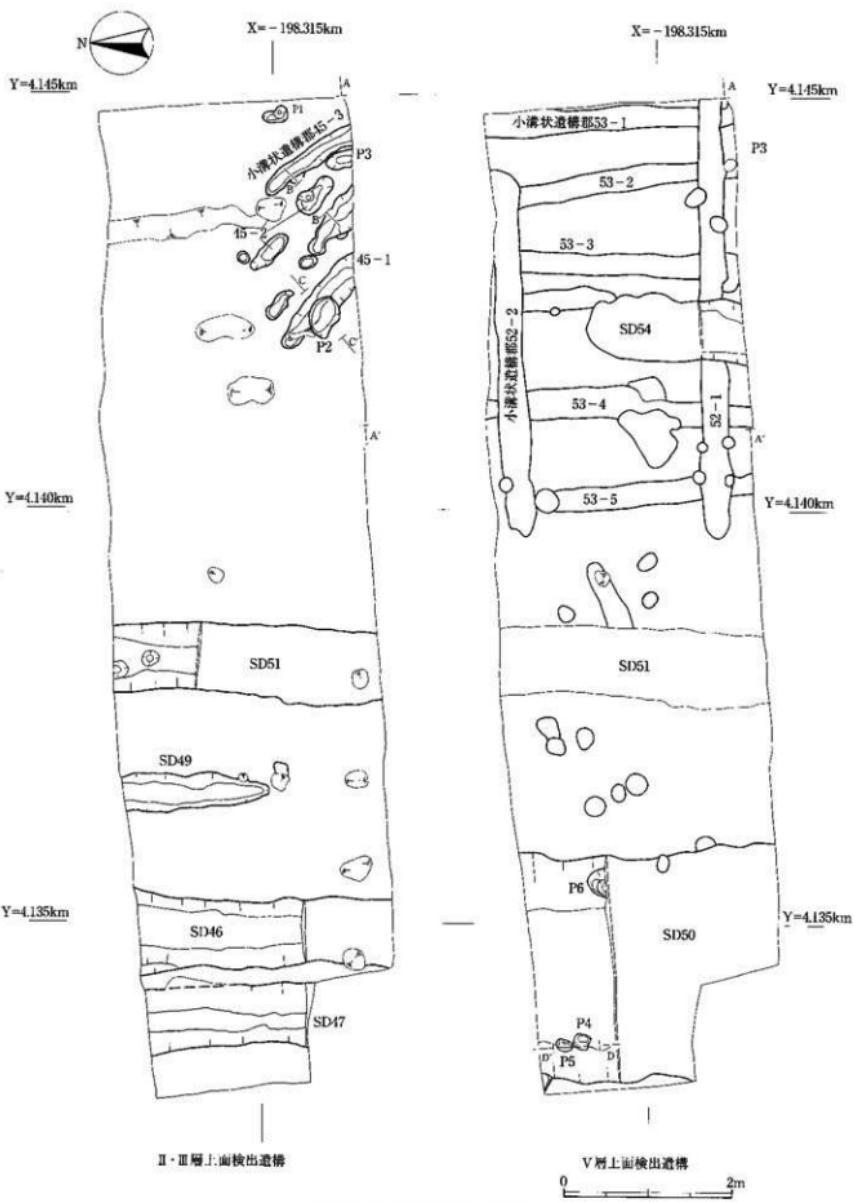
#### 小溝状遺構群53

調査区東半で6条検出された、南北方向に縱走する溝跡群である。方向はN-0~8°-Wで、上幅25~35cmである。SD54溝跡、小溝状遺構群52より旧い。

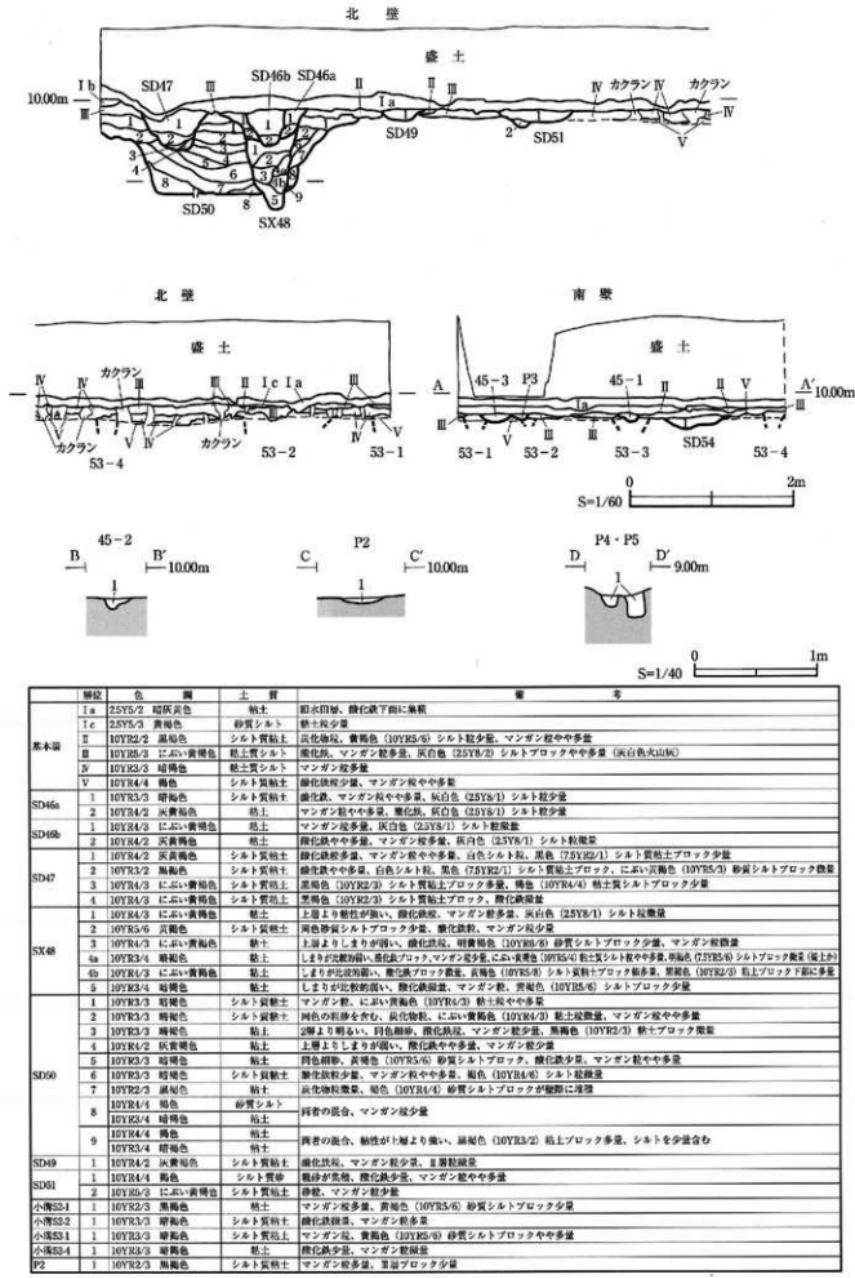
遺構外出土遺物としては、I、II、III、V層より土器小片が数点ずつ出土している。

## 4.まとめ

2b区では、II、III、V層において遺構が検出された。遺構の新旧関係について、III層で検出された遺構はV層で検出された遺構より新しい。また、III層上面で検出されたSD47溝跡は堆積土の第3、4層中に、II層と同質の黒褐色シルト質粘土を含んでいる。そのため、SD47溝跡は本末、II層上面から掘り込まれ、その後、周囲の土が崩落して第3、4層中に混入した可能性が考えられる。また、時期を判別できる遺物は出土していないため、各遺構の年代は不明である。V層上面で検出されたSD50溝跡については、2c区のSD60溝跡と併せ、第5章で後述する。



第15図 2b区平面図 (S=1/60)



第16図 2b区断面図



1. 遺構検出状況（南から）



2. SD46・SD47検出状況（北から）



3. SD46・SD47完掘状況（南から）  
右…SD46 左…SD47

写真図版11 SD46・SD47溝跡



1. SX48検出状況（南から）



2. SX48調査状況（南から）



3. SD50調査状況（南から）

写真図版12 2b区西部遺構調査状況



1. 調査区全景（南から）



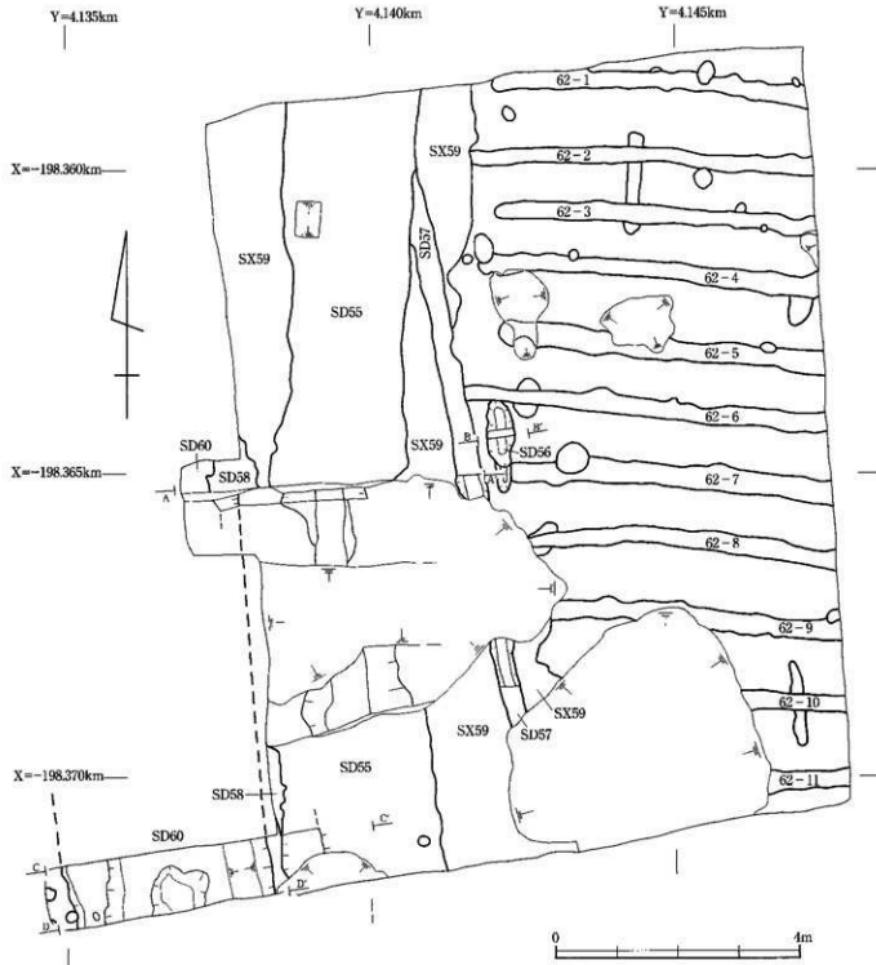
2. SD50断面（調査区北壁）

写真図版13 2b区遺構調査状況

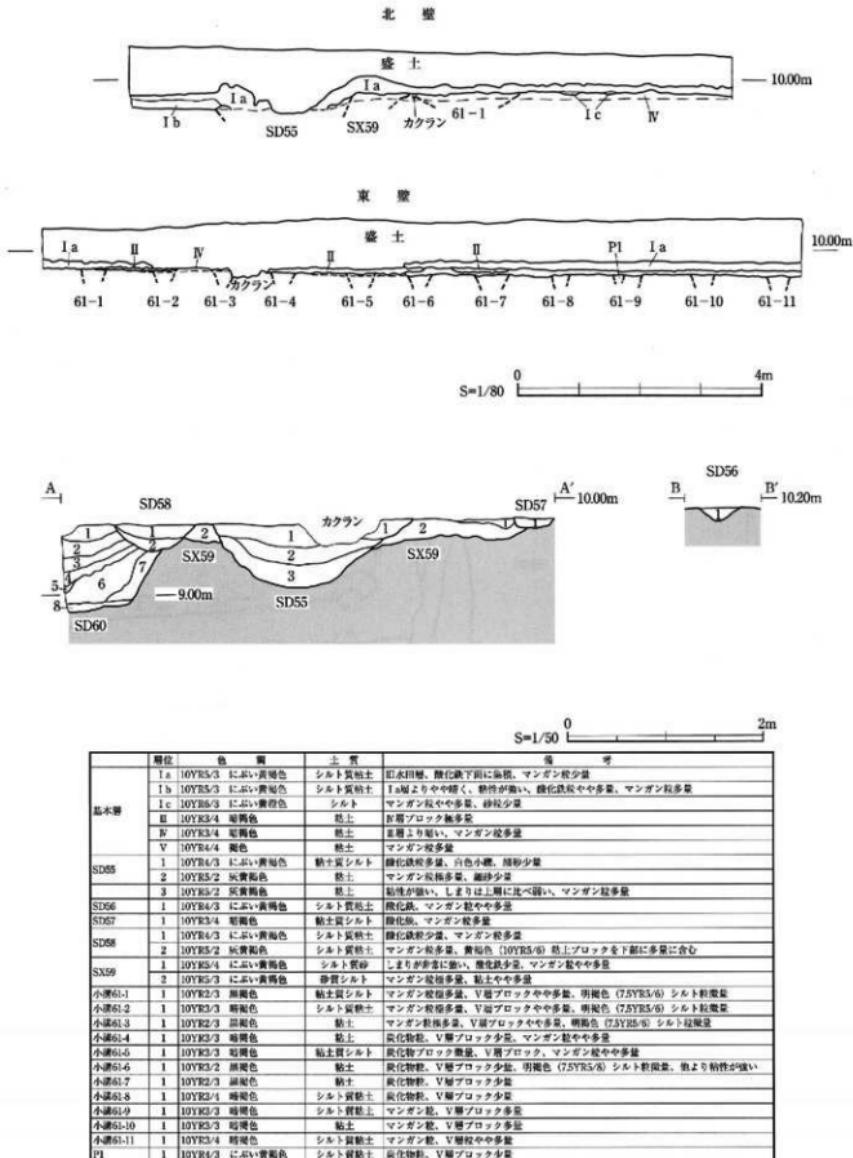
## IV. 2c区の調査

### 1. 調査概要

2c区は官衙の区両溝東辺の想定ライン上の南部に位置し、西方に約40m離れてSB135倒柱建物跡が検出された地点である。ここに南北12m×東西10mの調査区を設定し、重機により盛土、耕作土を除去し、精査を行った。その結果、調査区西端部において溝跡の一部が検出され、調査区南西端を西側へ約4m拡張して調査を進めた。調査区東半に分布していたⅣ層は掘り下げ、V層上面で遺構を検出している。遺構についてはその性格を明らかにするため、部分的に掘り下げており、成果がまとまった時点で写真撮影、図面作成を行い調査を終了した。



第17図 2c区平面図 (S=1/80)



## 2. 基本層序

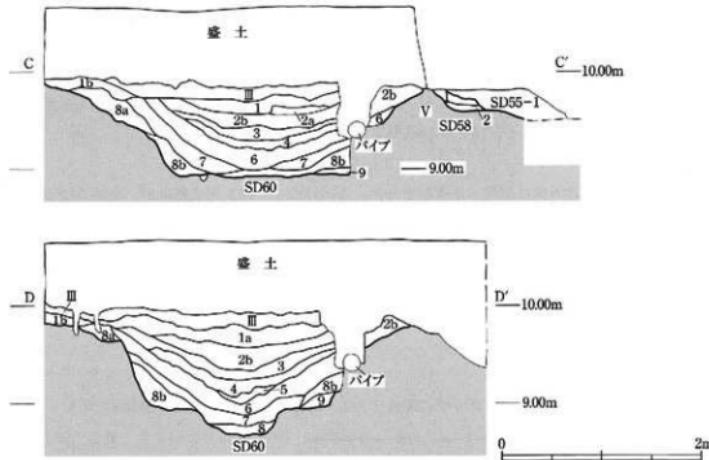
調査区には盛土が0.5~1mあり、その下部にⅠ、Ⅲ~V層が確認された。Ⅰ層はⅠa~Ⅰb層に細分される。Ⅰb層は調査区東部で堆積しており、Ⅰc層は非常に部分的な堆積状況である。Ⅲ層は調査区東部で部分的に分布していたほか、SD60溝跡の堆積土上部で検出された。Ⅳ層は暗褐色の粘土層で、調査区東部のみに分布していた。V層は褐色の粘土層で、遺構は全てこのV層上面で検出されている。

### 3. 遺構と遺物

V層上面より溝跡5条、性格不明遺構1基、小溝状遺構群1群、ピットが検出された。

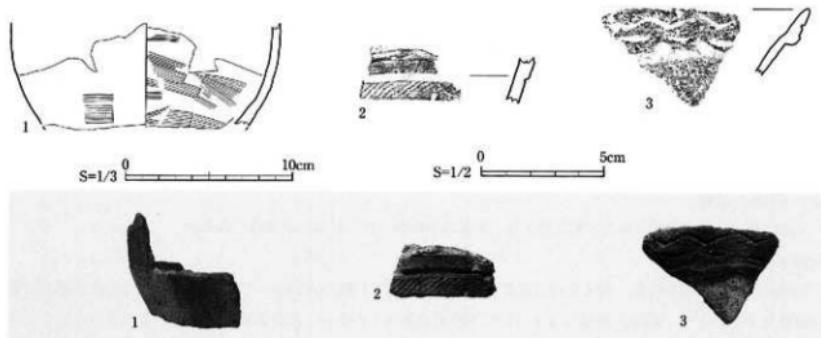
SD60溝跡

調査区西端で検出された、南北方向に縱走する溝跡である。上幅3.5~3.8m、下幅1.8m、深さ1mで、断面形は逆台形を呈する。また、調査区南端では中央部に不整形状の落込みがあり、段を形成している。この落込み部では深さ約1.2mである。堆積土は大別して9層に区分される。第1層は1a、1b層に細分され、1a層は中央部に堆積する粘土層であり、1b層は溝の西侧上部に堆積するシルト質粘土層である。1a層中では炭化物、焼土の集中部が検出された。第2層も2a、2b層に細分される。2a層にはにぶい黄褐色のシルト質粘土層であるが、部分的な堆積である。2a、2b層とも粗砂を含んでいる。第3層は細砂を含む暗褐色の粘土層であるが、にぶい黄橙色のシルトが帯状に



部位	色	圖	土 質	性 質
SD60	1a	HYTG3/3 増殖色	シルト粘土質	マンガン粒、にい黃銅色 (10YR4/2) 粘土層やや多量
	1b	HNTG3/3 增殖色	粘土	マンガニン多量
	2a	HYTR4/3 にい黄銅色	シルトと粘土	マンガニン多量、細粒、暗褐色 (10YR3/3) 粘土粒微量
	2b	HYTG2/3 増殖色	四色の鉛錆を含む、灰化土塊	にい黄銅色 (10YR4/3) 粘土粒微量、マンガン粒やや多量
	3	HVTG2/3 増殖色	粘土	繊維、黒化鉄錆、マンガン少量、黒錆 (10YR2/2) 粘土ブロック微量、にい黄銅色 (10YR4/3) シルトを背景に含む
	4	HYTR4/2 暗黒褐色	土上層よりしまがりが多い	変化化やや多量、マンガン少量
	5	HYTR2/3 増殖色	粘土	同色鉄錆、黄銅色 (10YR5/3) 砂質シルトブロック、無化鉄少量、マンガン粒やや多量
	6	HYTG2/3 増殖色	シルトと粘土	無化鉄少量、マンガン粒やや多量、褐色 (10YR4/6) シルト粒微量
	7	HYTR2/3 黒褐色	粘土	炭化物鉄錆、黒錆 (10YR4/4) 砂質シルトブロックが暗部に堆积
	8a	HYTR4/4 褐色	シルト	部分的に、性状、SB層に比べ、褐色シルトブロックの融合が多い
	8b	HYTR4/4 増殖色	粘土	褐色の混合、マンガン粒少量
	9	HYTR4/4 褐色	粘土	肉塊の混合、性状が上層より強い、暗褐色 (10YR5/2) 粘土ブロック多量、シルトを少量含む
	10	HYTG2/3 増殖色	粘土	

第19図 SD60溝跡断面図 (S=1/50)



No.	発掘No.	遺構・層位	種別・性状	法量(cm)	測量・計量
1	C-12	7番	赤瓦テラコッタ	不明	外側：赤瓦テラコッタ 内面：赤瓦テラコッタ 勉土：砂粒・石英
2	A-2	61-2ト曲	陶文土器・深鉢	不明	外側：紅瓦文→泥板→ミガキ 内面：ミガキ 勉土：砂粒・石英
3	B-2	カタラン	陶生上器・壺小器	不明	外側：褐色文・粘土細断付→擦痕有 勉土：砂粒・石英

第20図 2c区出土遺物

堆積している状況が確認された。第4層は灰黄褐色の粘土層で、しまりが比較的弱い。第5層は細砂を含む暗褐色の粘土層であるが、部分的な堆積状況である。第8層は褐色のシルトと暗褐色の粘土の混合層であるが、8a、8b層に細分される。8a層は溝の西側上部、8b層は溝底底面近くに堆積している。第9層は溝跡底面東部にのみ堆積する粘土層である。出土遺物については、8b層より内面黒色処理された壺と考えられる土師器小片が1点出土している。遺構の重複関係としては、SD58溝跡より古い。

#### SD55溝跡

調査区西半を南北方向に縦断する溝跡であり、方向は北半でN-2°-Eであるが、南部ではN-5°-Wとなる。規模は上幅1.8~2m、下幅40~50cm、深さ70cmであり、断面形はU字形を呈する。堆積土は3層で、第1層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層、第2、3層は灰黄褐色の粘土層である。第1層は基本層のIb層と非常に類似している。出土遺物については、第2層より大堀相馬産陶器の灰釉部の口縁部片が1点、第3層より在地産の無釉陶器のI-3甕、上師質土器片1点が出土している。遺構の重複関係としては、SD57溝跡、SD58溝跡、SX59性格不明遺構より新しい。

#### SD56溝跡

調査区中央部で検出された南北方向の溝跡である。検出長約1.5mと小規模な溝跡であり、上幅25~45cm、下幅15cm、深さは13cmで、方向はN-3°-Wである。断面形はU字形で、堆積土はシルト質粘土層の1層である。出土遺物については、内面黒色処理された土師器小片1点と土器小片1点が出土している。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群61より新しい。

#### SD57溝跡

調査区中央部を南北方向に縦断する溝跡で、方向はN-11°-Wである。上幅30~40cm、下幅15~25cmで、深さは10cmである。断面形はU字形で、堆積土は粘土質シルト層1層である。遺構の重複関係としては、SD55溝跡より旧く、SX59性格不明遺構より新しい。

#### SD58溝跡

調査区西端を南北方向に縦断する溝跡で、中央部が搅乱により削平されている。上幅80cmで、深さは25cm、方向はN-5°-Wである。断面形は逆台形で、堆積土はシルト質粘土層が2層確認された。遺構の重複関係としては、

SD55溝跡より旧く、SD60溝跡より新しい。

#### SX59性格不明遺構

調査区西半に分布する遺構で、溝跡やカクランにより削平されており、形状、規模は不明である。深さは20~30cmで、堆積土は2層である。第1層はにぶい黄褐色のシルト質砂層であり、しまりの強い土層であった。第2層はにぶい黄褐色の砂質シルト層であり、基本層のV層と類似していたが、マンガンが粒状に多量に集積しており、周囲のV層と区分された。第1層より内面黒色処理された十脚器坏の口縁部片と底部片がそれぞれ1点ずつ出土した。遺構の重複関係としては、SD55、SD57、SD58溝跡より古い。

#### 小溝状遺構群61

調査区東半を東西に横断する溝跡群で、11条検出された。上幅20~40cmで、方向はW-1~7°-Nである。出土遺物については、小溝状遺構群61-7の上面より、繩文後期後葉~末葉のA-2深鉢（第20図2）が出土した。その他、土器小片1点が出土している。遺構の重複関係としては、SD56溝跡、SD57溝跡、SX59性格不明遺構より古い。また、小溝状遺構群61より旧い、南北方向に継走する小規模な溝跡が2条検出されている。

遺構外出土遺物としては、SD55溝跡の上部に落ち込んで堆積しているI-a層より、大堀相馬産陶器の灰釉碗や朝顔形灰釉碗、在地産の可能性がある擂鉢の小片が出土した。その他、土器小片が1点出土している。また、層の細別は不明であるが、I層中より華南地方産のI-2揭露壺や、岸窯系のI-1鉄釉擂鉢など、中近世の陶器片が数点出土している。IV層からは、非クロロ十脚器のC-12甕（同図1）、C-11甕をはじめ、多数の上師器片が出土している。V層上面では、土器小片が3点出土したのみである。また、搅乱中であるが、B-2弥生土器も出土した（同図3）。器厚が3mmと非常に薄い甕、または広口壺の口縁部片である。口縁部ひ肥厚し、やや緩やかな鋸歯文が1条施されている。また、さらにその下に粘土縁を1条貼り付け、下方から指で押圧して波状文を形成している。これらの特徴より、弥生時代後期の大王山式期に比定される。その他、搅乱中からは在地産の可能性が考えられる陶器片2点、土器片1点が出土した。

## 4.まとめ

調査区西端において、官衙の区画溝のほぼ想定ライン上よりSD60溝跡が検出された。SD60溝跡については、2b区のSD50溝跡と併せ第5章で後述するが、官衙の区画溝と想定される。SD60溝跡を含め、今回検出された遺構の時期を比定できる遺物は出土しておらず、遺構の年代は不明である。またSD55溝跡については、上部にI-a層が落ち込んでいること、堆積土が3層に区分されるものの、比較的類似した均質な上層であること、第2層から出土した大堀相馬産の灰釉碗が18世紀代であることから、近世以降の溝跡と考えられる。



1. 遺構検出状況（南から）



2. SD60完掘状況（南から）

写真図版14 2c区調査状況

## V. 六反田遺跡7F-1区の調査

### 1. 調査概要

六反田遺跡は仙台市太白区の市営地下鉄南北線富沢駅の北東に広がる遺跡であり、笊川と旧笊川に挟まれた標高約12mの自然堤防上に立地する。遺跡範囲の東端が大野田官衙遺跡と重複している。今回調査した7F-1区は富沢駅と大野田官衙遺跡のほぼ中間点に位置する（第21図）。富沢駅周辺土地区画整理事業に伴い平成22年5月19日から調査が行われ、調査面積は2,550m<sup>2</sup>である。7F-1区の南部において、調査区の東壁にかかる形で木棺墓が検出され、管玉とガラス小玉が数点出土した。遺構の重要性を鑑み、その全容を解明する必要性が高いと判断されたことから、調査区の一部を約27m<sup>2</sup>拡張した。この拡張区については、国庫補助事業の大野田官衙遺跡調査の追加調査として扱っている。拡張区の調査は8月31日より開始し、10月1日に調査を終了した。

今回は国庫補助事業が関わるSK9木棺墓について報告を行うが、木棺墓を含め7F-1区から検出された遺構と遺物については、今後刊行される富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書内にて本報告がなされる予定であり、今回は現段階における概報である。



第21図 富沢駅周辺の遺跡群と調査地点（六反田遺跡7F-1区）位置図

## 2. 基本層序

調査地点には盛土が70~90cmあり、それより下に基本層であるⅡ~V層が確認された。Ⅱ層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、検出範囲は部分的である。Ⅲ層は暗褐色のシルト質粘土層であり、溝跡やビットの一部はこのⅢ層が検出面である。Ⅳ層は黒褐色の粘土質シルト層、V層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、大半の遺構の検出面である。

## 3. 遺構と遺物

六反田遺跡7F-1区からは、北部を中心に平安時代の住居跡や掘立柱建物跡、土坑などが検出され、円筒埴輪などが出土している。

調査区の南部からは五反田古墳の周溝の一部が検出され、円筒埴輪などが出土したほか、SK9木棺墓が発見された。

### SK9木棺墓

7F-1区の調査区南東隅から約6m北の地点に、調査区の東壁にかかる形で検出された。SD16、SD22溝跡、ビットを複数しておらず、これらの中で最も良い遺構である。

掘り下げて調査を進めた結果、木棺が比較的良好な状態で残存していることが明らかとなった。また、木棺以外にも木質部が複数検出されたほか、袋状掘り込みも発見されている。

堆積土は、木棺墓全体で79層が確認された。第1~13層は木棺蓋部が腐食して陥没した所に動いた土と、その際形成された甕に堆積したと考えられる層である。V層をブロック状に多く含む暗褐色の粘土質シルト層である。第14~19層は木棺の埋め土で、大半の層でV層をブロック状に含んでいるほか、炭化物を粒状に少量含んでいる。第21~25層は木棺蓋部が腐食した土層、第26~44層は木棺内堆積土、第46層は木棺身部が腐食した土層である。第50層は木棺の下部で検出された、厚さ3~5cmのにぶい黄褐色の粘土層である。しまりの強い土層であるため、棺床粘土の可能性が考えられる。第52~69層は木棺据え方の埋土である。

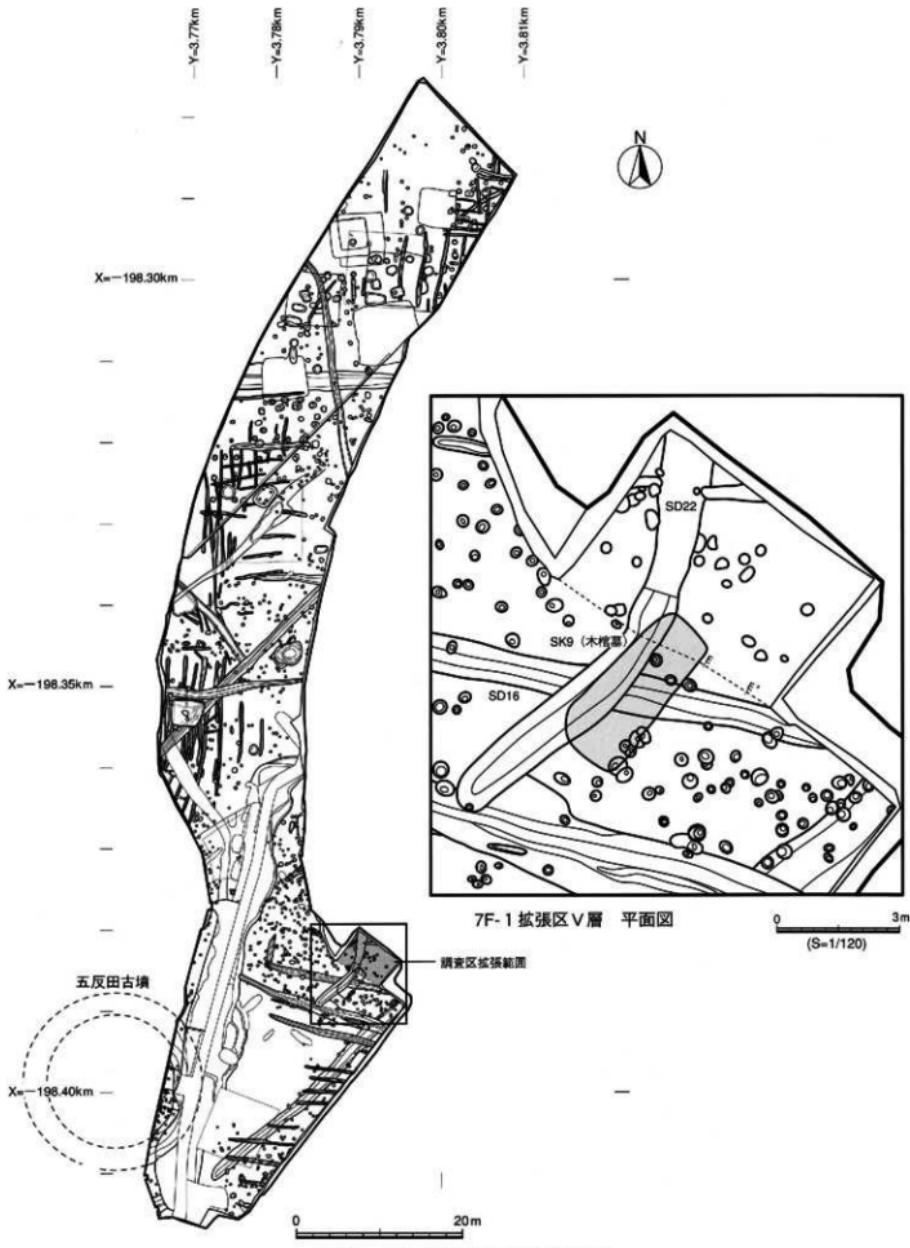
木棺身部は、検査面から87~113cmの深さで、木質部分が腐食した黒い粘土状になっていたため、その規模や形が判明した。棺の全長は3.0m、横幅は70~80cmで、深さは18~26cmである。掘方の北西側の壁寄りに設置されており、長軸方向は掘方より若干東寄りのN43°Eである。底面が浅い「U」字形で、長軸の両端が緩やかに上がる舟形をしていることから、丸太を半分に裁ち割った後に、中を削り抜いた舟形木棺と考えられる。

木棺蓋部の痕跡は、木棺が検出された高さから木棺の堆積土内にかけて、部分的に確認された。そのうち第23図のC-C'は木棺中央部の断面図であるが、木棺の蓋の痕跡が「ハ」字状に残存していたことが確認された。また同図のB-B'、D-D'では、蓋の南北と北東両端が上圧によって押しつぶされたような状態で確認された。第24図1は、その木棺蓋部の痕跡が確認された範囲である。

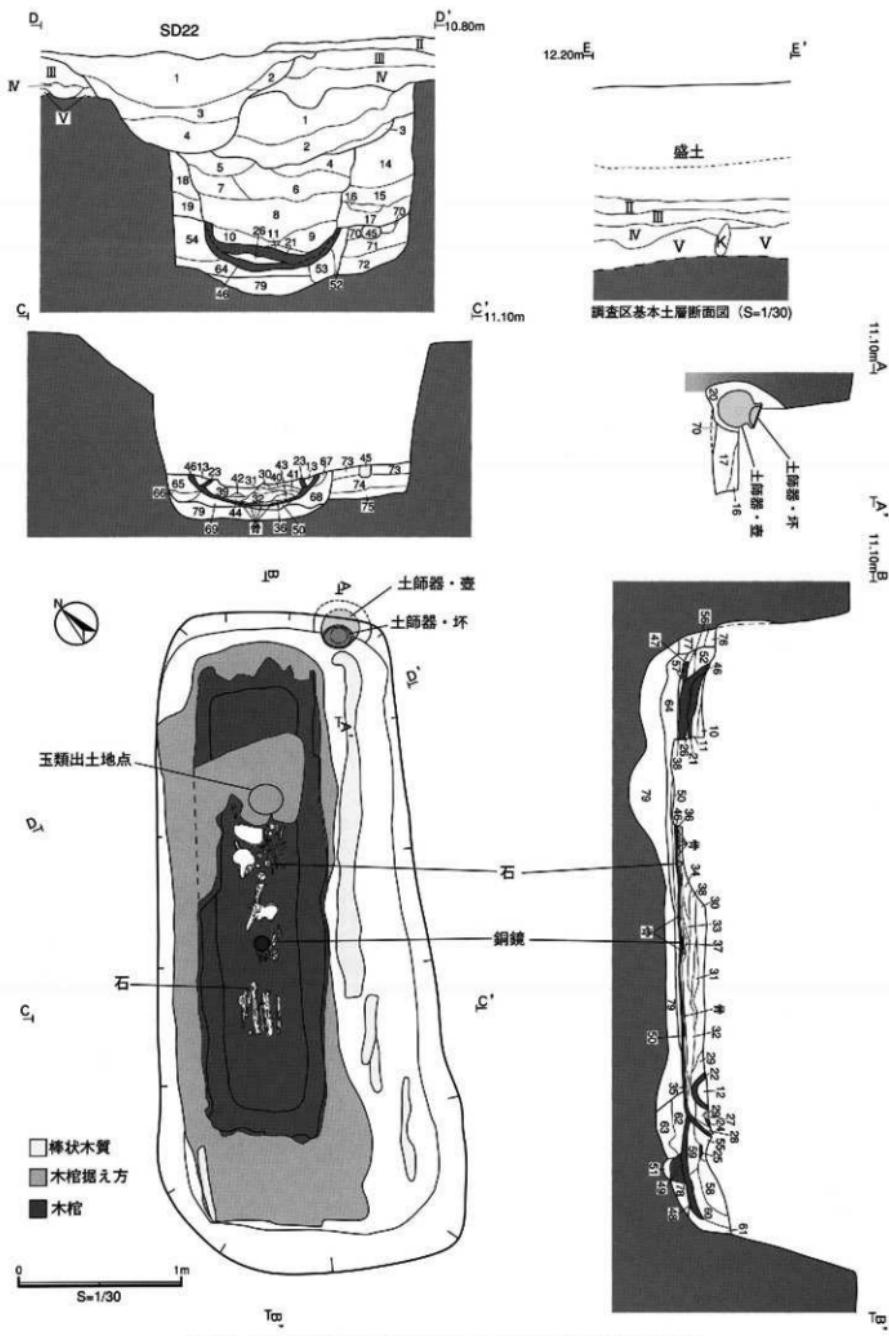
「下層木質」とは、木棺除去後に、木棺据え方の南西側の木棺床面とほぼ同一の高さで、南西端が若干持ち上がるような形で検出された木質部である。全長は約50cm、横幅は最大約80cmで、やや歪な三角形を呈している。検出状況から、本来は木棺身部に接続するように置かれていたと考えられる。反対側の北東側の木棺下層でも同様の木質の一部が検出されたが、南北側ほどの規模ではなく、一部が突出する程度の大きさである。用途は不明である。南西側の下層木質のさらに下部からは、ビットが3基確認された。

掘方埋土からは、木棺身部が検出された高さで、黒く腐食した「棒状木質」が木棺東側で4ヶ所、西側で1ヶ所検出された。この棒状木質は隣接する大野田古墳群の過去の調査でも同様に検出例があるが(註1)、大野田古墳群のものは掘方の底面で検出されているのに対し、今回検出されたものは木棺の検出面の高さで検出されている点が異なっている。

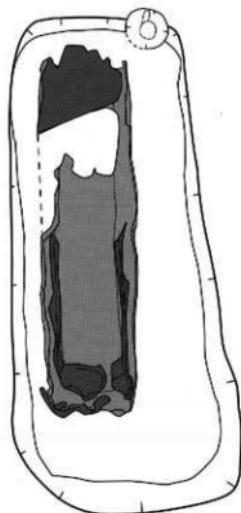
棺内からは1体分の人骨が出土し、頭骨、肋骨、腕骨、指骨、脚骨などが確認された。北東側から順に、頭骨、



第22図 六反田遺跡7F-1区V層構造配置図

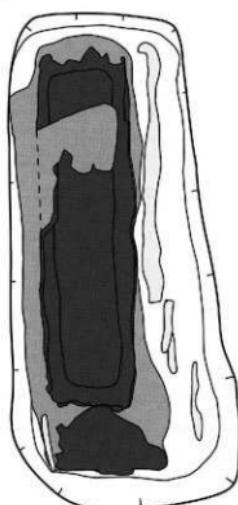


第23図 7F-1区SK9木棺墓遺物出土状況・土層断面・調査区基本土層断面図



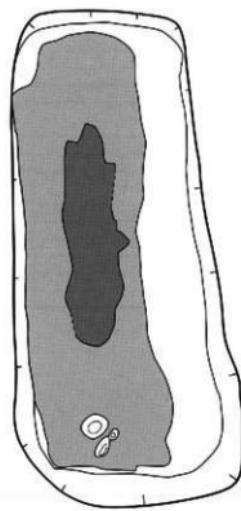
1. 木棺蓋部残存範囲・  
袋状振り込み

■ 木棺蓋部  
■ 木棺身部



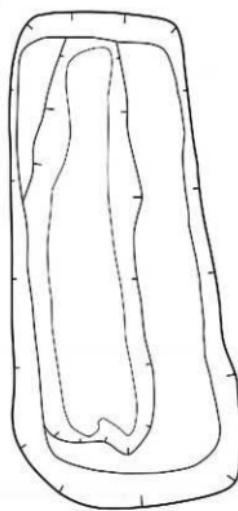
2. 木棺身部・下層木質・  
棒状木質・木棺据え方

□ 棒状木質  
■ 木棺据え方  
■ 木棺身部・  
木棺下層木質



3. 木棺据え方・木棺下層粘土・ピット

■ 粘土範囲  
■ 木棺据え方



4. 掘方

0 1m  
S=1/40

第24図 SK9木棺墓遺構平面図

(1. 木棺蓋部残存範囲・袋状振り込み、2. 木棺身部・下層木質・棒状木質・木棺据え方、3. 木棺据え方・木棺下層粘土・ピット、4. 掘方)

	地番	色調	土質	備考
本番	II	10YR4/3 ないし黄褐色	粘土質シルト	炭化鉱物で多量、灰葉腐色 (10YR4/2) 粘土質シルトブロック少量、直面ブロック少量
	III	10YR3/4 黄褐色	シルト質粘土	褐色 (10YR4/1) 粘土質シルトブロック類似に含む、陳化鉱物多量、マンガン粒多量、炭化鉱物
	IV	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	褐色 (10YR3/0) シルト質粘土ブロック状況に含む、小砂中量、粗砂中量
	V	10YK3/3 ないし青褐色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR4/2) シルト質粘土ブロック少量、灰化鉱物多量、マンガン粒多量
SD22	1	10YR3/3 灰褐色	粘土質シルト	灰化鉱物中量、V層ブロック少量
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	マンガン粒少量、V層ブロック少量
	3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰葉腐色 (10YR5/2) 粘土質少量、灰褐色 (10YR7/6) 粘土粒少量
	4	10YR3/4 灰褐色	粘土質シルト	V層ブロック・暗褐色 (10YR3/2) 粘土質シルトブロック並状に含む、灰褐色 (SYR5/0) 粘土質シルト粒少量
	地番	色調	土質	備考
SK9	1	10YR3/4 増褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰褐色 (10YR5/2) 粘土質シルトブロック中量、炭化鉱物少量 箇段丸堆積土
	2	10YR3/4 灰褐色	粘土質シルト	V層ブロック少量、灰葉褐色 (10YR5/2) 粘土質シルトブロック中量、炭化鉱物少量 箇段丸堆積土上
	3	10YR2/1 黑褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、炭化鉱物少量 箇段丸堆積土
	4	10YR3/4 増褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰褐色 (10YR3/2) 粘土質シルトブロック中量、炭化鉱物少量 箇段丸堆積土
	5	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR3/2) 粘土質シルトブロック中量、灰葉褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト 箇段丸堆積土上
	6	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR3/2) 粘土質シルトブロック少量、灰化鉱物少量 箇段丸堆積土上
	7	10YR3/4 増褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰褐色 (10YR5/2) 粘土質シルトブロック少量、炭化鉱物少量 箇段丸堆積土七
	8	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰葉褐色 (10YR5/2) 粘土質シルトブロック少量、炭化鉱物少量 箇段丸堆積土上
	9	10YR2/3 増褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、炭化鉱物少量 (10YR5/2) 粘土質シルトブロック中量、炭化鉱物少量 箇段丸堆積土七
	10	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト少量 箇段丸堆積土上
	11	10YR6/6 黑褐色	粘土質シルト	均一層 箇段丸堆積土十
	12	10YR4/6 黑褐色	粘土質シルト	灰葉褐色 (10YR6/2) 粘土粒少量、灰褐色 (10YR5/2) 砂質粘土少量 箇段丸堆積土上
	13	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	箇段丸堆積土ブロック (10YR2/3) 多量、灰葉褐色 (10YR5/2) 砂質粘土少量 箇段丸堆積土十
	14	10YR3/4 増褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰褐色 (10YR5/2) 粘土質シルトブロック中量、炭化鉱物少量、 灰葉褐色 (10YR6/4) 粘土粒少量 本相認め上
	15	10YK3/4 増褐色	粘土質シルト	炭褐色 (10YR2/2) 粘土質シルトブロック主体、V層ブロック中量、炭化鉱物少量、 にないV層變態 (10YR6/4) 粘土質シルト 本相認め上
	16	10YR3/3 増褐色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR2/2) 粘土質シルトブロック中量、V層ブロック少量 本相認め上
	17	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰褐色 (10YR2/2) 粘土質シルトブロック中量、炭化鉱物少量、 灰葉褐色 (10YR2/2) 粘土粒少量 本相認め上
	18	10YR3/4 増褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰葉褐色 (10YR2/2) 粘土質シルトブロック中量、炭化鉱物少量、 灰褐色 (10YR2/2) 粘土粒少量 本相認め上
	19	10YR3/4 増褐色	粘土質シルト	V層ブロック主体、灰葉褐色 (10YR2/2) 粘土質シルトブロック中量、炭化鉱物少量、 灰褐色 (10YR2/2) 粘土粒少量 本相認め上
	20	10YR3/4 黑褐色	粘土質シルト	均一層 (5YR7/3) 粘土質シルト粒少量 侵食面より込み
	21	10YK2/1 黑褐色	シルト質粘土	灰褐色 (10YR6/6) 粘質シルト中量、灰褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト中量 本相認め上
	22	10YR2/1 黑褐色	シルト質粘土	灰褐色 (10YR6/6) 砂質粘土少量、灰褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト少量 本相認め上
	23	10YK3/1 黑褐色	シルト質粘土	灰褐色 (10YR6/6) 砂質粘土少量、灰褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト中量 本相認め上
	24	10YR2/1 黑褐色	粘土	灰褐色 (SYR5/0) 砂質粘少量 本相認め上
	25	10YK3/1 黑褐色	シルト質粘土	V層ブロック主体、炭化鉱物少量 本相認め上
	26	10YR3/4 増褐色	粘土質シルト	炭褐色 (10YR2/1) 粘土質シルトブロック少量、 灰褐色 (10YR6/6) 砂質シルト粒少量 本相内堆積土
	27	10YR3/4 増褐色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR2/1) シルトブロック中量、褐色 (7SYR6/6) 砂質粘少量 本相内堆積土
	28	10YR4/3 ないし黄褐色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト粒少量 本相内堆積土
	29	10YR3/4 増褐色	粘土質シルト	灰褐色 (10YR2/1) 粘土質シルトブロック少量、 にないV層變態 (10YR7/2) 粘土質シルト少量 本相内堆積土
	30	10YR3/4 増褐色	粘土質シルト	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト少量、灰白色 (10YR8/2) 粘土粒少量 本相内堆積土
	31	10YR3/3 增褐色	粘土質シルト	褐色 (10YR4/4) 粘土粒少量 本相内堆積土
	32	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	粘土質シルト 本相内堆積土
	33	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	炭化ブロック少量 本相内堆積土
	34	10YK3/3 増褐色	粘土質シルト	炭化ブロック少量、灰褐色 (10YR5/6) 砂質粘少量 本相内堆積土
	35	10YR2/1 黑褐色	粘土質シルト	褐色 (10YR4/6) 粘土質シルトブロック少量 本相内堆積土

表3 土層注記表1

	層位	色 調	上 質	性 質	等
SK9	36	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	褐色 (10YR4/4) シルト質粘少量	木棺内堆積上
	37	10YD2/2 黑褐色	シルト質粘土	均一層	木棺内堆積中
	38	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	暗褐色 (10YR2/3) 粘土質少量	木棺内堆積上
	39	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	V層プロック中量、黒褐色 (10YR4/1) 粘土ブロック少量	木棺内堆積土
	40	10YR2/4 黒褐色	粘土質シルト	褐色 (10YR2/3) 黏土ブロック少量、褐色 (10YR4/6) 砂質粘少量	木棺内堆積土
	41	10YR2/4 出褐色	シルト質粘土	浅褐色 (10YR8/8) 粘土質シルトブロック少量	木棺内堆積上
	42	10YR2/4 黒褐色	粘土質シルト	褐色 (10YR2/4) 粘土ブロック中量、にい黄褐色 (10YR5/4) 砂質粘中量	木棺内堆積土
	43	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	浅褐色 (10YR2/6) 砂質粘少量	木棺内堆積上
	44	10YR4/3 にい黄褐色	粘土質シルト	褐色 (10YR3/1) 粘土少量	木棺内堆積土
	45	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	褐色 (10YR4/6) 砂質シルト粘少量	砂状木質
	46	10YR2/2 黑褐色	粘土	黃褐色 (10YR1/3) 砂質粘少量	木棺内部
	47	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	にい黄褐色 (10Y2/4) 砂質粘少量	木棺下層木質
	48	10YR2/2 黑色	粘土	明赤褐色 (5YR5/6) 砂質粘少量、 明黄色 (10Y4/6) 砂質粘少量	木棺下層木質
	49	10YR3/3 黄褐色	粘土	にい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルトブロック少量	木棺下層木質
	50	10YR4/3 にい黄褐色	粘土	褐色 (10YR3/4) 粘土膠結に含む、炭化物粒中量	木棺下層粘土
	51	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	V層プロック少量、炭化物粒少量	木棺下層ビット
	52	10YR4/6 黄色	粘土質シルト	にい黄褐色 (10YR5/3) 粘ナブロック少量、 褐色 (10Y3/3) 粘土質シルトブロック少量	木棺側上方
	53	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	にい黄褐色 (10YR4/5) 粘土質シルト中量、炭化物粒少量	木棺側上方
	54	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	褐色 (10YR4/6) 砂質粘少量	木棺側上方
	55	10YR4/4 黄色	粘土質シルト	黒褐色 (10YR3/1) 粘土質シルトブロック中量、明黄色 (10YR5/6) 砂質粘少量	木棺側上方
	56	10YR3/4 黄褐色	砂質粘土	炭化物粒少量	木棺側上方
	57	10YR4/3 にい黄褐色	粘土質シルト	にい黄褐色 (10TR6/4) 砂質粗粒灰に含む、炭化物粒少量	木棺側上方
	58	10YR3/1 黄褐色	粘土質シルト	V層プロック塊状に含む、黒褐色 (10YR2/3) 粘ナブロック少量	木棺側上方
	59	10YR4/3 にい黄褐色	粘土質シルト	褐色 (10YR2/3) 粘土ブロック中量、V層プロック少量	木棺側上方
	60	10YR4/4 黄色	粘土質シルト	V層プロック主体、黒褐色 (10Y3/2) 粘土ブロック中量	木棺側上方
	61	10YR4/4 黄色	粘土質シルト	V層プロック主体、炭化物粒少量	木棺側上方
	62	10YR4/3 にい黄褐色	粘土質シルト	V層プロック少量、炭化物粒少量	木棺側上方
	63	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	V層プロック中量、炭化物粒少量	木棺側上方
	64	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルトブロック少量	木棺側上方
	65	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロック (10Y3/2) 粘土質シルト	木棺側上方
	66	10YR4/4 黄色	砂質シルト	V層プロック少量、黃褐色 (10Y5/6) 砂質粘少量	木棺側上方
	67	10YR4/3 にい黄褐色	砂質粘土	浅黃褐色 (10YR5/6) 砂質粘少量、炭化物粒少量	木棺側上方
	68	10YR4/4 黄色	粘土質シルト	V層プロック少量	木棺側上方
	69	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒中量、V層プロック少量	木棺側上方
	70	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	黒褐色 (10YR2/1) 粘土質シルトブロック中量、炭化物粒少量	基準断面
	71	10YR3/4 黄色	粘土質シルト	V層プロック少量、にい黄褐色 (10YR5/4) 粘ナブロック中量、炭化物粒少量	基準断面
	72	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	にい黄褐色 (10YR5/4) 粘ナブロック少量、炭化物粒少量	基準断面
	73	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	V層プロック主体、黒褐色 (10Y2/3) 粘土質シルトブロック中量	基準断面
	74	10YR4/4 黄色	粘土質シルト	V層プロック主体、深褐色 (10YK1/3) 粘ナブロック中量、炭化物粒少量	基準断面
	75	10YR4/4 黄色	粘土質シルト	V層プロック主体、炭化物粒少量	基準断面
	76	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	にい黄褐色 (10YR7/2) 粘ナブロック少量、黒褐色 (10YR2/3) シルトブロック少量	基準断面
	77	10YR4/3 にい黄褐色	砂質シルト	V層プロック主体、炭化物粒少量	基準断面
	78	10YR4/4 黄色	砂質シルト	炭化物粒少量	基準断面
	79	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	V層プロック主体、にい黄褐色 (10YR5/4) 粘ナブロック中量、炭化物粒少量	基準断面

表4 土層注記表2

肋骨が検出され、中央部では銅鏡の周囲から腕骨、指骨が検出された。さらに、南西側から脚骨が検出されている。脚骨は両足分6本が確認されたが、平行に並んだ状態で出土している。

棺内の副葬品は、碧玉製管玉10点と青色のガラス小玉8点（註2）が、頭骨の北東側からまとまって出土している。管玉は長さが約2~27cm、直徑が約5~9mmで、片面穿孔によって直徑0.5~2mmの孔が開けられている。ガラス小玉は長さが約3~4mmで直徑が約4~6mmの大きさである。

その他にも棺内からは、中央部や南西寄りの地点から銅鏡1面が出土した。銅鏡は直徑が9cmで、鏡面を上向きにした状態で出土した。銅鏡の鏡背面の中央には、高さ約6mm、最大径約1cmの鉢孔が設けられている。鏡背面の一部に纖維状の付着物が確認されたが、詳細については不明である。銅鏡の種類についても、文様が鮮明でないため現時点では不明である。また、脚骨と肋骨が検出された場所で、それぞれ大きさ約3cmの石が1点ずつ、骨の上から出土した。

木棺墓の掘方東壁には、直徑約30cm、深さが約45cmの不整円形をした袋状掘り込みが確認され、土師器の壺の口縁部に、壺が重ねられた状態（入子）で出土した。壺は口径約16cmで、高さが約27.5cmである。壺は直徑が14.3cmで高さは4.5cm、丸底で体部と口縁部の境に強い綫が形成されて、内面が黒色処理されている。この袋状掘り込みは、木棺を据えて、ある程度の高さまで土を埋め戻した後、第17層より上位の面から掘り込まれ、遺物が埋納されている。

#### 4.まとめ

今回の調査では、木棺墓が比較的良好な残存状況で発見された。人骨も検出され、玉類や土器、銅鏡などの副葬品がまとまって発見されており、貴重な発見といえる。

今回発見された木棺墓の年代は、出土したが住式土器であることから、6世紀中葉～末葉（仙台市教育委員会2010b）と考えられる。仙台市内で古墳時代の木棺墓が検出されたのは6例目で、この6例は全て大野田古墳群の周辺地域で発見されている（註3）。また、古墳時代の銅鏡が出土した事例は仙台市内では4例目で、木棺墓から出土した事例としては初めてである。

註1 大野川1号木棺墓（仙台市教育委員会2000a）

註2 今回出土した人骨は木棺床面と共に取り上げられており、今後の整理作業によって、人骨と離着した木棺身部を剥がせば、玉類等の遺物がさらに出土する可能性がある。

註3 大野田古墳群の周辺では過去の調査で5例の木棺墓が検出されているが、そのうち2例が既に報告されている（仙台市教育委員会1981、2000a）。残りの3例についても、今後刊行が予定されている宮沢駅周辺地区画整理事業の発掘調査報告書内にて報告される予定である。



1. SK9木棺墓検出状況（南西から）



2. SK9木棺墓土層断面（南西から）



3. 袋状掘り込み検出状況（南西から）



4. 袋状掘り込み遺物出土状況（南西から）



5. 木棺蓋部検出状況（南東から）



6. 木棺内土層断面（南西から）



7. 木棺内土層断面（北西から）



8. 木棺墓完掘状況（南東から）

写真図版15 SK9木棺墓調査状況



1. 木棺墓遺物出土状況（直上から）



2. 銅鏡出土状況（南西から）



3. 木棺下層木質検出状況（北東から）



4. 木棺墓内出土遺物（土師器壺・壺・銅鏡・管玉・ガラス小玉）



写真図版16 SK9木棺墓調査状況と出土遺物

## 第4章 法領塚古墳 第2次調査

### I. 調査概要

#### 1. 調査経過

法領塚古墳は仙台市若林区一本杉町1-2他に所在する、横穴式石室をもつ円墳である。今回の調査は、平成22年7月26日付で、学校法人聖ウルスラ学院より学校校舎新築工事に伴う「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」が提出され、それにより平成22年8月17日から8月27日に試掘調査が行われた。その結果、従来考えられていた古墳の墳丘の範囲が広がる可能性が考えられた。その後、保存に係る協議を経た上で、校舎建築範囲における本発掘調査を平成22年10月12日から11月12日にかけて実施した。以上の一連の調査は開発に伴う調査であるが、試掘調査において、石室の前方である南側で溝状の落ち込みが検出された。この地点は校舎建築範囲に隣接しており、工事による削平は免れるものの校舎建築後の調査が困難となる地点であった。遺構は石室の前方で検出されたことから、その性格を把握することが非常に重要であると判断されたため、建築範囲に隣接する墳丘南部について国庫補助事業として確認調査を行うこととなった。調査は平成22年10月14日から11月20日にかけて実施している。また、建築工事に伴う調査の成果と併せ、11月11日に報道発表を行い、同時に聖ウルスラ学院英智の生徒に現場を公開している。さらに行宮について、昭和45年の調査時に比べ、歪みが生じるなどの変化が認められた。そのため、今回改めて石室の現況図を作成することとなり、石室内のレーザー測量を平成23年2月18日に行った。

なお、今回の発掘調査の成果により、法領塚古墳の墳丘が従来想定されていた範囲より広がることが判明したため、平成23年1月に遺跡範囲を拡大訂正して宮城県教育委員会に通知している。

今回の報告は国庫補助事業の調査についての報告であるが、検出された遺構は、南側に隣接する建築工事範囲内の調査において検出されたものと一体を成す遺構であるため、併せて報告する。また遺物についても、試掘調査時に出土したものを含めて報告することとする。

#### 2. 遺跡概要

法領塚古墳はJR仙台駅の南東約2.5km、学校法人聖ウルスラ学院英智中学校、高等学校の敷地内北東隅に位置している。本古墳周辺の土地は伊達家臣佐々家の屋敷地であったが、明治初年に伊達屋敷に転じ、その後、昭和29年より聖ウルスラ学院の所有となり、墳丘部が現在まで保存されるに至っている。

古墳の石室について、東壁の一部の自然崩壊や天井石落盤の危険性があったため、その修復、補強の必要性から、昭和45年に石室の実態把握を目的とした調査が行われている（註1）。この第1次調査により、法領塚古墳は墳丘径約32m、高さ約6mの円墳であることや、石室内の詳細な構造が明らかにされた。古墳の築造年代については、石室の構造や出土遺物から、7世紀初頭前後から7世紀中葉前後と推定されている。

なお、調査終了後の昭和46年に石室補強工事が行われ、側壁の裏側にコンクリートが注入された。また、今回の調査時に石室内の現況を第1次調査時の図面、写真等の記録を比較した結果、天井石や西側壁などには石を充填するなどの補強も行われたと考えられる。

##### （1）地理的環境

遺跡周辺の地形について、西方では奥羽山脈の東麓から派生する青葉山丘陵が延びており、その丘陵を貫流する形で名取川、広瀬川が東流している。これらの河川の浸食作用により丘陵部では4~5段の段丘面が形成され、丘陵の東方では沖積作用により宮城野海岸平野が形成される。平野部では河川の周囲に自然堤防、後背湿地が発達しており、広瀬川と名取川の合流点付近について、広瀬川以北は特に霞ヶ丘陵と呼ばれている。本遺跡はこの霞ヶ丘陵に位置し、広瀬川左岸の標高約12mの自然堤防上に立地している。

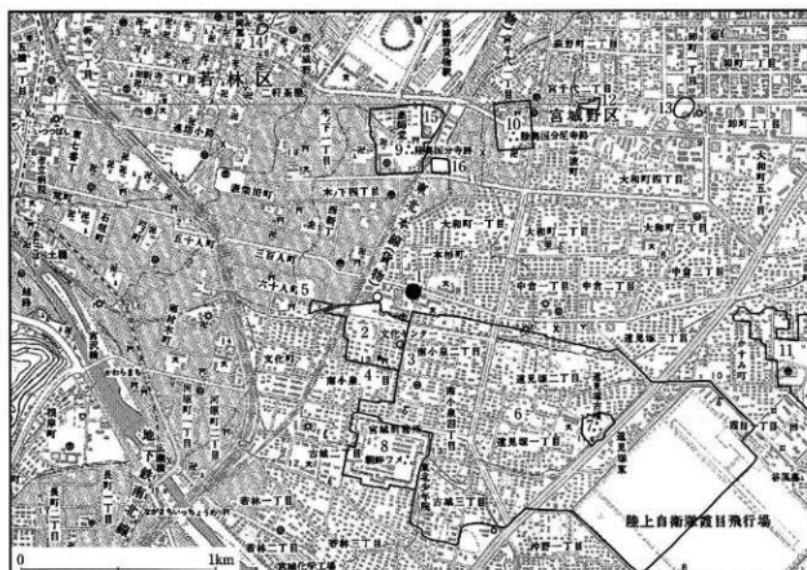
## (2) 歴史的環境

绳文時代では、本遺跡周辺において遺構は検出されていないが、本遺跡の南東側に広がる南小泉遺跡の中央部で晩期後半の包含層が確認されている。また、南小泉遺跡に西接する姜種園遺跡や、さらに西に位置する保春院前遺跡でも中期から晩期の上器が出土している。

弥生時代では、中期において、南小泉遺跡東部の霞ヶ原飛行場地内で樹形円式期の合口土器棺が出土したほか、土器、石器が多量に出土している。姜種園遺跡でも同時期と考えられる土器棺墓が検出されている。また、本遺跡の南約2.5kmの広瀬川対岸に位置する郡山遺跡では、中期中葉以前とされる水田跡が検出されたほか、郡山遺跡に西接する西台畠遺跡や長町駅東遺跡からは、中期中葉の住居跡、土器棺墓、土坑墓が検出されている。

古墳時代では本遺跡を含め、平野部に多くの古墳が築造される。前期の古墳としては、本遺跡の南東約1.2kmに遼見塚古墳が築造されており、東北有数の規模である。しかしこの時期には、周辺の遺跡では大規模な集落跡は確認されておらず、南小泉遺跡で埴輪式期の住居跡が1軒検出されたのみである。その後、中期前半から南小泉遺跡では集落が本格的に形成され、多数の堅穴住居跡が検出されている。これらの住居跡では、地床炉をもつものとカマドを持つものがあり、古墳時代中期が地床炉からカマドへの移行期にあたることを示している。また、石製模造品が多数出土したほか、その製作工房と考えられる住居跡も検出されている。さらに、遺跡中心部に近い第16次調査地点からは鉄滓が出土しているが、鉱物組成の分析の結果、原料は中国大陸からの移入品である可能性が指摘されている（註1）。また、遠見塚小学校の南に位置する第17次調査地点では、彷彿鏡が出土している。古墳時代の集落内における鏡の出土は市内ではこの1例のみであり、非常に珍しい事例である。南小泉遺跡では、後期にも継続的に集落が営まれ続けている。堅穴住居跡の検出数から、中期に比べ集落の規模は縮小する傾向が窺えるほか、出土遺物についても石製模造品が消滅し、小型手捏ね土器や土玉が出土する傾向が指摘されている。その他、姜種園遺跡でも住居跡が検出されているが、うち1軒が焼失住居であり、出土した土器の器種組成や個体数から、当時の生活様式を知る上で重要である。一方、中期以降の古墳に関しては、中期前半では古墳は築造されず、5世紀後半から6世紀にかけて多数の古墳が築造される。本遺跡の南西約4kmに位置する大野田地区では、大野田古墳群、六反田遺跡の範囲に前方後円墳1基を含む44基の古墳が発見されている。同時期には、西方の丘陵裾部でも古墳が築造されており、姜町古墳・兜塚古墳・砂押古墳など主要な前方後円墳・円墳が存在する。さらに三神峯古墳群や原遺跡で小規模な円墳が築造されている。本遺跡周辺では、南方約800mに位置する若林城跡の敷地内で若林城内古墳が発見され、その規模や出土した筒瓦輪軸から、上記の古墳と同時期と考えられる。その他詳細は不明であるが、本遺跡の南約250mには蛇塚古墳が、約350mの地点には猫塚古墳がそれぞれ立地している。6世紀半ば以降になると、時期が明らかとなる古墳の数は減少する。また、大野田古墳群では木棺墓が数基検出されている。これらの木棺墓は残存状況が悪く、遺物が少ないものも認められるが、時期が明らかなものは6世紀代である。一方、丘陵部では7世紀初頭から横穴墓が形成され始める。また、名取川右岸の自然堤防上に立地する安久東古墳群において、横穴式石室をもつ古墳も築造され始める。この古墳群は南方1kmに位置する清水遺跡と併せ、出土遺物や石室の構造から、埼玉県西北部や群馬県南部など利根川流域との関連性が指摘されている。7世紀中葉になると、郡山遺跡で官衙が造営される。I期、II期に大別され、I期は7世紀半ばから7世紀末、II期は7世紀末から8世紀初頭である。また、隣接する西台畠遺跡・長町駅東遺跡からは、関東地方と同様のカマド構造をもつ堅穴住居跡が多数検出され、関東系土師器も多数出土し、官衙造営に携わった人々の集落跡と考えられている。さらにII期官衙跡には、大野田地区で官衙関連の遺構が検出されており、大野田官衙遺跡として調査が行われている。この遺跡はその性格や時期など解明すべき点がまだ多いが、郡山遺跡との関連が考えられる官衙跡である。

奈良時代では、本遺跡の北約700mに陸奥国分寺、その東約500mの地点に陸奥国分尼寺が創建される。国分寺はその創建丸が多賀城第II期のものと同時期であり、その頃には伽藍の主要部が完成したと考えられている。南小泉



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
2	美稚園遺跡	集落跡、屋敷跡、包含地	自然堤防	縄文、弥生、古墳、平安、中世、近世
3	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
4	貓塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
5	保春院前遺跡	集落跡	自然堤防	古代、中世、近世
6	南小泉道路跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世
7	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
8	若林城跡	円墳、集落跡、城館跡	自然堤防	古墳、平安、中世、近世
9	雞與國分寺跡	寺院跡	砂礫地	奈良、平安
10	雞與國分尼寺跡	寺院跡	砂礫地	奈良、平安
11	仙台東郊条里跡	条里跡	後背湿地	奈良、平安
12	志波遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
13	谷地館跡	城館跡	後背湿地	中世
14	正雲寺遺跡	散布地	段丘	平安
15	国分寺東遺跡	集落跡	砂礫地	古代、中世、近世
16	藥師堂東遺跡	集落跡	砂礫地	奈良、平安、中世、近世

第25図 法領塚古墳の位置と周辺の遺跡 (S=1/25000・註3)

遺跡、養種園遺跡、保春院前遺跡では当該期の集落跡が確認されている。

平安時代では、南小泉遺跡西部から保春院前遺跡、若林城跡北東部にかけて、住居跡が散在的に分布している。また南小泉遺跡南西部の第6次調査地点では、9世紀代の住居跡としては異例の大きさをもつ堅穴住居跡が検出され、墨書き土器を含め多数の遺物が出土している。周辺の状況も含め、一般集落とは性格を異なる可能性が指摘されている。

中世では南小泉遺跡において、12世紀後半頃の初現的な屋敷跡が検出され、13世紀には堀を方形に巡らせた屋敷跡も検出されている。その後、14世紀後半には巨大な堀と土塁をもつ大規模な館に発展した様子が明らかにされている。またこの時期には、養種園遺跡の第2次調査地点において土坑墓が多数検出され、庶民の墓と推定されている。15世紀中頃以降は、南小泉遺跡内では城館は検出されておらず、遺物包含層も認められない。一方、養種園遺跡では15世紀末から17世紀初頭にかけて、大溝で区画された中に掘立柱建物跡や井戸跡などが検出され、当時のこの地域の領主である国分氏の家臣クラスの居住地と推定されている。また、この居住地内からは鍛冶関連の遺構や遺物が多数見つかっており、金属加工を行った工人集団の存在も指摘されている。さらに、若林城跡における近年の調査成果により、若林城造営前に堀が巡らされていたことが一部で明らかになり、今後城館の存在を考える上で重要な事例である。また陸奥国分寺跡については、最近の調査成果により国分寺東遺跡や薬師堂東遺跡で中世の遺構、遺物が検出されており、この時期の国分寺のあり方を考える上で重要である。

近世では、1628年（寛永5年）に伊達政宗の居城として若林城が完成し、城下町も形成される。1636年（寛永13年）に政宗が死去した後、若林城は座城となり、建築物は仙台城二ノ丸に移築された。若林城跡で検出された建物跡の構造と二の丸の絵図に描かれた建物跡の構造が一致するなど、発掘調査成果からも移築の事実が証明されている。若林城廃城後、養種園遺跡地内には「御仮屋」、「小泉屋敷」が造営され、堀跡や池跡などが検出されている。また、保春院前遺跡では鍛冶関連の遺物が相当量出土しており、工人集団の存在が想定されている。一方、陸奥国分寺跡については政宗により再興され、1607年（慶長12年）に薬師堂が造営されており、現在に至っている。

### 3. 調査方法

国庫補助事業による調査区は、石室前方部を中心とした校舎建築工事範囲に隣接する部分について、当初は南北約15m×東西約21mの範囲に不整形の調査区を設定した（第26図）。重機により盛土、擾乱の堆積土を除去し、精査を行った。出土した遺物については適宜、写真、図面による記録を行いながら取り上げている。その後、南北方向の溝状の落ち込みが石室へ延びることが確認されたため、石室の中軸線を通る南北方向に9mのベルトを設定し、西半を掘り下げて調査を進めた。玄室内について調査前の段階では、北半で凝灰岩切石が敷き並べられた状態で露出しており、南半はこの凝灰岩の検出面まで砂層が堆積している状態であった。今回の調査では、この玄室南半の砂層から石室前方の遺構まで通して掘り下げ、底面の様子や土層断面の観察を行っている。遺構については、当初設定した調査区内では掘方埋土を除く堆積土を全て掘り上げている。また石室の中軸線を基準とした南北方向のトレチでは、遺構の堆積土を掘り上げたほか、底面付近では礫が密集して検出された（第31図）。これらの礫は平面図を作成し、調査終了後には土壇で保護した上で埋め戻しを行っている。なお、玄室南半や淡道部の底面で検出された礫については、現況が第1次調査の図面と一致することを確認している。また、側壁を構成する礫についても、図面の照合を行っている。その他、今回の図面作成については、基本的に1m×1mの任意のグリッドを設定して平面図を作成している。また、工事範囲も含めた古墳全体の図面に関しては、測量業者による光波測距機を用いた測量図とグリッド設定による平面図、第1次調査の墳丘実測図を合成して作成している。また一連の発掘調査終了後、石室の現況を図化する必要があると判断し、測量業者に委託して石室のレーザー測量を行った。

なお、以下の文中的「調査区」とは国庫補助事業による調査区だけでなく、南に隣接する建築工事範囲内の調査

区も含めた表記とする。

また遺物の整理作業について、遺物の接合の際には第1次調査時に出土したものも含めて検討を行っている。第1次調査出土遺物は、遺物カードを伴って袋にまとめられた状態であった。今回の接合作業で袋ごとのまとまりに変更が生じるもの、今回図化するために遺物登録番号を新たに付けたものについては、遺物カードを新たに付加し、ネーミングを追加して整理を行った。

## II. 基本層序

調査地点には盛土が0.3~1.3mあり、下部にI~IV層が堆積している。I層はにぶい黄褐色の砂質シルト層で、旧耕作土の可能性が考えられる。II層は黄褐色の砂質シルト層であるが、褐色の粘土を多く含んでおり、砂質シルトと互層状に堆積している箇所も認められる。層厚は残存状況の良好な北部で約80cmである。古墳はこのII層上面で築造されている。III層は黒褐色の粘土質シルト層であり、層厚は調査区南部では10cm弱であるが、北部では約30cmと厚くなる。しまりが強い土層であり、1cm以下の小礫を含んでいる。IV層は暗褐色の砂質シルト層であるが、地点により黒褐色や褐色を呈する。大小の礫を非常に多く含んでいる。

## III. 発見遺構

今回の調査では、古墳に関するものとして石室の前庭部と墳丘の一部が検出された。なお、墳丘については建築工事に伴う調査において比較的良好に確認されている。そのため、墳丘部の調査については仙台市文化財調査報告書第393集で報告する。その他、溝跡2条、ピットが検出されている。また出土遺物については、「IV. 出土遺物」の項で詳細を述べる。

### (1) 古墳

#### 墳丘積土

石室の南東部、南西部においてA~Cの3層が確認された。A層は暗褐色の砂質シルトと黄褐色の粘土質シルトの混合層である。B層は黄褐色の砂質シルト層で、比較的均質な層である。C層は褐色の粘土質シルト層であるが、基本層のII層をブロック状に多く含んでいる。

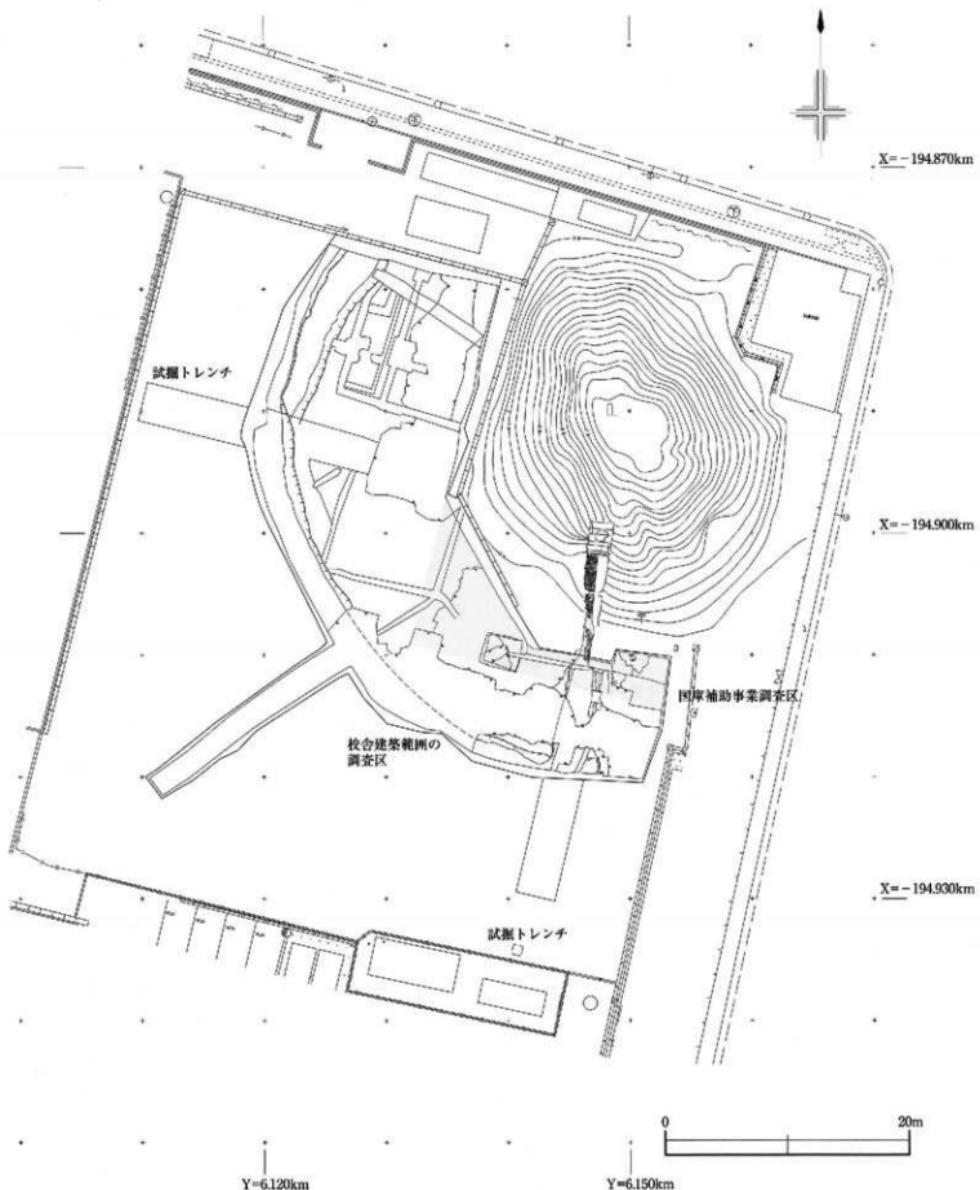
以上の3層が確認され、その下部には基本層のII層が厚く堆積している。このような状況から、墳丘構築時には当時の旧表土を一度削平して整地した後、積土を施して墳丘の築造を行ったと考えられる。

#### 前庭部

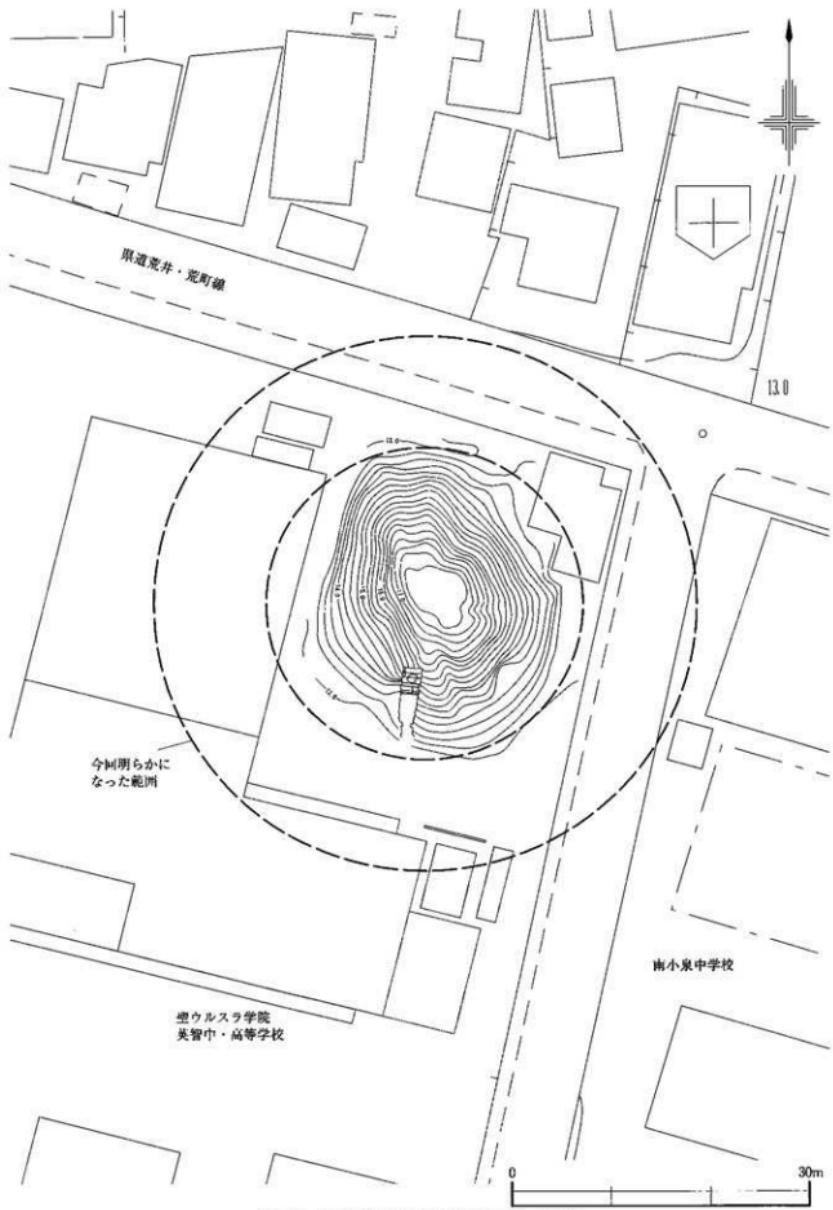
石室前方において、南北方向に延びる溝状の落込みとして検出された。擾乱による削平が大きく、中央部では完全に失われているが、調査区南端で前庭部の西側と墳丘裾の屈曲部（第29図a）が検出されており、狭道との境界（同図b）から墳丘裾との部（a-b）までの長さが約122mである。下幅は北部で2.8~3mで、深さは約90cmである。前庭部の横断面形については、西側が擾乱で大きく削平されており不明な部分がある。但し、前庭部中央や北寄り（第29図B-B'）では、逆台形に掘り込んだ後、前庭部底面に埋土を積み上げ整形している。また南北方向では、埋土上面が北から南へ緩やかに傾斜している。

堆積土については、底面に入れられた埋土（14、15、16層）の上方に大別して13層が確認されている。第4層は灰白色火山灰を含んでおり、土色や火山灰の混入状況により4a、4b層に細分される。また、前庭部北部では第6層の下面で20~40cmの大層が密集して検出されている。

なお、前庭部は擾乱により中央部が完全に削平されたため、北部と南部の堆積土の新旧関係や連続性は不明であった。そのため、南部の堆積土はa~d層として記録をとっている。またc、d層は、墳丘西側の工事範囲内の調査で検出された周溝内堆積土の第1、2層とそれぞれ対応している。



第26図 法領塚古墳第2次調査 調査区配置図 (S=1/300)



第27図 法領塚古墳墳丘範囲復元図 (S=1/500)

## SD1溝跡

前庭部東半でSD1溝跡が検出されている。前庭部北半で検出されており、検出長は約4mである。方向はN-5°-Eであり、上幅70~90cm、下幅25~30cm、深さ10~15cmで、断面形は浅いU字形を呈している。前庭部南畔では擾乱により完全に削平されている。堆積土としては、前庭部内の堆積上の第10、11層が確認されている。第11層はSD1溝跡内だけでなく、前庭部東部に堆積している上層であり、前庭部全体が埋没する過程でSD1溝跡も埋没したことが窺える。

## 漢道

第1次調査で「前庭部」とされていた部分である。西半分を掘り下げて調査したところ、底面で検出された礫が第1次調査の図面と一致することを確認した。全長約1.7m、幅約1.3mである。前庭部とは20cmほどの比高差があり、漢道部の方が高い。南端で急激に落ち込んで段を形成している（第30図A-A'）。側壁を第1次調査の図面と比較したところ、南側上部において、図面には記録の無い礫、図面には記録されているが現況では認められない礫が確認された。図面に記録の無い礫は、第1次調査後の補強工事によるものであり、一部ではコンクリートも確認されている（第28図、註4）。

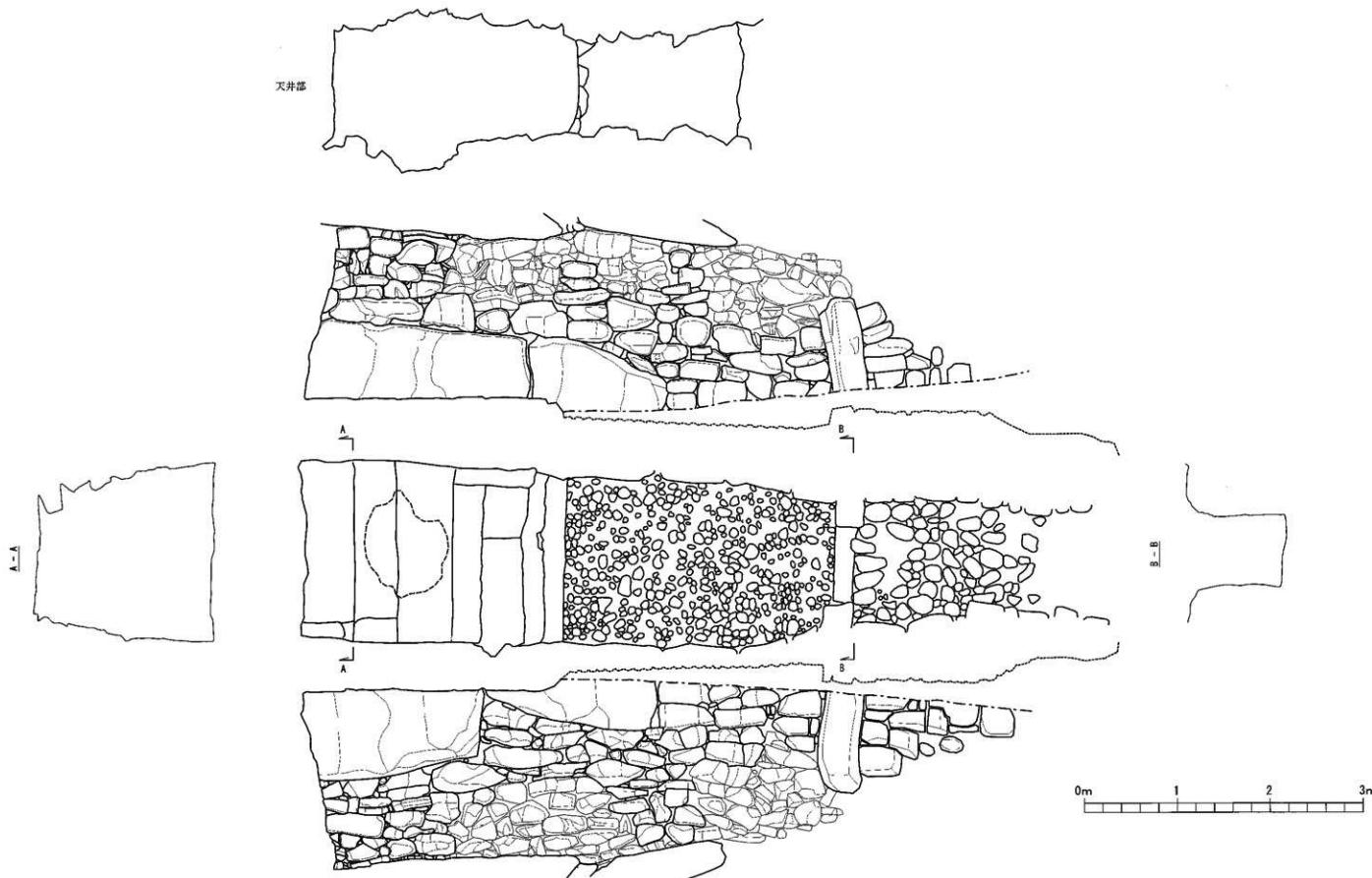
## 玄室

第1次調査において、奥壁側の北半には凝灰岩の切石が敷かれ、手前側の南半には拳大の円礫が敷かれていたことが明らかにされている。今回の調査では、玄室南半に堆積した砂層について西半を掘り下げて調査し、円礫を検出している。凝灰岩切石の上面と円礫の検出面の比高差は約20cm弱であり、南半には凝灰岩切石上面と同じ高さまで砂層が堆積していた。この砂層は第1次調査終了後に流入したものである。底面の円礫敷きの範囲には凝灰岩が多数認められ、第1次調査の報告と一致している。玄室内の構成は、奥壁から凝灰岩切石部の南端までが2.8m、その南3mにわたって円礫敷きの範囲が続いている。そのため、玄室内全体の規模は全長約5.7m、幅約1.9m、高さは奥壁沿いで約1.9mとなる。玄門部の軸については玄門西石の厚さが約34cmであり、その南に漢道、前庭部が続くという構成である。第1次調査の図面と比較した結果、図面に記録の無い部分が西壁で認められた。この部分は盜掘坑であり、第1次調査終了後、補強工事によって礫が充填された部分である。

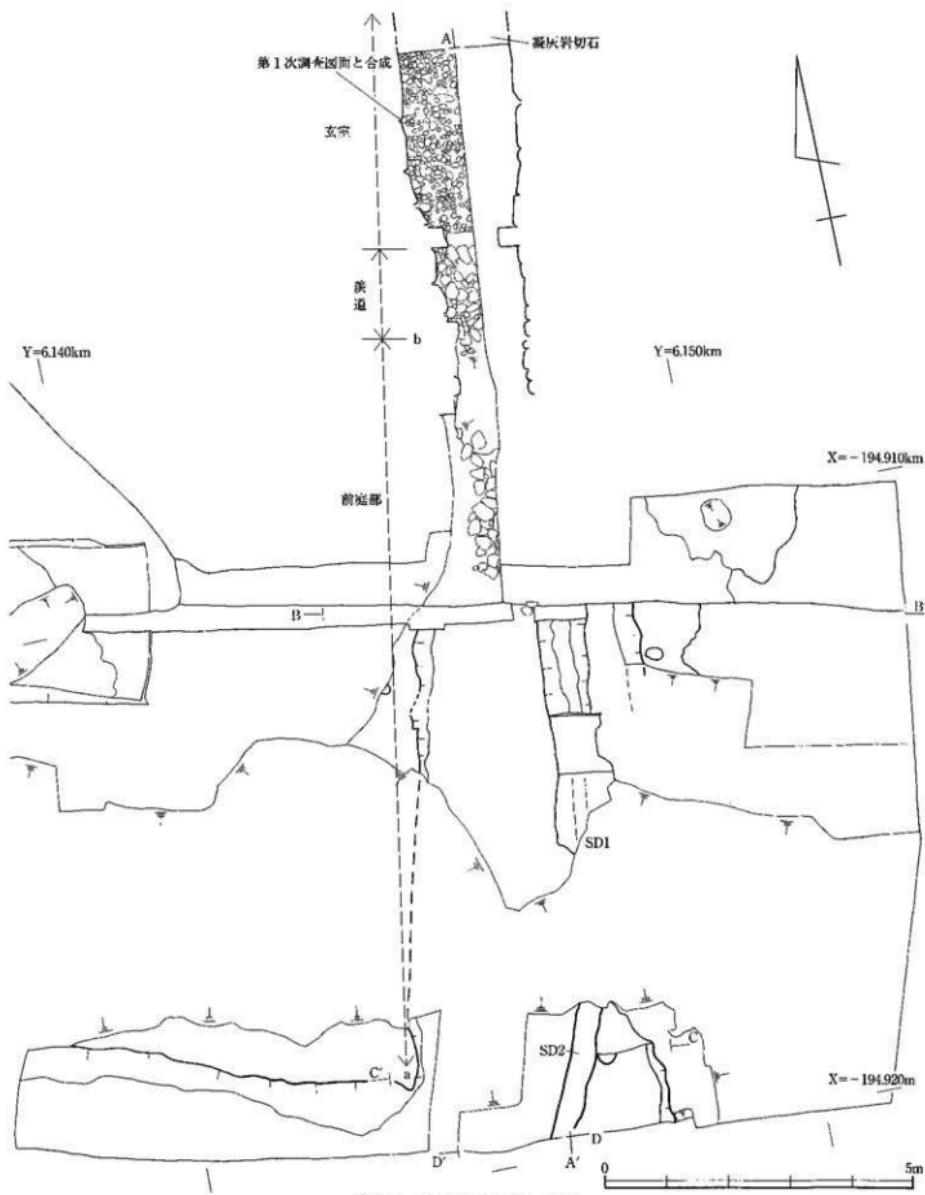
## (2) その他の遺構

### SD2溝跡

調査区南端において、前庭部南部の堆積土c層上面で検出された、北東から南西方向へ斜走する溝跡である。北部は擾乱で削平されており、検出長は約2.3mである。方向はN-22°-Eであり、規模は上幅約80cm、下幅約20cm、深さ約40cmで、断面形はU字形を呈している。堆積土は5層で、いずれも黒褐色上層であり、シルト質粘土層と粘土層が交互に堆積している。遺構検出面であるc層は周溝内堆積土と対応する土層であり、SD2溝跡は墳丘造営時よりも新しい時期の遺構と考えられる。



第28図 法鏡塚石室展開図 ( $S=1/40$ )



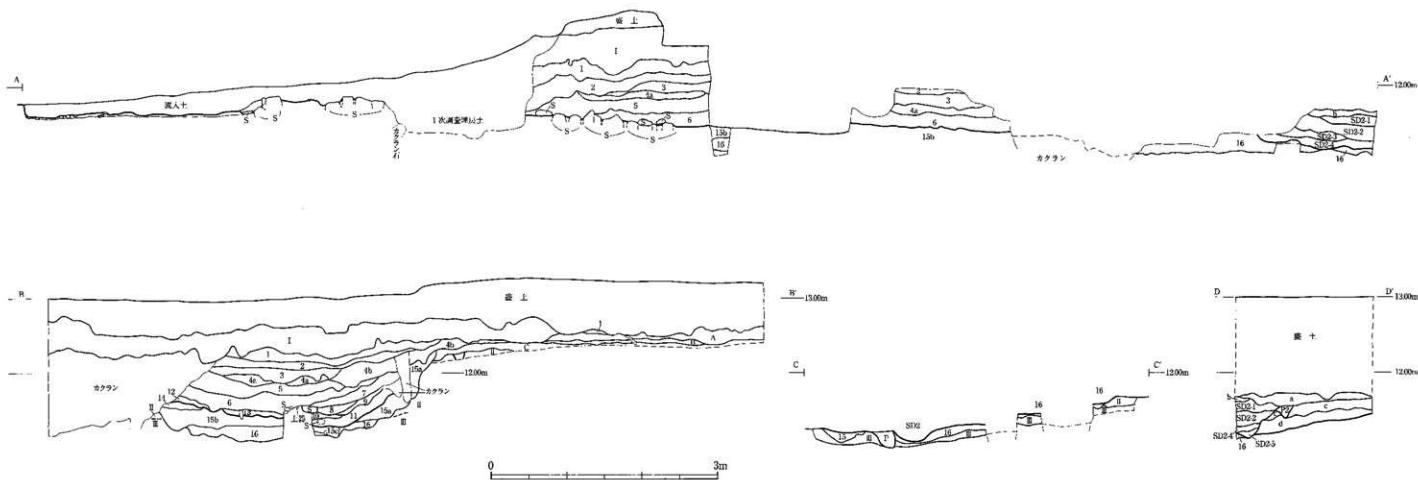
第29図 調査区平面図 (S=1/80)

## IV. 出土遺物

今回の調査では、石室前庭部を中心として、須恵器を主体とした遺物が多量に出土している。第1次調査出土遺物についても今回併せて報告する。

### (1) 前庭部出土遺物

北部の堆積上の出土遺物としては、第1層から須恵器のE-25平瓶が出土している(第33図1)。体部片であり、自然釉がかかっている。第2層からは内面黒色処理された土師器片1点、須恵器壺の体部片2点が出土している。第3層からは須恵器のE-35壺(同図2)、E-34壺(同図3)が出土している。両者とも口縁部の破片である。口縁端部は、外側に折り曲げて成形されており、口縁部には波状文が施されている。その他、須恵器の壺片やロクロ土師器片を含む土器片が数点ずつと鉄製品の可能性のある小片が1点出土している。第4層からはロクロ土師器のD-1杯(同図4)が出土している。D-1杯は底部が平底で、体部がやや直線的に外傾する。底部には糸切の痕跡が見られる。体部下方は手持ちヘラケズリにより調整が施され、内面にはミガキが施されている。第5層からは須恵器のE-24長頸瓶(同図7)、E-27フラスコ形長頸瓶(同図8)、鉄製品のNa-1馬具(写真図版24-5)、Na-2不明鉄製品(写真図版6)が出土している。E-27フラスコ形長頸瓶は体部片である。外面には、深緑色の自然釉がかかっている。胎土は混合物がなく均質で滑らかであり、灰白色を呈している。E-24長頸瓶は2点の破片であるが、胎土や自然釉の色が近似しているため、同一個体と判断した。肩部が張るタイプのものである。Na-1馬具はX線写真的観察の結果、幅5~7mmの鉄棒により環状部と基部を形成する金具と幅8mm程度の鉄棒が組み合っている状態であった。環状部をもつ金具は長さ7.8cm、環状部の最大幅5.6cm、基部先端の幅2.8cmを測る(註5)。組み合う鉄棒は長さ6.3cmであり、金具の環状部を貫通する形では直角に屈曲している様子が窺える。また側面の写真的観察から、この鉄棒を折り曲げることで金具の基部に固定していると思われる(写真図版5c)。このような金具の形状から、鞍に取り付けられる鞍金具である可能性が考えられる。その他、ロクロ土師器のD-2杯や須恵器壺の体部片2点、土器小片3点が出土している。第6層からは、多くの遺物が比較的良好な残存状況で出土している。非ロクロ土師器のC-1杯は内外面に黒色処理を施されている(同図9)。丸底風の底部で、底部と体部の境界は緩やかに渋曲する。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部はわずかに外側に開く。底部と体部の両面にミガキ調整が、口縁部にはヨコナナギが施されている。須恵器のE-20平瓶は口縁部片である(同図10)。頸部は直線的に外傾し、口縁端部は内側に屈曲する。E-29平瓶も口縁部片であり、頸部が外反するものである(同図11)。E-21は提瓶と考えられる(第34図1)。破片は5点あり(写真図版25-1)、それぞれは接合しないが、胎土や色調から同一個体と考えられる。破片aは提瓶の把手であり、下向きの鉤針状を呈する。破片eは体部の中央にあたる部分と考えられる。外面には体部中央から幅の細かい同心円状のカキメが施されている。内面にはエビオサエの痕跡が見られる。破片cは右端部で渋曲が急になっている。カキメの方向などの様相から破片は体側部であり、右端部が平坦面への傾斜変換部であると考えられる。E-19フラスコ形長頸瓶は体部と口縁部の一部を欠くが、器形の全体を把握できる(同図2)。器壁が2~3mmと薄い部分があるにも関わらず、全体が焼き締まっており丈夫な作りである。外面には、口縁部から体部にかけて深緑色の自然釉が厚めにかかっている。また体部下部には、焼台が貼りついた痕跡が見られる。体部は球形に近く、製作時の底部は体部の左側に位置し、粘土を引き上げた後、円盤状の粘土上板によって閉塞されて成形されていることが分かる(同図2b)。頸部は体部の中央を割り抜き、別作りのものを接合している。外面には2本の沈線が施されている。頸部の形状は体部との接合部の直上でやや内湾し、そこからほぼ直線的に外傾する。E-31壺は完形品である(同図3)。全体は青灰色を呈しており、外面には口縁部から体下部の回転ヘラケズリの直上までの範囲に、横方向の細かいカキメが施されている。しかし肩部は灰がかかっているため、カキメは明瞭に観察できない。体部と肩部の境界に1条の沈線、その直下にもう1条の沈線が廻っている。底部は回転ヘラケズ



番号	名 国	上 層	中 層
1	10YR3-2 棕褐色	砂質シルト	白色シルト粘多量、塊(φ2~5cm)少量 炭化物ブロック、小塊(φ1~2cm)、少量。白色シルト粘少量
2	10YR3-4 棕褐色	砂質シルト	炭化物ブロック多量、明瞭褐色(10YR4/6)シート状多量
3	10YR2-4 坎利色	砂質シルト	灰白色火成岩ブロック(φ2~3cm)を斜面合む。炭化物粘多量
4a	10YR4/6 棕色	砂質シルト	砂質シルト、火成岩ブロック(φ2~3cm)を斜面合む。炭化物粘多量
4b	10YR4/4 棕色	砂質シルト	砂質シルト、火成岩ブロック(φ2~3cm)を斜面合む。炭化物粘多量
5	10YR3-4 棕褐色	砂質シルト	砂質シルト、火成岩ブロック(φ2~3cm)少量
6	10YR3-2 棕褐色	砂質シルト	マガソウや少量。白シルト粘少量
7	10YR5-4 にじく灰褐色	粘土質シルト	粘土質粘多量、雨斑褐色(10YR6/8)砂質シルト粘少量
8	10YR3-2 棕褐色	粘土質シルト	粘土質ブロック、白色粘多量(10YR6/8)砂質シルト粘少量
9	10YR3-4 棕褐色	砂質シルト	砂質シルト、火成岩ブロック少量
10	10YR3-4 棕褐色	粘土質シルト	白色粘多量のブロックの混在、炭化物粘多量
11	10YR3-4 棕褐色	砂質シルト	マガソウ、雨斑褐色(10YR6/8)砂質シルト粘少量、10mより明るい SDU地盤上
12	10YR3-4 棕褐色	砂質シルト	砂質シルト(10YR4/6)砂質シルトブロック多量
13	10YR3-4 棕褐色	砂質シルト	砂質シルト(10YR4/6)砂質シルトブロック多量
14	10YR3-4 棕褐色	砂質シルト	砂質シルト、白色粘多量(10YR6/8)砂質シルトブロック下部に少量
15a	10YR5-4 棕褐色	砂質シルト	10mの薄なラブロックの混在、黒泥ドロではじめはくに泥被
15b	10YR3-4 棕褐色	粘土質シルト	砂質シルト
15c	10YR3-4 棕褐色	粘土質シルト	砂質シルト
16	10YR5-6 黄褐色	砂質シルト	砂質粘土質シルトの割合が多い。しまりが強い

番号	色 艶	土 層	標 種
基本層			炭化物少量、マンガン粒や多量、白シルト粘多量、大小の塊を含む。現代耕作土か ぬぐ(10YR4/6)粘土を多く含む
I	10YR5-4 にじく灰褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色
II	10YR5-6 黄褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、(10YR4/6)砂質シルトプロック少量、小塊(φ2~10mm)や多量 しきが大きい、褐色(10YR4/6)粘土互シルトプロック少量、白色シルト粘多量
III	10YR2-3 黄褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、大小の塊を多く含む
IV	10YR3-4 棕褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
V	10YR3-4 棕褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
VI	10YR3-4 棕褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
表面層			上層の異なるブロックの混在、マンガン粒や多量
A	10YR5-6 黄褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
B	10YR5-6 黄褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
C	10YR4/4 岩褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
D	10YR4/4 岩褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
E	10YR4/4 岩褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
F	10YR4/4 岩褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
G	10YR4/4 岩褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
H	10YR4/4 岩褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
I	10YR2-3 黄褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
J	10YR2-3 黄褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
K	10YR2-3 黄褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
L	10YR2-3 黄褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
M	10YR2-3 黄褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
N	10YR2-3 黄褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
O	10YR2-3 黄褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
P	10YR2-3 黄褐色	砂質シルト	10YR2-3 黄褐色、白色シルト粘多量
SD2			マンガン粒多量、白色粘多量、白シルト粘多量、小塊(φ2~3cm)少量
1	10YR2-3 黄褐色	シルト質粘土	炭化物粘多量、マンガン粒や多量
2	10YR2-3 黄褐色	粘土	炭化物粘多量、マンガン粒や多量、白色(10YR6/8)砂質シルトブロック、白色シルト粘多量
3	10YR2-3 黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒少量
4	10YR2-3 黄褐色	粘土	炭化物粘多量、マガソウ、白シルト粘多量、二ノハナモモ(10YR6/8)シルト質粘土、白色(10YR6/8)砂質シルトブロック
P2			炭化物粘多量
1	10YR2-3 黄褐色	粘土	炭化物粘多量

第30図 法領墳古墳断面図 (S=1/50)

りによって丁寧に調整されており、ほぼ平底を呈する。底部と体部の境界は緩やかな曲線を描き、体部は垂直気味に立ち上がる。肩部には明瞭な屈曲を持ち、直線的に内側に伸び、頸部との接合部に至る。頸部は直線的に外傾して口縁部に至る形態である。出土状況については、南北方向のトレーナーの南端付近で横位で検出された。付近からはC-1环やE-5須恵器片も出土している（第31図、写真図版23-1）。E-33横瓶は体部の外面には平行タタキ目、内面には青海波文の当て具痕が認められる（第35図1）。体部に比して頸部と口縁部が小さい。頸部には波状文が施される。口縁端部の断面は、長方形を呈している。出土状況について、SDI溝跡が搅乱に削平される境界部からまとまって出土している。E-20平瓶も同地点から折り重なる状態で出土している（第32図、写真図版23-2、3）。E-5はE-33横瓶と法量や端部の形状が類似することから、同様の器種と考えられる（第35図2）。その他、非クロロ土師器のC-3甕など土師器甕の小片が多数、須恵器甕の小片が2点出土している。また、鉄製品の可能性のある小片が1点出土している。また、第9層から上師器環の小片1点、第11層から土師器小片1点が出土している。

また試掘調査時に出土したため、詳細な出土層位が不明であるが、第4層以下から須恵器甕が出土している。E-32甕は体部外面に平行タタキの後、横方向にカキメが一定間隔で施されている（同図3）。内面には青海波文の当て具痕が見られ、甕部外面には波状文が施される。その他、甕の体部片が4点出土しており、うち1点には鉛滓が付着している。

前庭部南部の堆積土出土遺物としては、d層から須恵器のE-3甕が出土したほか、内面黒色処理されたロクロ土師器环片2点、土師器甕の小片数点、須恵器甕の体部片2点、鉄製品の可能性のある小片が1点出土している。

#### (2) SD2溝跡出土遺物

第2層からは須恵器のE-10甕（第36図1）が出土したほか、土器小片が2点出土している。第3層からはロクロ土師器環の小片が出土している。第4層からは須恵器のE-23提瓶が出土している（同図2）。頸部から体部にかけて深緑色の自然釉がかかる。胎土は灰白色を呈し、混合物はほとんどなく均質である。体部正面の形状はほぼ円形であり、側面觀はやや扁平である。体部から肩部にかけては放射状のカキメ、体部中央には同心円状のカキメが施されている。体部中央部の内面には、成形時の祐土円盤の痕跡が見られる。頸部外面には2条の沈線が施されている。口縁端部は欠けているが、すぐに収束するので、頸部は体部に比して短い。第5層からはE-28須恵器が出土している（同図3）。これは甕の体部破片と比べて器縁が薄いことから、須恵器横瓶の体部破片と考えられる。外面は平行タタキ日の後カキメが施されている。その他、第5層からは鉛滓が1点出土している。

#### (3) その他の出土遺物

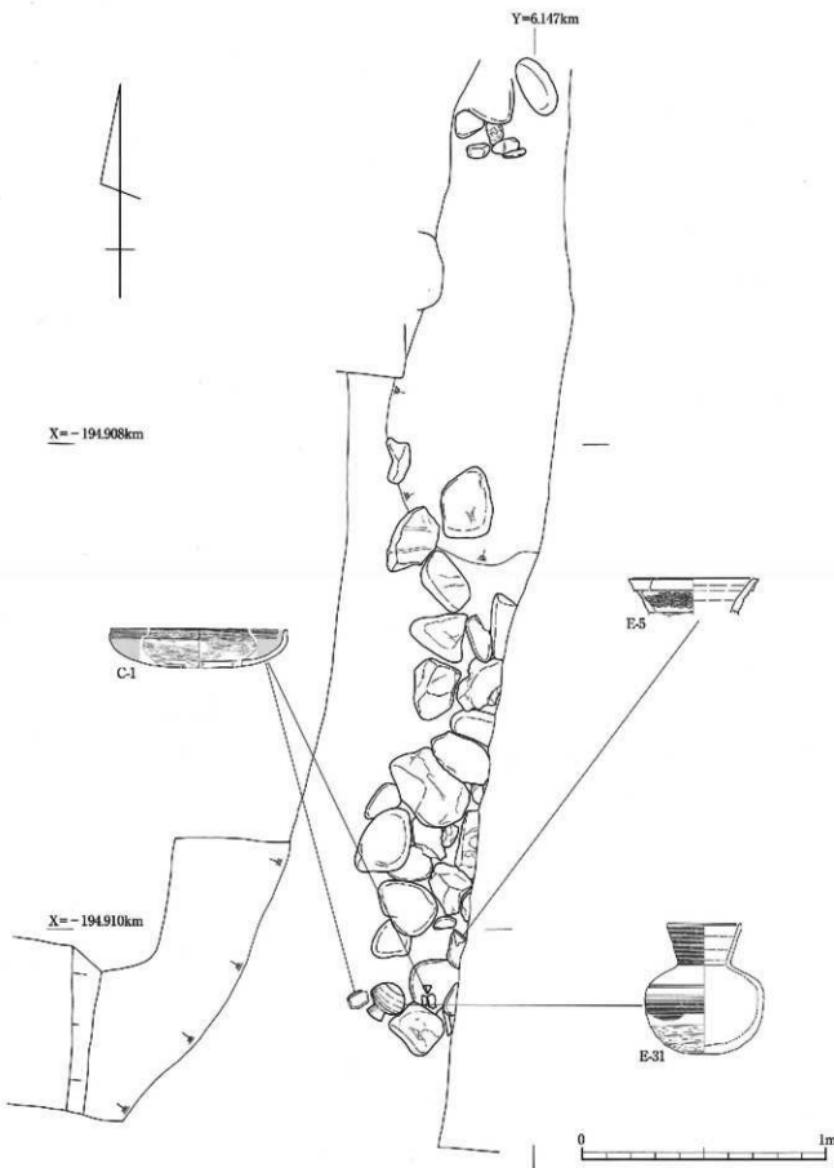
調査区内には搅乱が複数あり、造構や墳丘が大きく削平されており、これらの搅乱中から多くの遺物が出土した。G-1平瓦（第37図1）のほか、須恵器の長頸甕の頸部片が出土している。E-1甕（同図4）など須恵器の甕片、土師器片が多数を占め、繩文晩期の大洞C1式のA-1浅鉢（同図2）も出土している。また、E-30須恵器は内面に自然釉の塊が接着していることから、瓶頸の底部と考えられる（同図3）。その他、C-2非クロロ土師器の小片が出土している。坏か蓋の破片であり、漆が付着していた。

#### (4) 第1次調査出土遺物

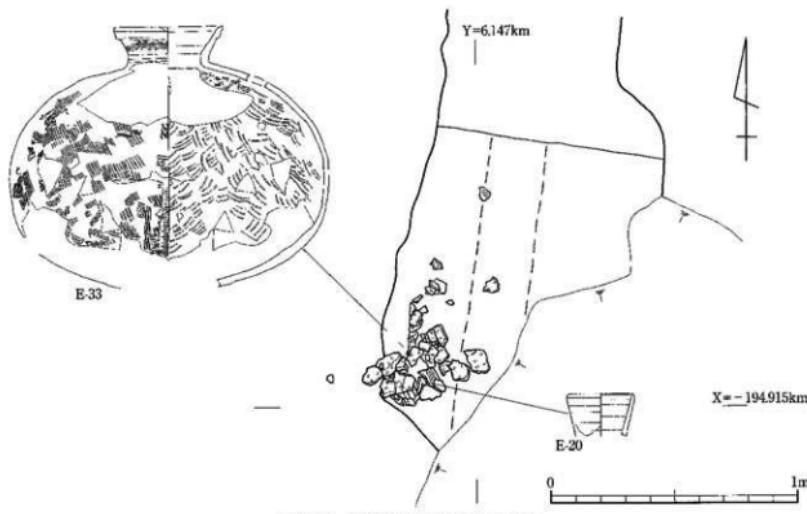
第1次調査出土遺物については、遺物カード、ネーミングでは「玄室」、「玄門外」などと記載されており、大別して玄室内と玄室外に区分される。玄室外出土遺物は、羨道出土遺物である可能性が考えられる。

#### 玄室外出土遺物

F-1丸瓦は正面に布目痕が認められる（同図6）。第1次調査報告では出土した布目瓦片について、「筒瓦の破片一点」と記載されている（註6）。今回の再整理では他に丸瓦片が認められず、このF-1丸瓦が記載されたものと思われる。遺物カードには「前庭」と記載されており、羨道部出土遺物であろう。須恵器のE-40、E-15、E-38、E-16甕は頸部片であり、沈線によって区画された中に波状文が穏やかな曲線で描かれている（同図7～10）。波状文



第31図 前庭部北部遺物出土状況 (S=1/20)



第32図 E-33横瓶出土状況 (S=1/20)

は3~4本单位であり、法領塚古墳から出土した須恵器壺の頭部のはほとんどに同様の波状文と沈線が施されている。E-40壺は第1次調査報告の図版第17-8で写真が掲載されている。E-38壺は図版第17-6で写真が掲載されている。E-16壺は、図版第17-5で掲載されたE-11壺（第39図1）と同一個体の破片として、「仙台市博物館調査研究報告」7において掲載されている。両者は胎土や調整が類似しているが、今回は別個体として掲載している。

#### 玄室出土遺物

須恵器のE-26長頸瓶は頸部片である（第38図3）。灰白色を呈しており、焼成は不良である。器形は外反しながら立ち上がる。E-13壺はL1縁部片である（同図5）。端部は外側に発達せず、断面は長方形を呈している。E-11、E-12、E-18壺は口縁部、頸部片である（第39図1~3）。E-11、E-12壺は共に頸部の装飾について、玄室外出土の壺の頭部と同様である。E-18壺は細かい飾目を一定間隔で平行に刻んだ文様が施されている。これを抉むように、上下2条ずつの沈線が廻っている。このような装飾を施したもののは他に認められず特徴的である。

## V. まとめ

今回の調査では、墳丘の規模、形態、また年代等について新たな知見が得られた。まず墳丘の規模について、従来は直径約32mの円墳と推定されていたが、今回の調査の結果、直径約55mの円墳であることが明らかとなった。墳丘の築造方法についての詳細は、上述した仙台市文化財調査報告書第393集に譲るが、現況からの推定では上段、下段からなる二段築成の円墳の可能性が高い。

法領塚古墳の埋葬施設は南側に開口する横穴式石室である。その構造について、第1次調査時の見解では玄室の前に短い前庭部が付属するものとされている。しかし今回の調査では、さらに南側に通路状の造構が検出された。第1次調査で「前庭部」とされた部分は南端で約20cmの段差を形成し、今回検出された造構へ続いている。そのため、第1次調査の「前庭部」が後退部、今回検出された施設が前庭部にあたると考えられる。

前庭部の規模について、境界が明確に判別できた西肩部で長さ約12.2mであるが、中軸線と墳丘裾部の復元想定

ラインとの合流点までの推定中軸長は約13mである。また、東脣部は南部の残存状況が悪く不明瞭であるが、中軸線から線対称の位置に復元した場合、南端部での東西幅は約4.8mとなり、南方へ向けて前庭部が開いていく様子が想定できる。

さらに前庭部と一連の遺構と考えられるSD1溝跡に関しては、掘方壁上である第15層上面で形成されているため、一連の施設が機能していた時に同時に機能したものと考えられる。また前庭部底面と同様、南へ緩やかに傾斜しており、排水溝としての機能が想定される。

次に個別の須恵器の検討を行った上で、古墳の築造年代について検討する。

**提瓶** E-21提瓶（第34図1）については、県内では類例が見られない。他地域の事例としては、福島県河沼郡会津坂下町の樋渡台畠遺跡八区16号住居跡で出土した提瓶が挙げられる（註7）。把手の形状は若干異なるものの、鉤針状を呈する点やカキメ調整に共通性が認められる。このような器形は、陶邑窯では近つ飛鳥博編年II型式4、5段階に認められる（註8）。E-23提瓶（第36図2）は東海産須恵器の特徴と照合させると、全体の器壁の薄さや色調、胎土などから静岡県湖西窯産の可能性が高い。口縁端部は欠損しているものの、頸部の作りや器形は湖西窯のものと酷似している。県内での湖西窯産の提瓶の出土例は、体部器形が球形に近く、環状把手が付くものが大崎市三本木に所在する坂本館山横穴墓と宮城郡利府町に所在する道安寺横穴墓から出土しており、両者とも7世紀前葉頃のものと考えられている。これらと比較すると、E-23提瓶のように扁平な体部の器形のものは、型式的に古い段階にあたり、県内では他に例がない。これと類似するものは、静岡県浜松市地藏平A62号墳出土提瓶がある（註9）。湖西窯産須恵器の編年では、6世紀末葉と考えられる（註10）。

**フラスコ形長頸瓶** E-27フラスコ形長頸瓶は器形や胎土等の特徴から湖西窯産と考えられる（第33図8）。破片資料であるため、年代は限定し難いが、型式的に7世紀中葉から末葉の形態と考えられる。E-19フラスコ形長頸瓶は器形や胎土等の特徴から、愛知県猿投窯産のものと考えられる（第34図2）。仙台市内では苦志寺横穴墓20号、23号墓で確認されており、7世紀代と考えられる。

**長頸瓶** E-24長頸瓶は器形や胎土等の特徴から、湖西窯産と考えられる（第33図7）。肩部に明瞭な稜をもつ器形から、8世紀前葉の年代が考えられる。

**壺** E-31壺については、丁寧な作りで焼成も良いこと、体部から口縁部までカキメ調整を施し、2本の沈線を廻らす点に高い装飾性がみられ、副葬品としての要素が強い（第34図3）。時期を限定することは難しいが、7世紀代に取まるものと想定される。

**横瓶** 横瓶の出土例は仙台平野周辺では極めて少ない。福島県南相馬市善光寺1号窯で出土している横瓶には、頸部に細密な2条の波状文のほかに、口縁部外面にも細密な波状文を施している（註11）。この横瓶は近つ飛鳥博編年II型式5段階古：7世紀初頭であり（註12）、法領塚古墳出土のE-33横瓶（第35図1）は、それよりも型式的に新しいと考えられることから、近つ飛鳥博編年II型式5段階新と想定しておきたい。年代としては、7世紀前葉でもその前半にあたる。

**甕** 法領塚古墳から出土した甕の口縁部の文様は、2条1組の沈線による文様帯区画に波状文を施すものが大半を占める。この甕については、沼向遺跡第4～31次調査報告書の総括文中で触れられている（註13）。沼向遺跡では、⑥B1期前半（近つ飛鳥博編年II型式5段階古：7世紀初頭）の甕には、外側に肥厚した口縁に沈線状の凹みによって作り出した突帯が認められるが、法領塚古墳の甕にはこのような特徴がなく、単純な形態となっている。頸部の文様について見てみると、2条1組の沈線による文様帯区画は共通しているが、波状文の形狀が沼向遺跡⑥B1期前半の甕よりも雑である。このような特徴から、近つ飛鳥博編年II型式5段階新に位置付けられている。またE-32甕については、頸部が他よりも短く、4条1組の比較的緩やかな波状文が1列廻らされているのみである（同図3）。器形は器高に対し横幅が広く、扁平な形態を呈している。口縁部形態は他の甕と同様であるが、頸部が短いことや

波状文の施文状況など新しい要素が認められる。年代的には他の壺と同様、近づ飛鳥博編年II型式5段階新に位置付けられ、より新しい要素が認められることに注意しておきたい。

これらの須恵器の出土状態について、前底部の第6層で比較的まとまって出土したもの以外は一部の破片しかないものが多く、同一個体の破片でも出土地点が離れているものが認められる。第6層で出土した完形品のE-31壺についても、前底部底面との間に堆積土が認められ、古墳に間わる埋葬行為、儀礼の当時の原位置を示すものではない。第5層からは、壺の性格上本来副葬品であったと考えられるNa-1馬具が出土しており、少なくとも今回出土した壺の一部は、副葬品として納められていたものが二次的移動を伴って出土したものと考えられる。また、墓前祭祀を積極的に示す痕跡は認められなかった。

古墳築造の時期について、第2次調査では前底部第6層出土須恵器が近づ飛鳥博編年II型式4～5段階の幅をもつが、時期を限定できるE-4、E-6壺、E-33横瓶はII型式5段階新である。第1次調査においても、玄室出土遺物の中で最も古い須恵器がE-11、E-12壺で、II型式5段階新であることから、古墳の築造年代は7世紀前葉でもその前半にあたると推定される。また、E-24長頸瓶は破片資料であるが、明らかに古墳の埋葬、儀礼に関わる遺物であり、8世紀前葉まで古墳としての機能が維持されていた可能性が考えられる。なお、古墳とは直接関連しないSD2溝跡から出土したE-23提瓶は、この遺跡の年代幅を示すと理解しておきたい。

註1 仙台市教育委員会1972『仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書』

註2 大澤正己氏が分析を行い大陸窯の可能性があることを指摘し(大澤1990)、仙台市史の考古資料編において、「移入品であることが判明し」と記されている(T藤1995)。

註3 付表の遺跡の立地に関しては、仙台市文化財調査報告書第360集に掲載されている微地形分類図を参考にした。

註4 第28図において、輪郭の線が細いものが第1次調査の図面と整合しなかった處である。

註5 鉄製品の数値については、X線写真を基に計測した数値であり、今後変更する可能性がある。

註6 前掲p8

註7 「柳渡古墳遺跡」会津坂下町文化財調査報告書第17集

註8 「年代のものさし－陶器の須恵器－」大阪府立近づ飛鳥博物館図録40

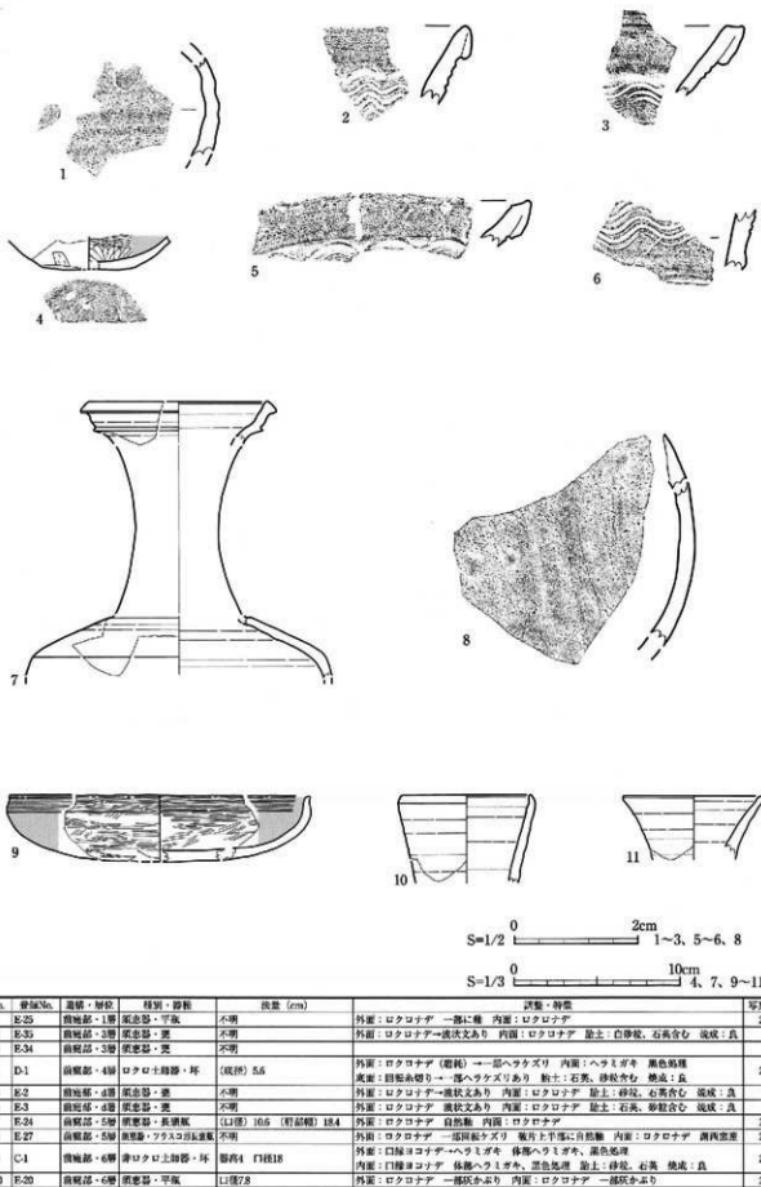
註9 浜松市博物館1992『有玉西上地区西整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』下

註10 袋井市教育委員会の松井一明氏の御教示による。

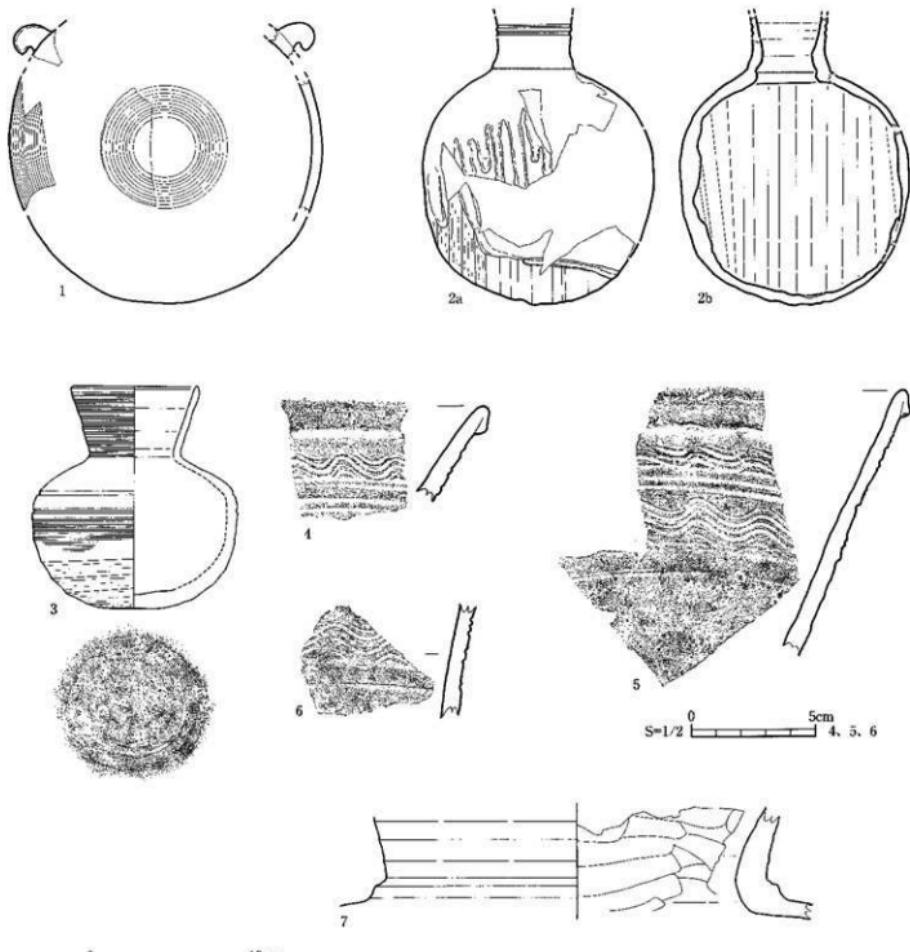
註11 「国道113号バイパス遺跡調査報告書」IV 福島県文化財調査報告書第192集

註12 「酒向道路第4～34次調査」(仙台市教育委員会2010b)の概括による。

註13 註12と同じ。



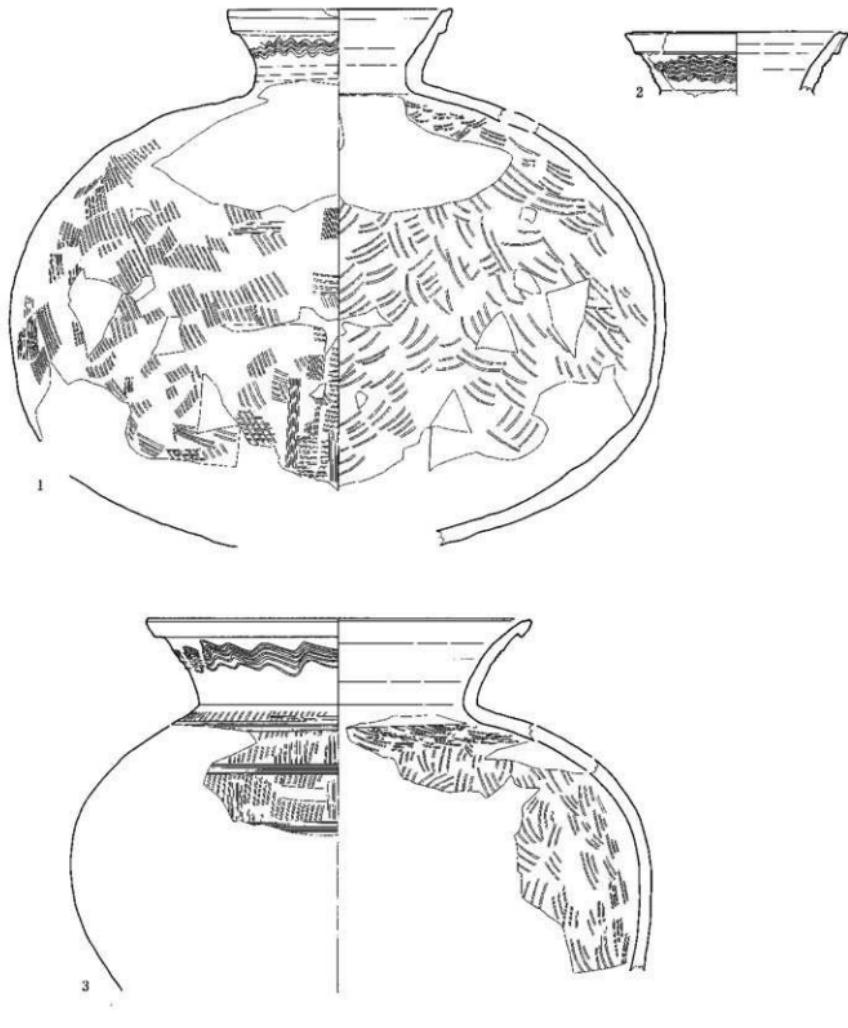
第33図 前底部出土遺物 1



S=1/3 0 10cm 1-3, 7

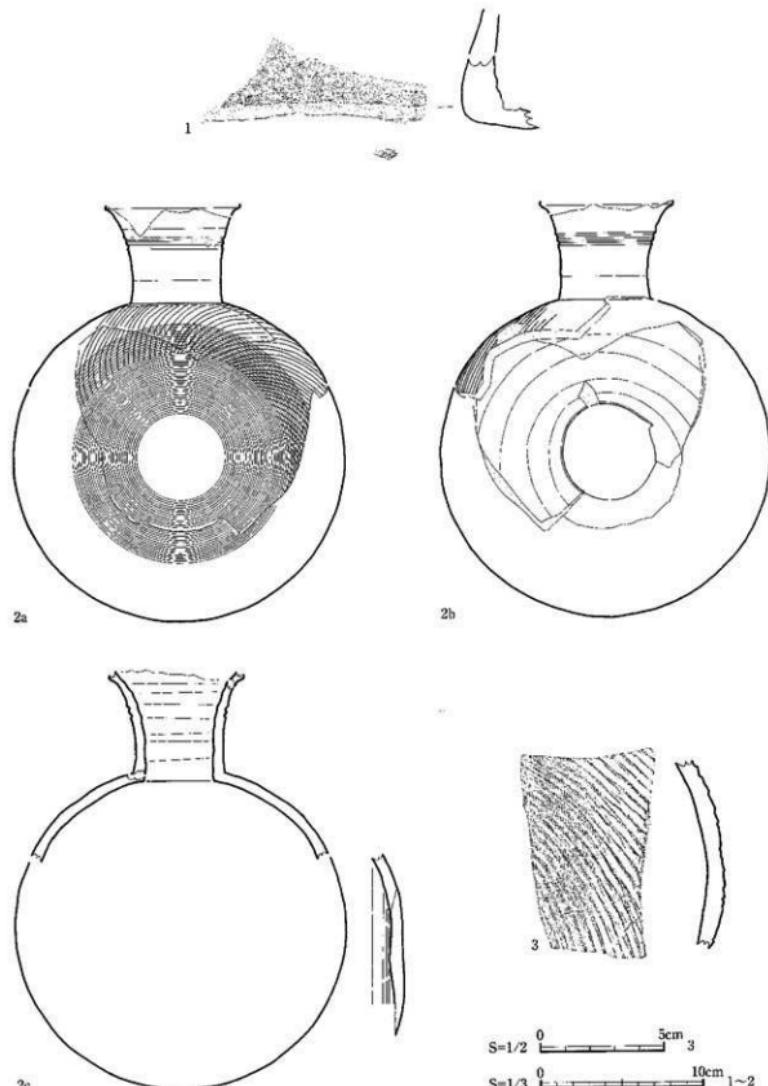
No.	登録No.	遺物・部位	形状・模様	法量 (cm)	測定・特徴	平均断面
1	E-21	前庭部・6層	環状・縞模	不明	外周：ロクロナガ→キメ（同心円状に入れる） 内面：ロクロナガ 中心部ナサエヌ	25-1
2	E-19	前庭部・6層	直筒形・縞模	外周径144 底面径144	外周：ロクロナガ 周面円錐内面はユビナサエ	25-3
3	E-31	前庭部・6層	直筒形・縞	直径135 口徑73 底径63	外周：ロクロナガ 口縁部、底部、背筋、底筋にキメ 体部に2条の横筋あり 体下部一辺に凸筋あり 突起のほとんどに灰 内面：ロクロナガ 極端切り落し不明→斜面ケズリ	25-2
4	E-4	前庭部・6層	直筒形・縞	不明	外周：ロクロナガ→波状文、波筋あり 内面：ロクロナガ 端上：4段、浮舟合む 燃成：良	25-5
5	E-7	前庭部・6層	直筒形・縞	不明	外周：ロクロナガ→波状文、波筋あり ハーフナラあり 内面：ロクロナガ 筋上：石突、筋合む 燃成：良	25-4
6	E-9	前庭部・6層	直筒形・縞	不明	外周：ロクロナガ→波状文、波筋あり 内面：ロクロナガ 筋上：石突、筋合む 小石合む 燃成：良	..
7	E-6	前庭部・6層	直筒形・縞	不明	外周：ロクロナガ 内面：ロクロナガ→網目ユビナサエテ、体部両端に異筋 筋上：筋突、石突合む 燃成：良	25-6

第34図 前庭部出土遺物2 (6層出土)



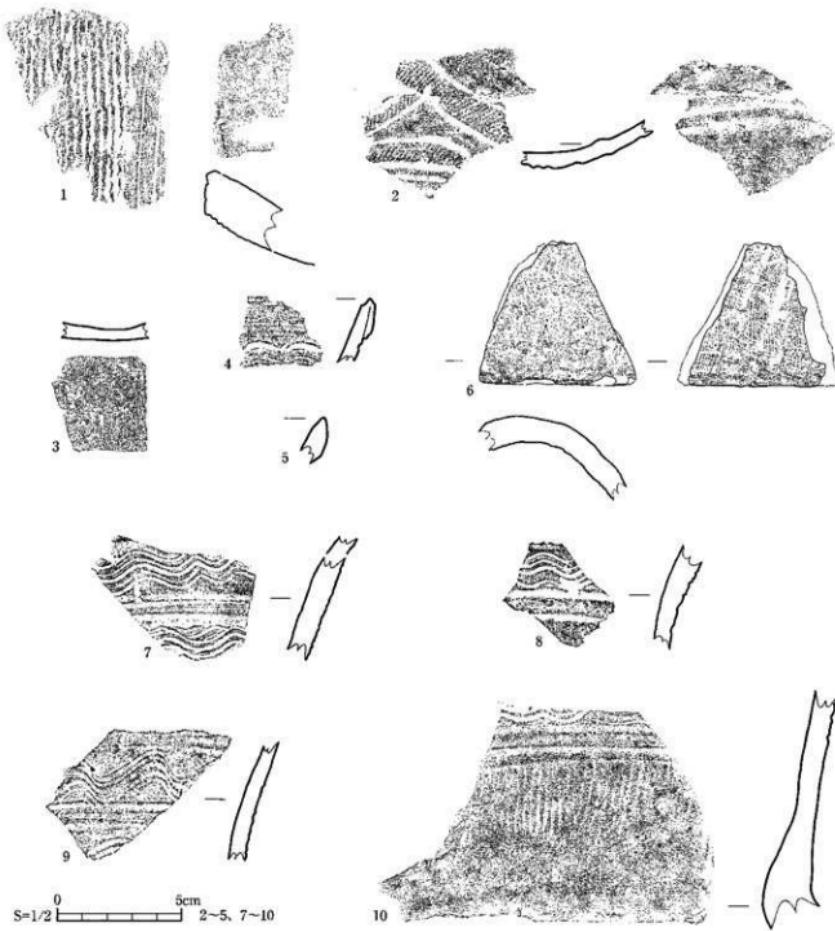
第35図 前底部出土遺物 3

No.	型別No.	遺構・部位	神別・器種	直徑(cm)	状態・特徴	参考図版
1	E-32	前底部、C層	灰窓器、横窓	直徑32.4 口徑13.3	外山：口縁部クロナデ 滲状文あり 体部ハケメ カキメ 内面：口縁部クロナデ 体部当て具窓 肩上：石英粒、砂粒、2.3mmの小石少量含む 種成：やや良	26-1
2	E-5	前底部、E層	灰窓器、横窓?	(口径) 13.2	外山：クロナデ+波状文あり 内面：クロナデ 肩上：石英、砂粒含む 種成：良	26-7
3	E-32	前底部、E層 以下	灰窓器、窓	口徑22.8	外山：口縁クロナデ、波状文あり 体部ハケメ→カキメ、ナデ 内山：口縁クロナデ 体部当て具横窓 肩上：砂粒、石英含む 種成：良	26-2



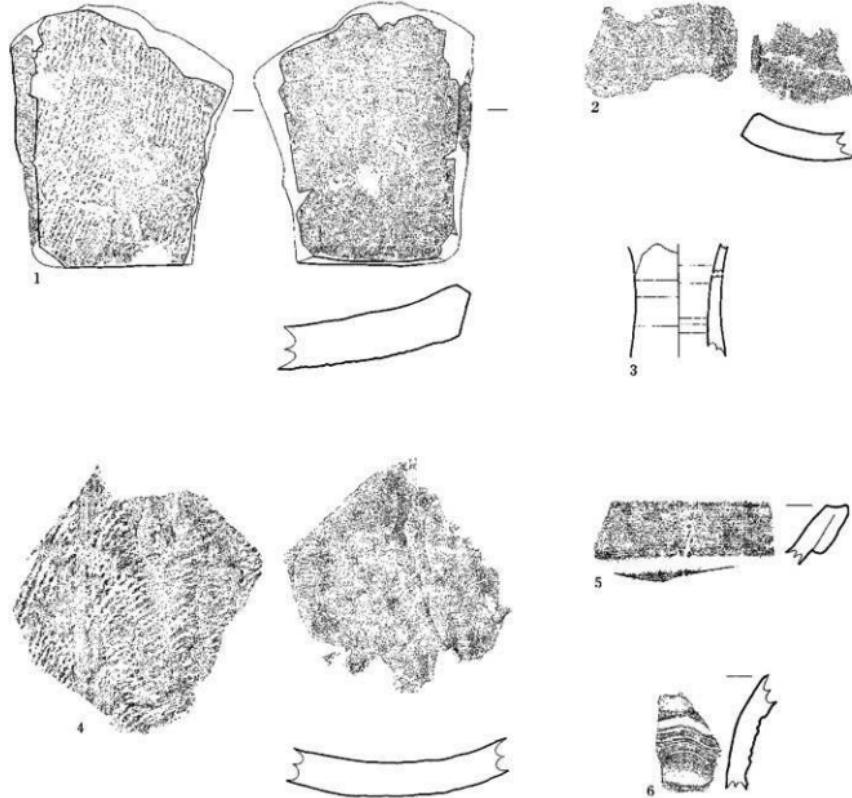
第36図 SD2溝跡出土遺物

No.	実器No.	遺物・号数	種別・基特	状態	属性・特徴	写真回数
1	E-10	SD2-2層	灰窓2・素	不明	外観: ロクロナデ 内面: ロクロナデ 端上: 砂粒、石英含む 造成: 良	27-1
2	E-23	SD2-2、6層	灰窓2・素	不明	外観: ロクロナデ、体部中央両心円カキヌ、体部~肩部 放射状カキメ、深緑色有施華 窓部: 沈殿2条、内面: ロクロナデ 潜在窓発見、肩部欠損のため、背面開口部不可	27-2
3	E-28	SD2-2層 窓無2・6層	灰窓2・素	不明	外観: 平凸タタキカキヌ 内面: ロクロナデ 他面: 側体上丸み	27-3



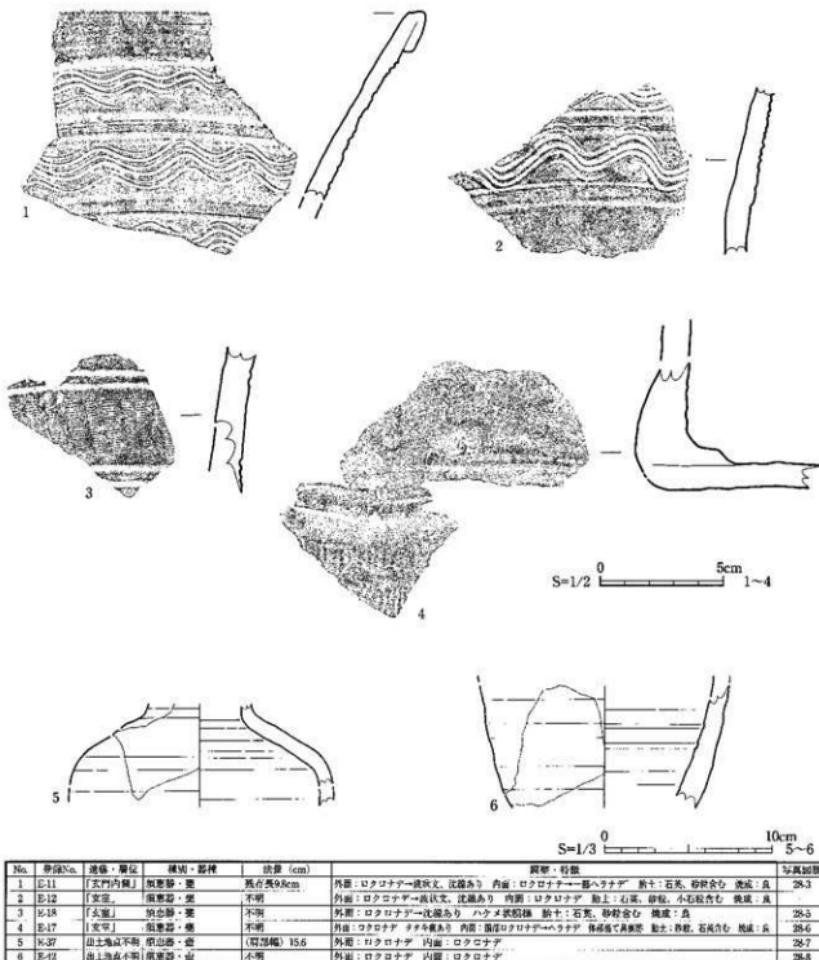
No.	発掘地No.	遺構・部位	種別・特徴	計量(cm)	説明	参考図版
1	G-1	ガクラン 平瓦	厚2.6 外縁：有目模、凸出、幾つかたれ、側面：ハラケヅリ→花輪あり	約1.5	筋上：石灰、砂粒含む 燃成：やや良	27-4
2	A-1	ガクラン 丸十縁・波鉢	小明	外縁：L字彫文字→ミガキ（鏡面） 内面：ミガキ、筋上：砂粒、石質含む 燃成：良	27-5	
3	E-30	波鉢不規 直裏縁・平底?	不明	外縁：切り端し不規 直裏縁：エンドヌード	外縁：ロクロナデ 砂粒多くかかっている	-
4	E-1	厚紀不規 直裏縁・菱	不明	外縁：ロクロナデ→波状文あり 内面：ロクロナデ	筋上：石灰、砂粒含む 燃成：良	-
5	E-36	厚跡小舟 直裏縁・菱	不明	外縁：ロクロナデ	筋上：石灰、砂粒含む 燃成：良	-
6	F-1	舟形部 丸瓦	大底厚1.7	外縁：舟形部 端にハラケヌリ 西面：網状マッキーハラテ 側面模様あり	筋上：石灰、砂粒含む 燃成：良	27-6
7	E-40	「玄門前」 直裏縁・菱	小明	外縁：ロクロナデ→波状文、沈縁あり 内面：ロクロナデ	筋上：石灰、砂粒含む 燃成：良	-
8	E-15	「玄門外」 直裏縁・丸	不明	外縁：ロクロナデ→波状文、沈縁あり	内面：ロクロナデ 筋上：石灰、砂粒含む 燃成：やや良	-
9	E-38	「玄門前」 直裏縁・菱	小明	外縁：ロクロナデ→波状文、沈縁あり	内面：ロクロナデ 筋上：石灰、砂粒含む 燃成：良	-
10	E-16	「玄門外」 根山器・菱	不明	外縁：ロクロナデ→波状文、沈縁あり クタキ裏あり	内面：ロクロナデ 筋上：砂粒、石質含む 燃成：良	27-7

第37図 出土遺物 (6~10...第1次調査)



No.	號標No.	遺物・著位	種別・部種	法量 (cm)	調査・特徴		写真番号
					内面	外側	
1	G-3	「玄室」-「玄室内装部」半瓦		長大厚3.0	内面：本丹灰、局部ヘラケズリ、凸面：萬タケキ灰、無面：ヘラケズリ	断土：石瓦、砂粒含む 織成：瓦	28-1
2	G-4	「玄室」	平瓦	長大厚1.8	凹面：本丹灰、無面：ヘラケズリ	断土：石瓦、砂粒含む 織成：瓦	..
3	E-26	「玄室」	須彌器・長圓形	小町	外側：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	地底約不十分で灰白色を呈している	..
4	G-2	「玄室」-「玄室内装部」半瓦		長大厚2.3	内面：本丹灰、凸面：萬タケキ灰、一部ヘラケズリあり	断土：石瓦、砂粒含む 織成：やや瓦	28-4
5	H-13	「玄室」	須彌器・鏡	小町	外側：ロクロナデ 六面：ロクロナデ	断土：石瓦、砂粒含む 織成：瓦	28-2
6	H-14	「玄室」	須彌器・鏡	不明	外側：ロクロナデ→後灰状、先端あり 内面：ロクロナデ	断土：砂粒、石質含む 織成：瓦	..

第38図 玄室出土遺物（第1次調査）



第39図 第1次調査出土遺物

No.	番号No.	遺物・部位	種別・器種	法長(cm)	測量・寸法	写真回数
1	E-11	「玄門内側」	加賀夢・甕	高さ共9cm	外面：ロクロナデ→底灰化、沈器あり 内面：ロクロナデ→一部ハラナデ	断土：石系、砂粒含む 沖成：瓦 28.3
2	E-12	「玄門」	陶窓芯・甕	不明	外面：ロクロナデ→底灰化、沈器あり 内面：ロクロナデ	断土：石系、砂粒、小石粒含む 沖成：瓦
3	E-18	「玄門」	加賀夢・甕	不明	外面：ロクロナデ→沈器あり ハケメ表現様 壁土：石灰、砂粒含む 沖成：瓦	28.5
4	E-17	「玄門」	陶窓芯・甕	不明	外面：ロクロナデ チリキ含み 内面：表面ロクロナデ→ハラナデ 体部底で真垂直 壁土：砂粒、石英含む 沖成：瓦	28.6
5	E-37	出土角豆骨	筋窓芯・甕	(肩幅) 15.6	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	28.7
6	E-12	出土当子期	筋窓芯・甕	不明	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	28.8



1. 前庭部調査状況（南から）



2. 前庭部調査状況（南から）

写真図版17 前庭部



1. 前庭部全景（南東から）



2. 前庭部出土遺物

写真図版18 前庭部と出土遺物



1. SD2検出状況（南から）



2. 前庭部西端と墳丘裾の接続部（南から）



3. 前庭部西側墳丘裾検出状況（南東から）

写真図版19 前庭部南端



1. 前底部礫検出状況（南から）



2. 玄室（南から）



3. 矢道礫検出状況（南東から）

写真図版20 玄室前調査状況



1. 前庭部断面（南から）



2. 調査区南壁断面



3. 前庭部擔方断面（北から）



1. 前庭部北部断面（南西から）



2. 前庭部中央部断面（西から）

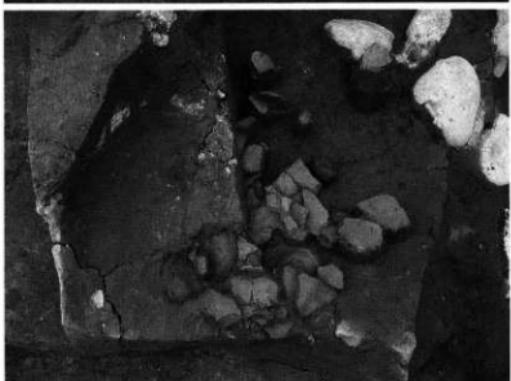


3. 前庭部南端部断面（西から）

写真図版22 前庭部南北断面



1. C-1壺・E-31壺出土状況（南から）

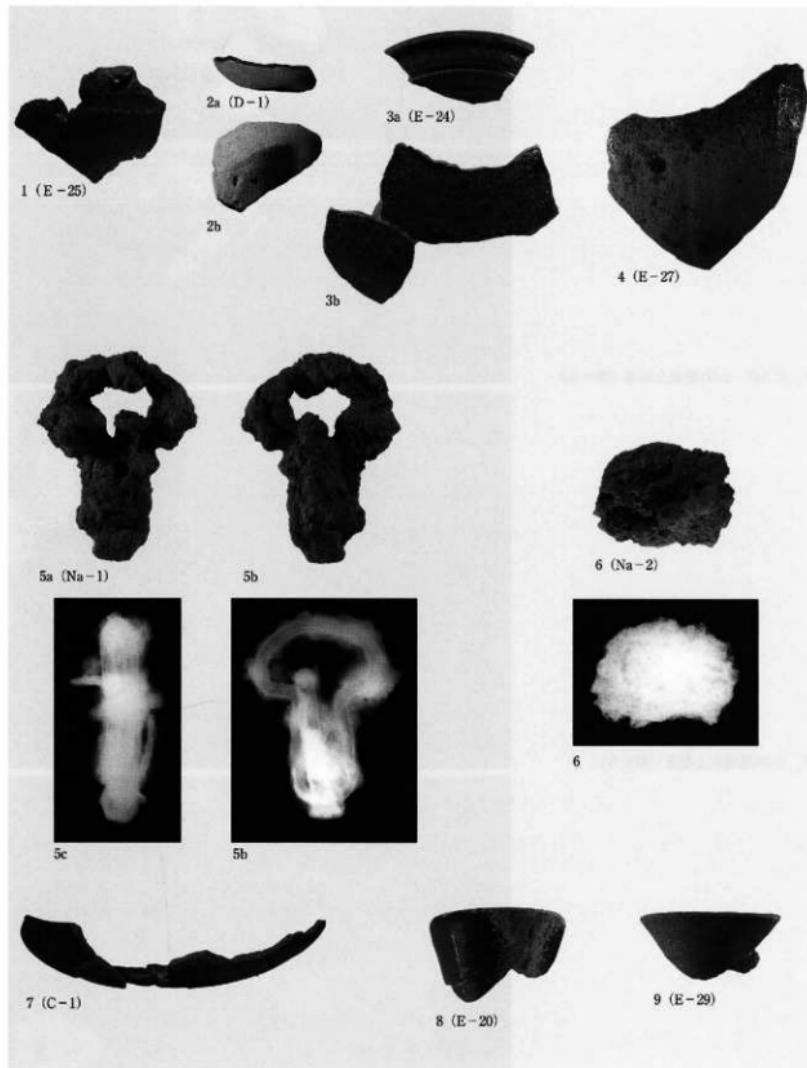


2. E-33横瓶出土状況（南から）



3. E-33横瓶・E-20平瓶出土状況（東から）

写真図版23 遺物出土状況



写真図版24 前庭部出土遺物（縮尺は図と同一、5、6…1/2）



写真図版25 前底部6層出土遺物（縮尺は図と同一）

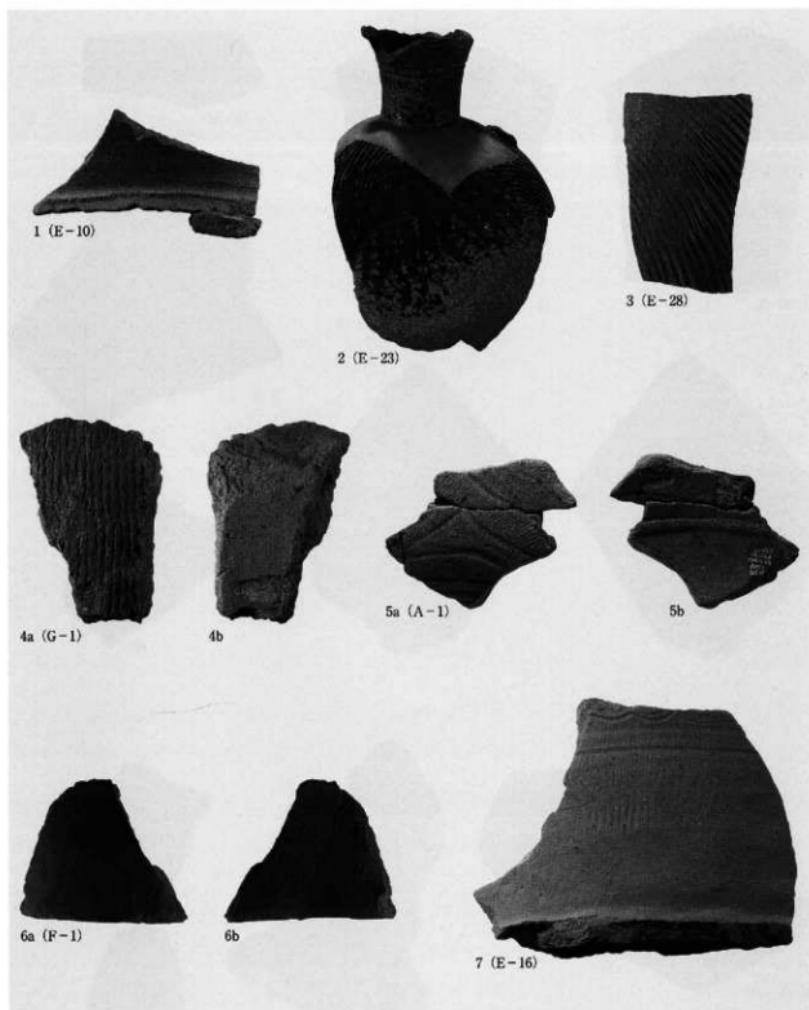


1 (E-33)

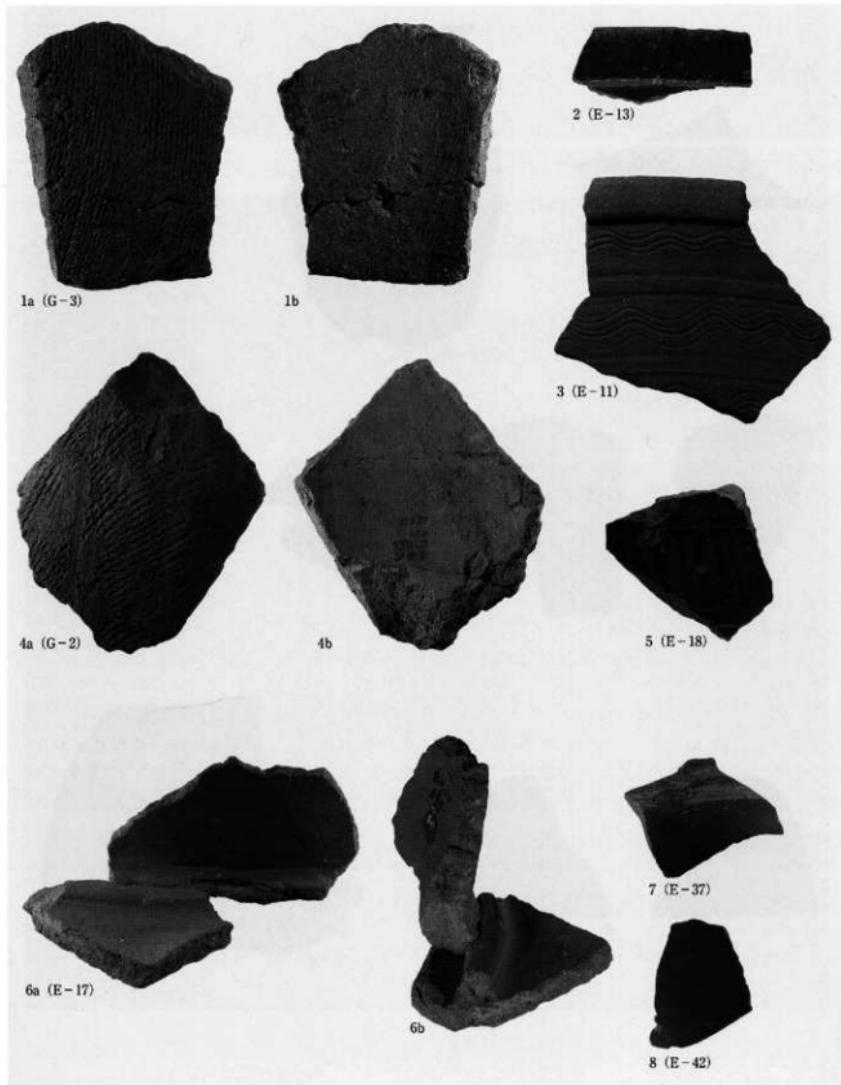


2 (E-32)

写真図版26 前庭部出土遺物（縮尺は図と同一）



写真図版27 出土遺物 (6・7は第1次調査時に出土 線尺は図と同一)



写真図版28 第1次調査出土遺物（縮尺は図と同一）

## 第5章 総括

### I. 郡山遺跡

今年度の郡山遺跡の調査としては、個人住宅建築に伴う調査（第201次、202次調査）や開発に伴う事前調査（第200次、203次調査）が行われた。本書に掲載した第203次調査では、I期官衙期の材木列が検出された。調査区の制約上、詳細を明らかにすることはできなかつたが、特徴的な遺物が出土している。胎土に鉱物が多く含まれる非ロクロ土師器や、口縁部形態や焼成が特徴的な須恵器が出土したほか、須恵器のE-537長頸壺には台が付くものと考えられる。台付長頸壺の出土事例としては、多賀城市市川橋遺跡で栗田式期の集落の区画溝と考えられているSD6517溝跡から出土したものが挙げられ、佐藤隆氏の陶邑編年のIV古段階：TK209型式（6世紀末～7世紀第1四半期）にあたることが指摘されている（註1）。本例は体部下半のみ残存しており、詳細な検討はできないが、これに近い時期の遺物と考えられる。本調査区の北西約80mに位置する第98次調査では、SI1386堅穴住居跡のカマドの構築土から須恵器のE-365高壺が出土している。この高壺は壺部に細密な波状文が施されているが、市川橋遺跡出土の台付長頸壺にも同様の波状文が施されている。また器形が類似するものとして、市川橋遺跡のSD6517溝跡の西約450mの地点で検出された、SK6777大土坑から出土した長脚2段スカリ入り高壺が挙げられる。壺部に波状文は施されていないが、ロクロナデにより突線を作り出す技法や壺部の器形が類似している。この高壺は他の共伴遺物と総合して考慮すると、同編年のIV古段階：TK209型式～IV中段階：TK217型式（6世紀末葉～7世紀中頃）にあたることが指摘されている。以上のことから、郡山遺跡出土のE-537長頸壺やE-365高壺も概ね同時期と考えられる。このように、今回の調査地点の周囲では官衙に先行する時期の遺物が出土しており、今後、郡山遺跡内における遺構も含めた当該期の様相について明らかにしていくことが重要である。

### II. 大野田官衙遺跡

今年度は官衙の区画溝東辺部の調査を行った。調査区を3箇所設定し、いずれの調査区からも南北方向に縱走する溝跡が検出されている。2b区で検出されたSD50溝跡と2c区で検出されたSD60溝跡は、規模や断面形がほぼ一致している。また、堆積土の大別層も全て対応しており同一の溝跡と考えられる。両溝跡を結んだ主軸方向はN2°～3°-Wである。両溝跡については、当初の想定ライン上から検出されたこと、これまで検出された区画溝の規模と一致することから、官衙の区画溝東辺であると考えられる。また2a区のSD40溝跡については、ほぼ想定ライン上で検出されているが、規模がSD50、SD60溝跡と大きく異なる。剖面が及んでいない溝の下幅で比較すると、SD50、SD60溝跡が1.6～1.8mであるのに対しSD40溝跡は30～40cmであり、南で検出された溝跡に比べ規模が小さくなっている。堆積土の状況については、SD40溝跡の最下層である第4層に、基本層由来と考えられる褐色の砂質シルトがブロック状に多く含まれるほか、第2層にも同様の砂質シルトが含まれることが特徴的である。SD50、SD60溝跡において同様の砂質シルトが多く含まれる堆積土は、底面直上に堆積する第8層のみである。溝跡の規模だけでなく、堆積環境においても差が生じていた可能性を指摘しておきたい。以上のような差異が挙げられる一方、共通性も認められる。いずれの溝跡でも、堆積土の最上部に基本層のⅢ層が落ち込んでおり、比較的良好にその堆積状況が確認できる。またSD40溝跡の方向はN2°-Wであり、SD50、SD60溝跡の方向とほぼ一致している。さらに各溝跡はほぼ同一直線上に位置していることから（第40図）、SD40溝跡も官衙の区画溝東辺であると考えられる。

なお、SD40溝跡は2a区の南端で西へ屈曲することが確認されている。調査区の制約上、T字状となり南へ延びてSD50溝跡へ続くものなのか、L字状に折れるもののかは確認できなかった。2a区は調査区設定当初から、官衙

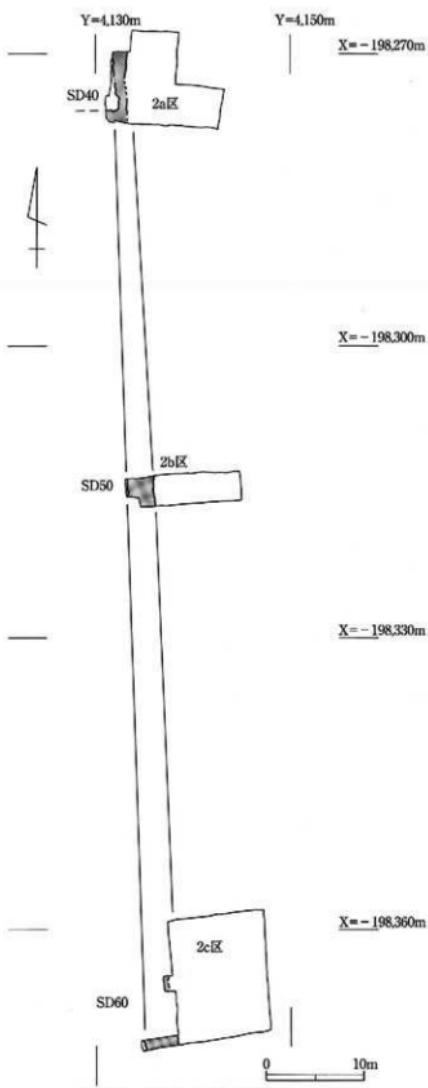
を東西に横断するSD57溝跡との接続地点と想定されており、ほぼ想定通りの地点から屈曲部が検出されたこととなる。屈曲部の規模が明らかでないため、今回の調査成果からはSD57溝跡と同一とは認定できないが、関連性を考慮しつつ、今後周辺の調査を進める必要がある。

またSD40溝跡の底面は南から北へ向かって傾斜しており、深くなっていく様子が窺える。そのため、より北側では溝跡の規模が大きくなる可能性が考えられる。但し、南側で検出されたSD50、SD60溝跡と同等の規模となるかは不明である。官衙の区画溝北部については、様相が明らかにされた調査事例が少なく、未解明の部分が多い。今後の調査成果を待って検討すべき課題である。

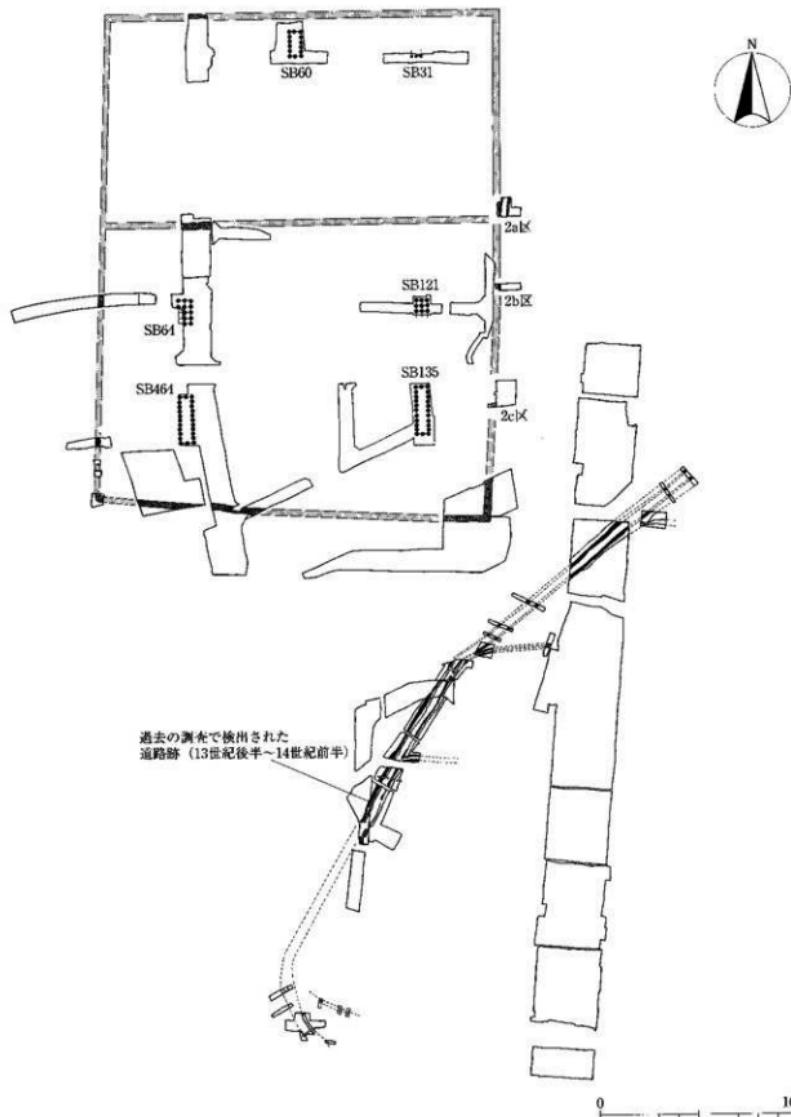
また今回の調査では、2a区で道路跡が検出されている。遺構の時期を比定できる遺物は出土していないが、基本層との関係から若干検討を加えていく。道路跡は新旧2時期確認されたが、2時期とも道路の西側溝が基本層のⅢ層上面で検出されている。Ⅲ層は灰白色火山灰を含む層であることから、少なくとも10世紀初頭以後の遺構と考えられる。

また、2b区ではSD46、SD47溝跡が検出されている。この2本の溝跡は2a区で検出されたSD36、SD37溝跡と主軸方向が異なるものの規模や堆積土が類似している。また、SD47溝跡がⅢ層上面で検出されていることからも、SD46、SD47溝跡はそれぞれSD36、SD37溝跡と同一の溝跡であり、道路の東側溝として機能していた可能性が考えられる。なおSD46溝跡はⅡ層上面で検出されており、SD47溝跡も堆積土の状況により本来Ⅱ層上面から掘り込まれた可能性を第3章Ⅲで指摘した。2a区ではⅡ層が確認されていないが、2b区で検出された溝跡を道路側溝の延長と考えると、道路跡は本来Ⅱ層上面で形成されたことになる。このⅡ層についてはこれまでの大野田地区の調査において、上面から中世の遺構が検出されている土層と対応している。

また大野田官衙道路の南方、大野田古墳群、王ノ塙遺跡のこれまでの調査において道路跡が検出されている（第41図）。南西から北東方向へ延びる道路跡であり、複数時期あることが確認されている。そのの中には今回大野田官衙跡で検出された道路跡と同様、両側に側溝をもち、その間で波板状凹凸が検



第40図 区画溝東辺検出状況 (S=1/500)



第41図 大野田官衙遺跡とこれまでの調査で検出された周辺の道路跡 (S=1/2500)

出される構造の道路跡も確認されている。これまでの調査で見つかった道路跡の年代については、出土遺物や検出された基本層位の状況から13世紀後半から14世紀前半を中心とした年代が指摘されている。

以上を踏まえ、今回検出された道路跡の年代については、官街の区画溝より新しいこと、Ⅲ層上面で検出されており、本来はⅡ層上面から掘り込まれた可能性があること、道路跡の様相が過去の調査で検出されたものと類似することから、年代の幅はあるが古代末期以降から中世にかけての時期を中心とした年代を考えたい。

大野田官衙遺跡の追加調査とした六反田遺跡7F-1区の調査では、木棺墓が良好な状態で検出された。木棺は蓋部が残存しており、その下方に位置する棺内の人骨や副葬品も比較的良好な状態で出土している。また、袋状掘り込みが検出され、非ロクロ上師器の环と壺が出土している。さらに、この木棺墓では銅鏡が副葬されている。銅鏡は古墳時代の副葬品としての出土は仙台市内で3例目であり、今後文様が明らかにされた上でその性格を検討する必要があろう。今後、周辺地域から出土した遺物も含め、他地域との関係やその影響を考えていくことが重要である。

### III. 法領塚古墳

今回の調査では、古墳の構造について大きな成果を得ることができた。墳丘の直径が約55mであることが明らかとなり、現況からの推定で上段、下段からなる二段築成の円墳である可能性が高いと考えられる。このような墳丘の構造は、周辺地域において古墳時代中期後半の主要な古墳で認められる。大野田地区では春日社古墳が挙げられ、西方の丘陵部では裏町古墳や兜塚古墳（註2）が挙げられる。法領塚古墳の築造方法の系譜を考える上で注意しておきたい。

また法領塚古墳の南方約800mには南小泉遺跡の第22次調査地点が位置する。この調査では6世紀末葉の集落跡の中の居住域が発見されている。この居住域は幅7mの大溝で区画されており、南小泉型関東系土器も出土している（註3）。また、この大溝SD3溝跡からは須恵器のE-29短頸壺が出土している。この個体は胎土、焼成などの特徴から湖西窯産と考えられており、報文中では脚付短頸壺の可能性が高いことが指摘されている。年代は6世紀末葉であり、今回の法領塚古墳の調査で出土した須恵器のE-23提瓶と产地、時期が一致する。以上のことから、6世紀末葉における法領塚古墳に先行する湖西窯須恵器の出土と南小泉遺跡第22次調査で確認された居住域の関連性が注目される。今後、法領塚古墳を建造した集団や南小泉遺跡の集落を構成していた集団の関連性を考慮しつつ、調査、検討を行っていく必要がある。

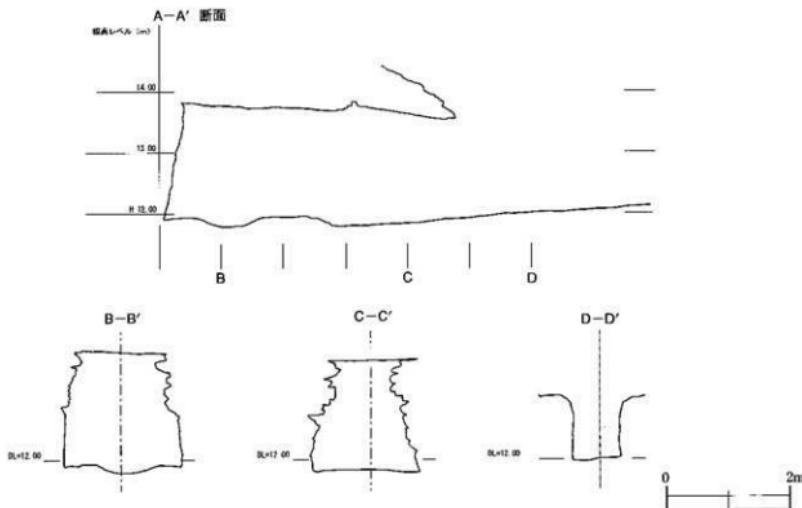
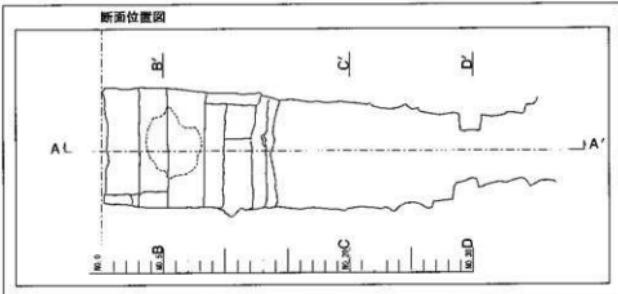
また法領塚古墳の調査終了後、石室の現況を把握するためレーザー測量を行い、3次元のデータを得ることができた（第42図）。これらのデータを今後の保存、整備に活用し、市民に安全に公開できるような対策を講じていく所存である（註4）。

註1 「市川横遺跡の調査」宮城県文化財調査報告書第218集

註2 兜塚古墳は墳丘上段の調査が行われていないため、詳細な構造は不明であり、「少なくとも二段以上」という位置づけである（藤沢1995、1998）。

註3 仙台市教育委員会1994、2010b

註4 レーザー測量の後、3月11日の東日本大震災により石室の一部が崩落する被害があり、石室の現況は第28図、第42図と異なっている。



第42図 法領塚古墳石室断面図 (S = 1/80)

## 引用・参考文献

- 会津坂下町教育委員会 1990 「橋渡台畠遺跡」会津坂下町文化財調査報告書17
- 荒井 格 2008 「大野田古墳群他－官衙関連遺構－」『第34回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.65-72
- 近江俊秀 1995 「道路構造の構造」「古代文化」47-4 pp.3-16
- 大池昭二 1972 「十和田火山東麓における完新世テフラの幅年」「第四紀研究」11-4 pp.228-235
- 大澤正己 1990 「南小泉遺跡祭祀土坑出土鉄滓の金属学的調査」「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書140 pp.280-289
- 小山正忠、竹原秀雄 1989 「新版標準土色帖」1989年版 日本色研事業株式会社
- 加藤 孝、他 1978 「曾谷道安寺横穴群」利府町文化財調査報告書2
- 木本元治、他 1989 「国道113号バイパス遺跡調査報告」V 福島県文化財調査報告書211
- 工藤哲司 1995 「南小泉遺跡」「仙台市史」特別編2 考古資料 pp.318-323
- 小口雅史 2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題」「日本律令制の展開」吉川弘文館
- 後藤建一 1992 「湖西・ノ宮工業団地内遺跡発掘調査報告書」湖西市文化財調査報告書29
- 後藤建一 2009 「新設中学校建設地内遺跡確認調査報告書」湖西市文化財調査報告書43
- 後藤秀一、他 2001 「山王遺跡八幡地区的調査」2 宮城県文化財調査報告書186
- 佐藤敏幸、大久保赤生 2007 「宮城県の湖西窯須恵器」「宮城考古学」9 pp.111-133
- 佐藤則之、他 1997 「山王遺跡」V 宮城県文化財調査報告書174
- 三本木町教育委員会 1971 「宮城県志田郡三本木町坂本館山横穴古墳群調査報告書」三本木町文化財調査報告書1
- 三本木町教育委員会 1972 「坂本館山横穴古墳群第二次調査報告書」三本木町文化財調査報告書2
- 鈴木敏則 2001 「湖西窯古墳時代須恵器縄年の再構築」「須恵器生産の出現から消滅」第1回東海土器研究会資料 第5分冊 補遺、論考編 pp.141-170
- 仙台市教育委員会 1972 「仙台市南小泉法領塚占墳調査報告書」
- 仙台市教育委員会 1981 「六反田遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書34
- 仙台市教育委員会 1990 「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書140
- 仙台市教育委員会 1992 「土手内」仙台市文化財調査報告書165
- 仙台市教育委員会 1994 「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書192
- 仙台市教育委員会 2000a 「大野田古墳群、王ノ塙遺跡、六反田遺跡」仙台市文化財調査報告書243 pp.295-394
- 仙台市教育委員会 2000b 「王ノ塙遺跡」仙台市文化財調査報告書249 pp.295-394
- 仙台市教育委員会 2004 「大野田古墳群」「平成16年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨」 pp.17-22
- 仙台市教育委員会 2005 「大野田古墳群」「第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」 pp.299-305
- 仙台市教育委員会 2008a 「長町駅東遺跡第1、2次調査」仙台市文化財調査報告書324
- 仙台市教育委員会 2008b 「六反田遺跡、大野田古墳群」「平成20年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨」 pp.99-102
- 仙台市教育委員会 2009a 「(仮称) 大野田官衙遺跡」「第35回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」 pp.242-249
- 仙台市教育委員会 2009b 「(仮称) 大野田官衙遺跡」「郡山遺跡」29 仙台市文化財調査報告書347 pp.98-114
- 仙台市教育委員会 2010a 「大野田官衙遺跡」「郡山遺跡」30 仙台市文化財調査報告書373 pp.45-87
- 仙台市教育委員会 2010b 「沼向遺跡第4~34次調査」仙台市文化財調査報告書360
- 仙台市教育委員会 2010c 「法領塚古墳第2次調査」「平成22年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨」 pp.7-12
- 仙台市教育委員会 2010d 「六反田遺跡、大野田官衙遺跡」「平成22年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨」 pp.25-30

- 仙台市教育委員会 2011 「六反田遺跡、大野田官衙遺跡」『第37回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.178-189
- 高橋一敏 1987 「西笠子第64号窓跡発掘調査報告書」 湖西市教育委員会
- 高橋一敏 1990 「吉美中村遺跡」 湖西市文化財調査報告書25
- 竹田幸司 1999 「仙台市王ノ塙遺跡、大野田古墳群、南小泉遺跡の中世道路について」『中世の道と物流』 山川出版社 pp.97-117
- 田中剛和 1987 「善心寺横穴墓群、法領塚古墳出土鉄、銅製品整理報告」『仙台市博物館調査研究報告』 7 pp.1-22
- 千賀 久 2003 「古墳時代の馬との出会い」 檜原考古学研究所特別展図録59 檜原考古学研究所附属博物館
- 千葉宗久、阿部博志 1978 「兜塚古墳」「宮城県文化財発掘調査略報」昭和52年度分
- 鶴間正昭 2001 「関東出土の東海岸須恵器」「須恵器生産の出現から消滅」 第1回東海土器研究会資料 第5分冊 補遺、論考編 pp.171-210
- 贊元 洋 2001 「古代湖西窯跡年の再構築」「須恵器生産の出現から消滅」 第1回東海上器研究会資料 第1分冊 pp.89-111
- 長谷川聰 2009 「かがやきにこめた権威と荘厳」平成21年特別展 茨城県立歴史館
- 浜松市博物館 1992 「有玉西土地区両整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」下巻
- 福島県教育委員会 1988 「国道113号バイパス遺跡調査報告」 IV 福島県文化財調査報告書192
- 藤沢 敦 1995 「兜塚古墳」「仙台市史」特別編2 考古資料 pp.256-257
- 藤沢 敦 1998 「仙台平野における埴輪樹立古墳の墳丘と外部施設」『東北文化研究室紀要』39 pp.1-17
- 藤沢 敦 2010 「東北」「前方後円墳の終焉」 雄山閣 pp.40-57
- 藤村博之、伊藤裕 1996 「米泉館跡」 宮崎町文化財調査報告書5
- 古川一明 2005 「墳墓にみる7世紀の宮城県地域の特質」「前方後円墳以後と古墳の終末」 第10回東北、関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 pp.25-33
- 町田 洋、新井房夫 1992 「火山灰アトラス」 東京大学出版会
- 町田 洋、新井房夫 2003 「新編 火山灰アトラス」 東京大学出版会
- 町田 洋、他 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」「科学」51-9 pp.562-569
- 宮崎泰史、他 2006 「年代のものさし－陶邑の須恵器－」 大阪府立近つ飛鳥博物館図録40
- 桃崎祐輔 2000 「馬具」「風返稻荷山古墳」 霞ヶ浦町教育委員会 pp.28-54
- 柳澤和明 2009 「市川橋遺跡の調査」 宮城県文化財調査報告書218
- 山田一郎、庄子貞雄 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」「多賀城跡」昭和57年度発掘調査概報 宮城県多賀城跡調査研究所年報1979 pp.97-102
- 横須賀倫達、奥山誠義 2006 「勿来金冠塚古墳出土遺物の調査」 II『福島県立博物館紀要』20 pp.23-46

## 調査成果の普及と関連活動

### 1. 主な広報・普及・協力活動

年月日	行事名称	担当	主催
2010. 4. 14	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田	八本松市民センター
4. 19	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田	古代史の旅
6. 5	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田	歴史を学ぶ会
6. 18	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田	八本松市民センター
6. 25	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田	東北大学文学部
7. 6	郡山遺跡展示室見学	佐藤（正）	仙台市立東長町小学校
7. 13	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田・熊谷	中田中部町内会連合会婦人部
7. 20	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	森田・熊谷	太白区婦人防火クラブ連絡協議会郡山支部
10. 8	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	熊谷	旭ヶ丘老杜大学
10. 27	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	長島	岩切探訪の会
10. 29	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	整備活用係	ディスカバー太白 区内探訪会
11. 14	J R 小さな旅	整備活用係	J R 長町駅
11. 17	郡山遺跡展示室見学	長島	南相馬市教育委員会
2011. 1. 18~20	職場体験学習	佐藤（正）	仙台市立八軒中学校2年生
4. 8~ (毎月 8 日)	薬師堂手づくり市	整備活用係	薬師堂手づくり市実行委員会

### 2. 調査指導委員会の開催

大野田官衙遺跡調査現地指導 平成22年9月1日・7日

平成22年度 郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会

平成23年3月4日 仙台市役所2階第4委員会室

・平成22年度の調査成果について

・平成23年度の調査計画について

### 3. 展示室の利用者

平成22年4月～平成23年3月 361名



展示室見学風景



薬師堂手づくり市

## 報 告 書 抄 錄

仙台市文化財調査報告書第394集

## 都山遺跡 31

平成22年度発掘調査概報

— 都山遺跡・大野田官衙遺跡・法領塚古墳 —

2011年3月

発行 仙台市教育委員会  
仙台市青葉区二日町1-1

文化財課 TEL 022(214) 8893

印刷 モリタ印刷株式会社  
仙台市太白区都山八丁目20-30  
TEL 022(216) 0105

